

595
-23

595-423

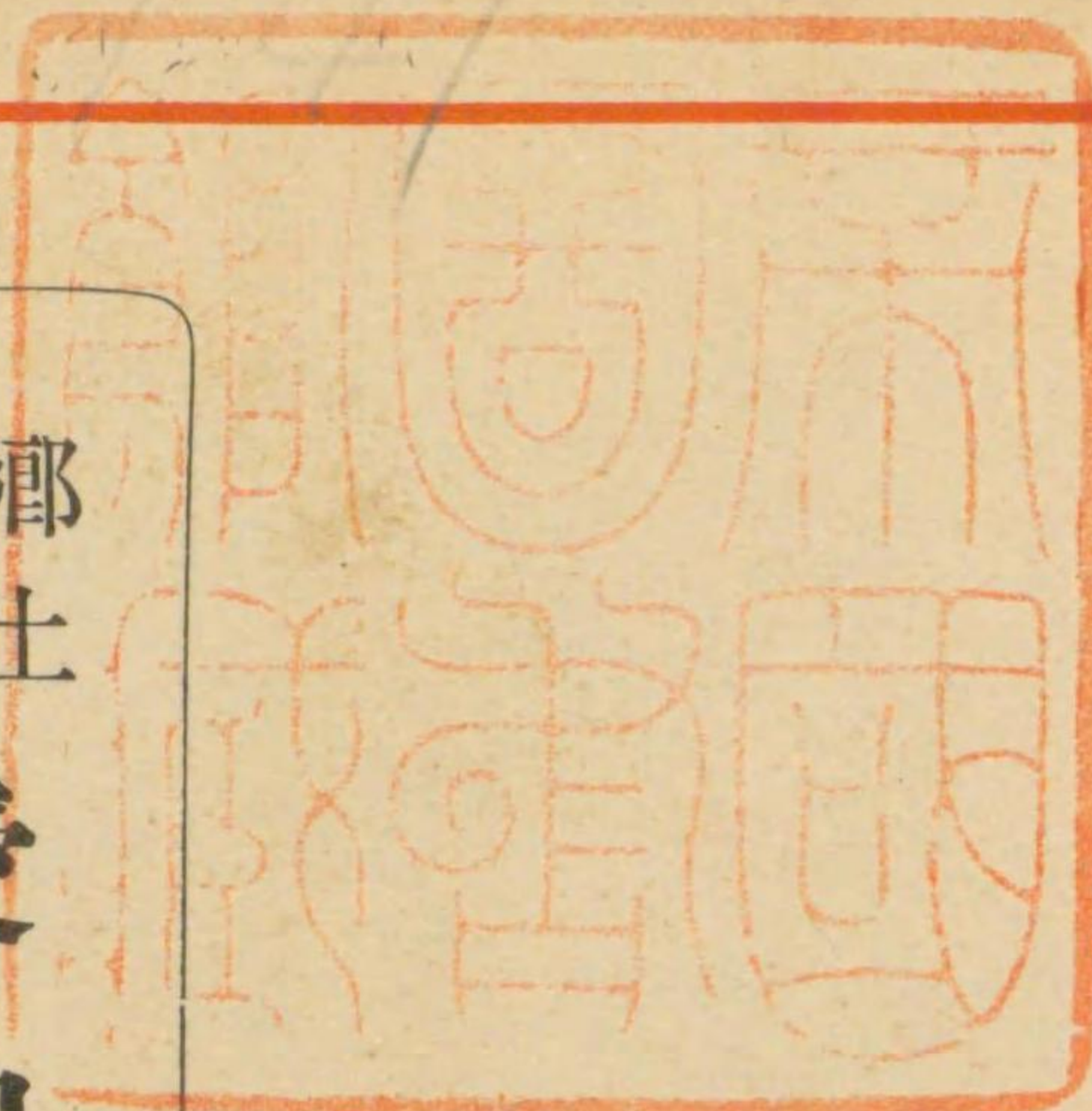


1200501527626



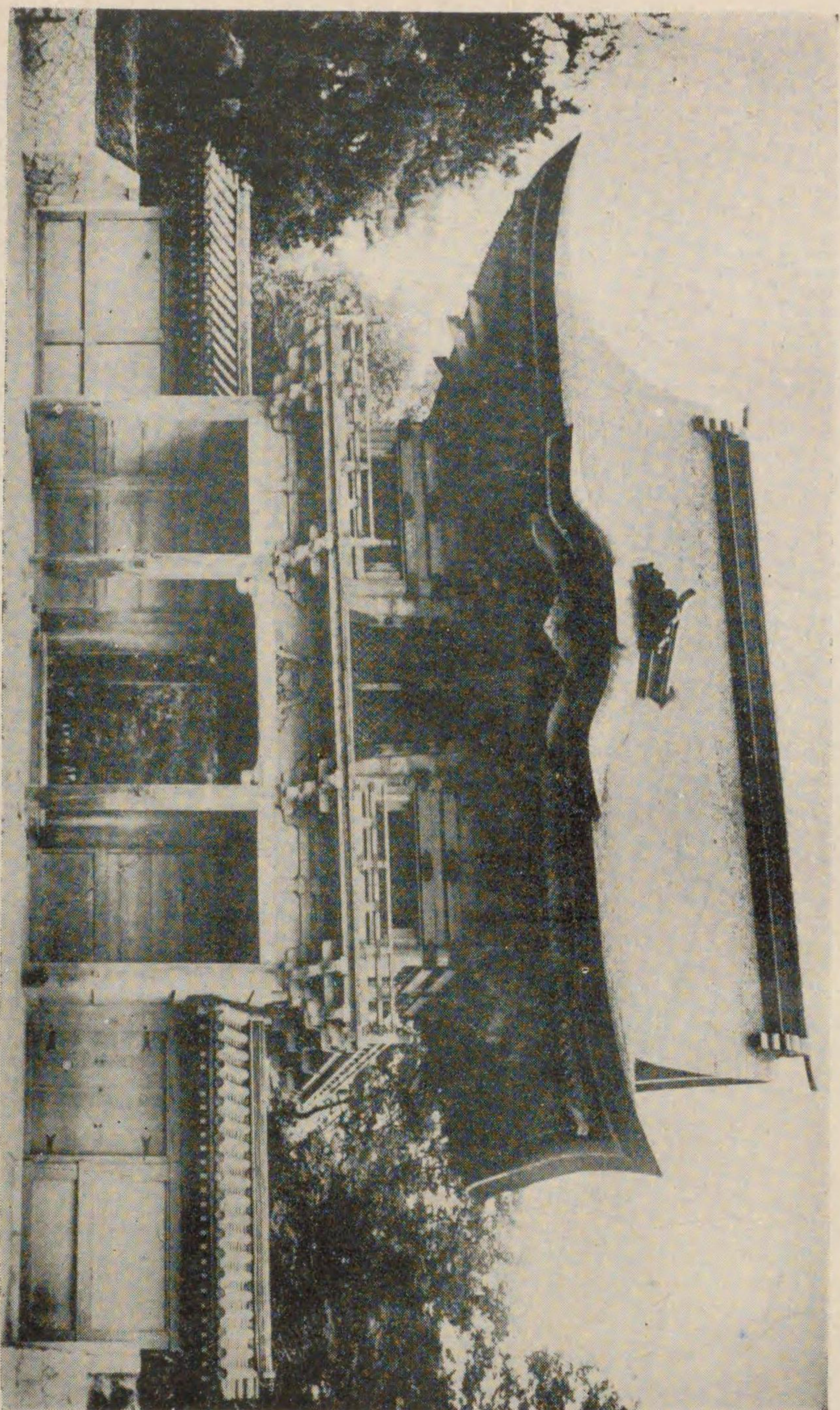
33.8.14

郷土研究
愛知縣史要

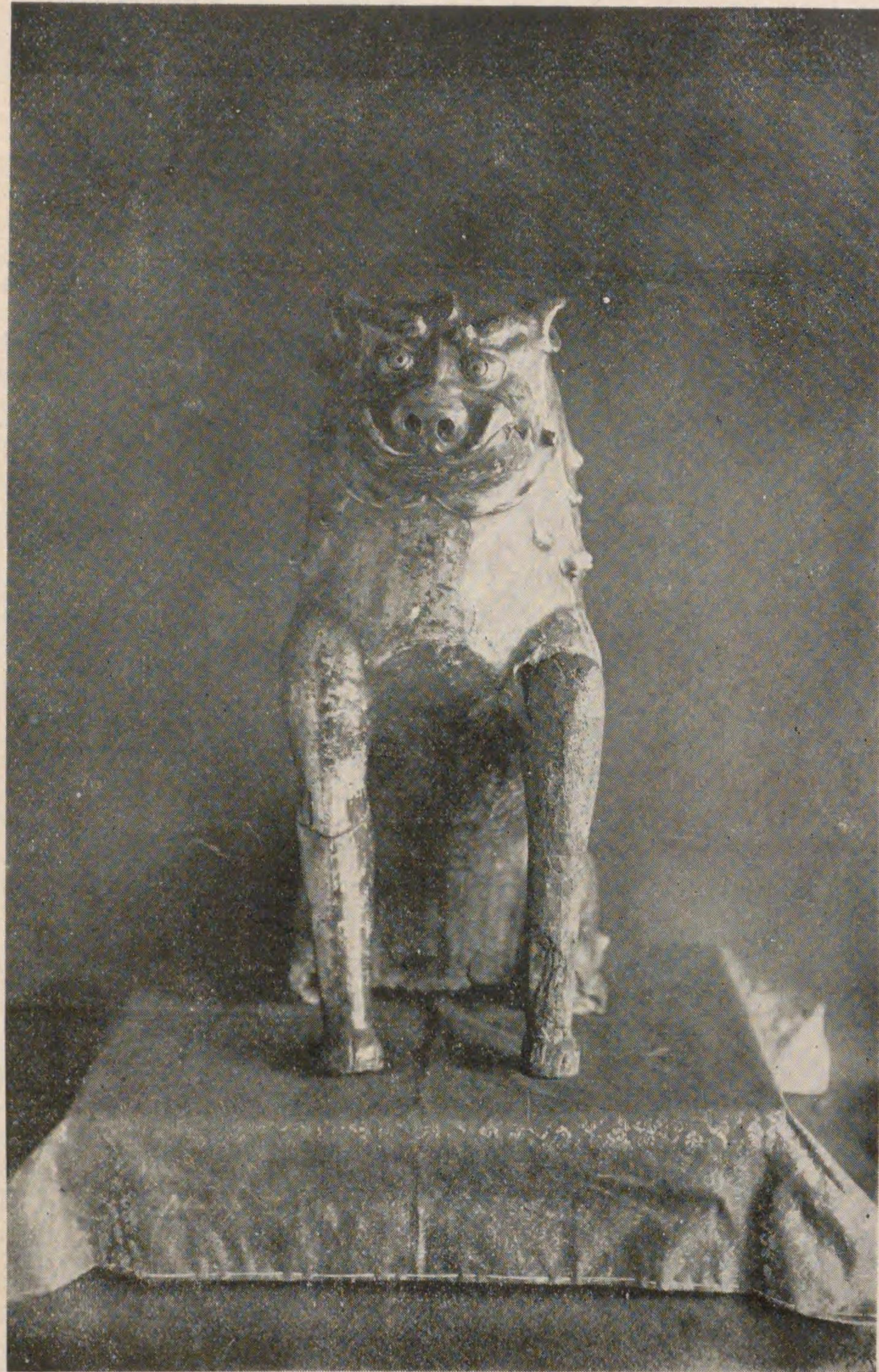


愛知縣教育會編





(門皇鎮物造建寶園) 宮 神 田 敷



(作正景藤加祖陶傳) 犬狛製陶寶國

凡

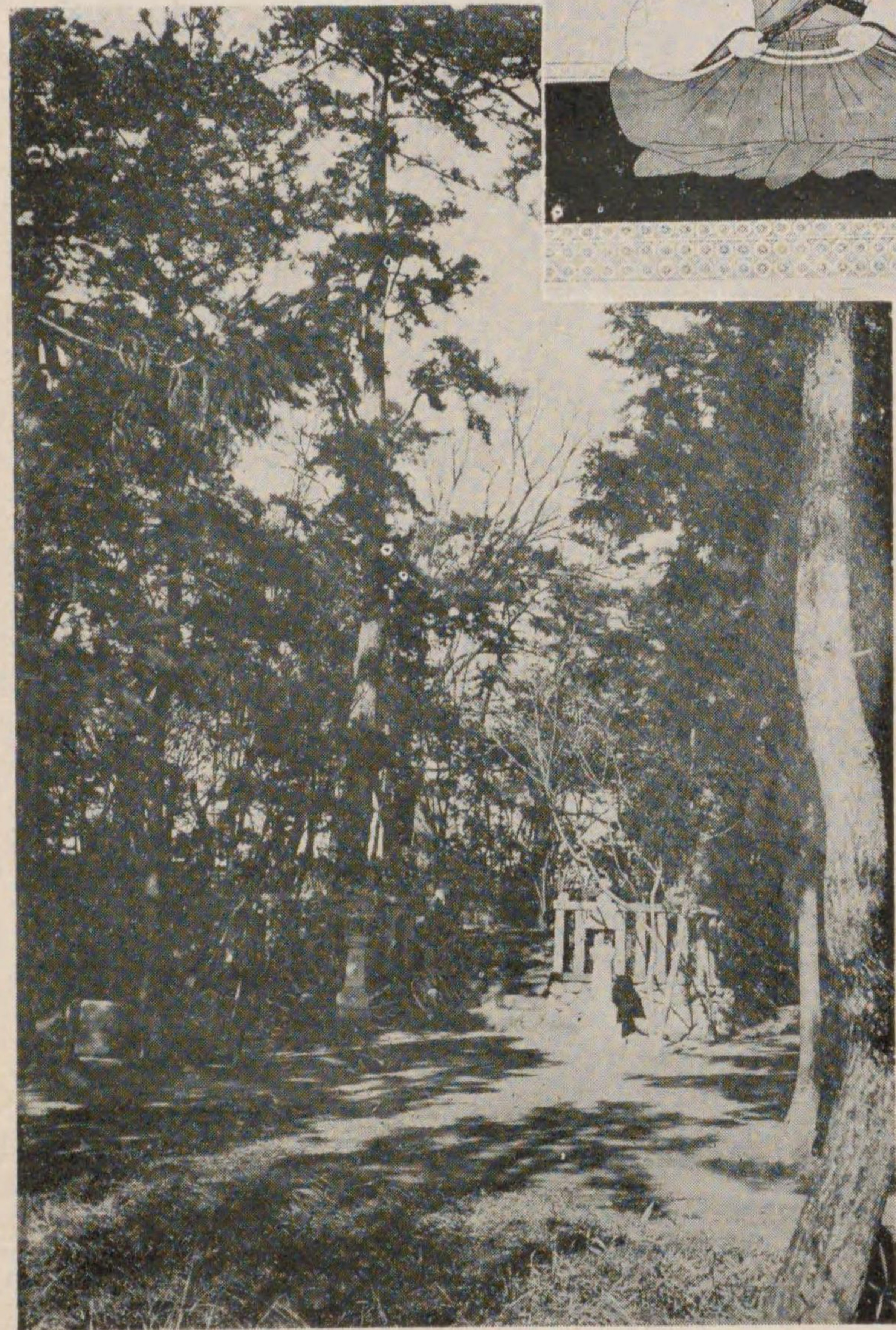
日

生乃武家其年若好雷力其路决
策到猛勇弓学机由弓兵等浪在
術亦属一尺之陆戦地欲形决
生事三十一叠突兵先通只上貴
重故重忠切不無不心先振百元
業茂傳子弱弱八股甲使刃指而
界下正八幡火岩控屋敬白

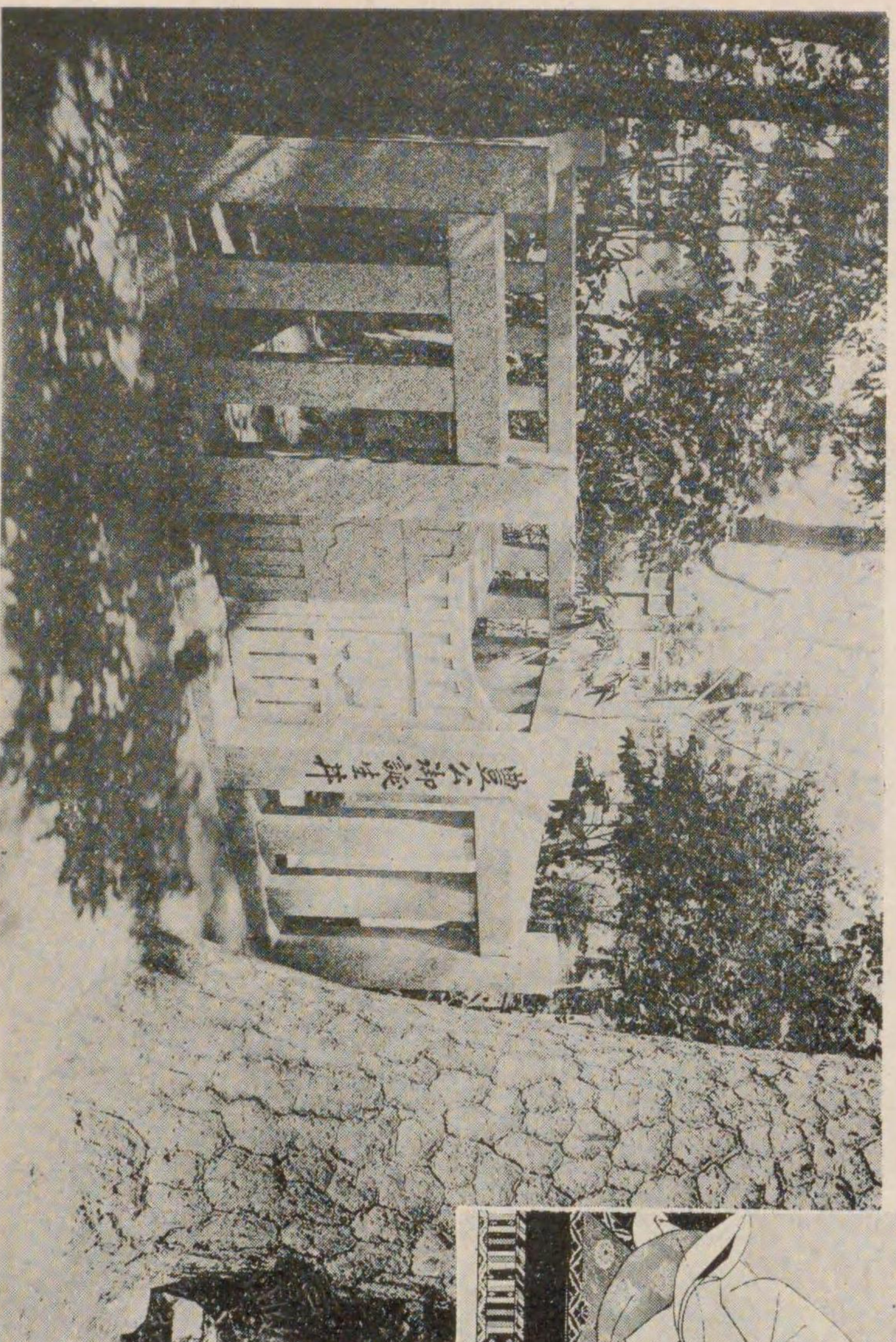
元 了 仲 旬

三河國逢坂原重助

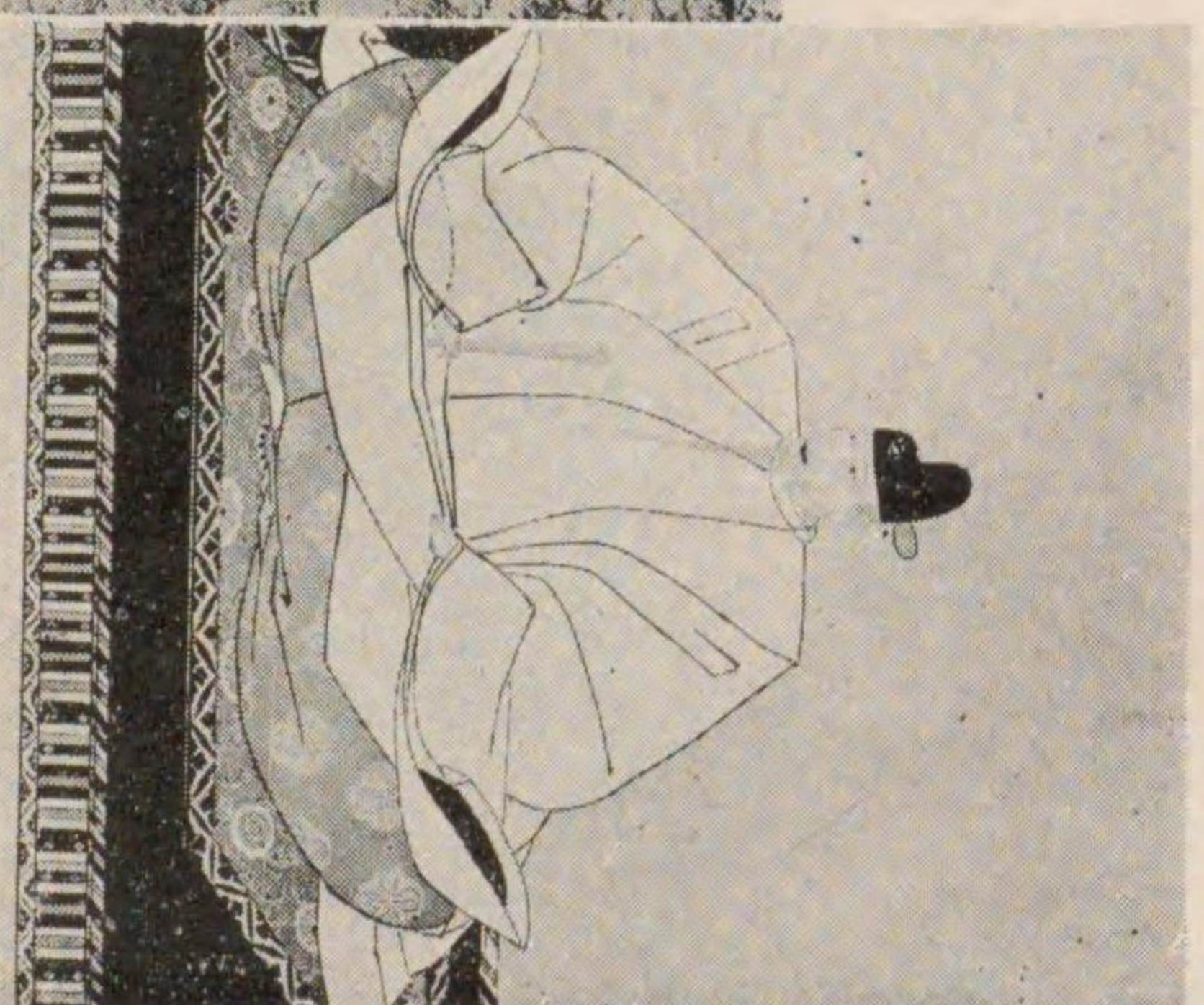
旗の範重助足傳

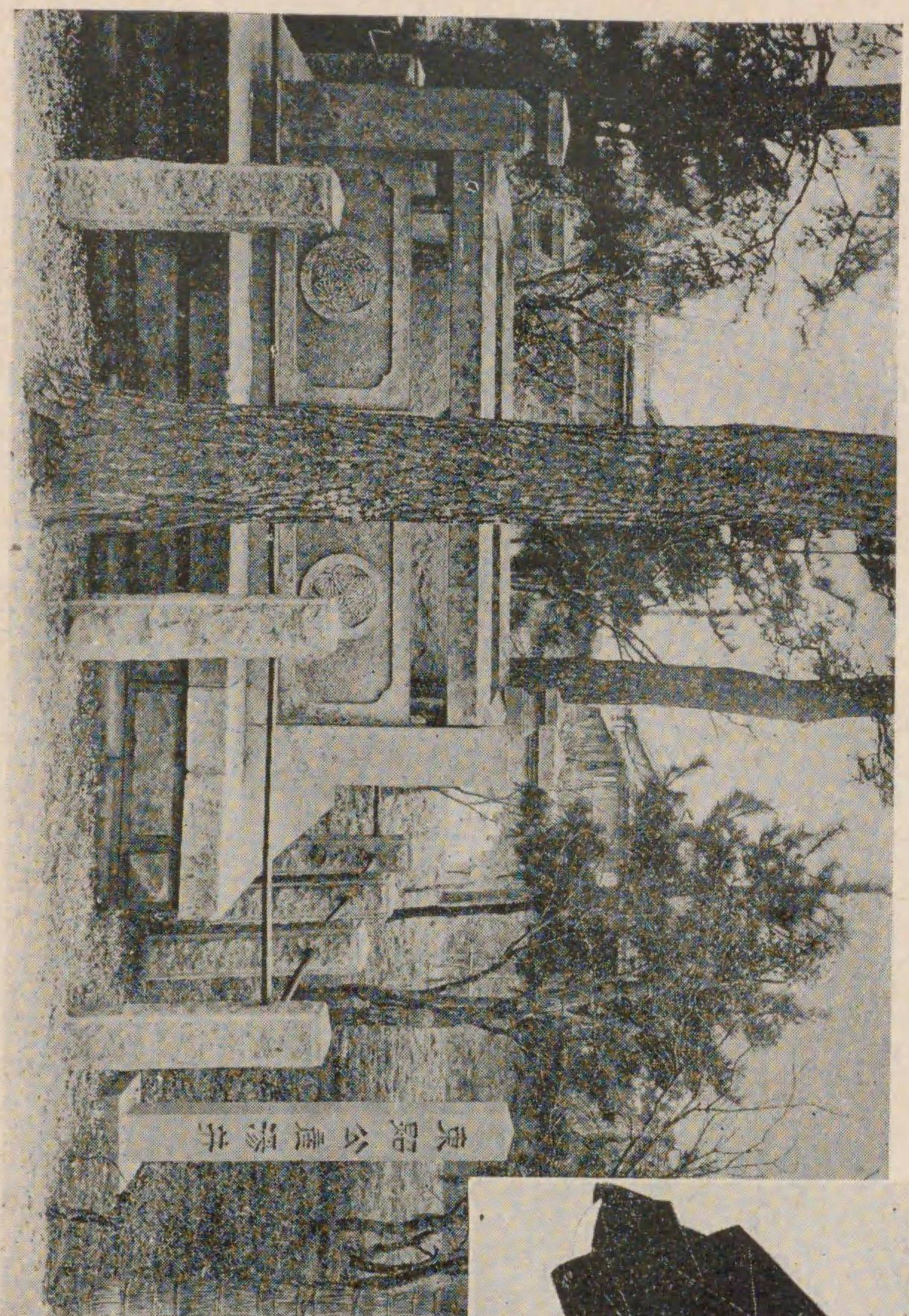


織田信長肖像と清洲城址

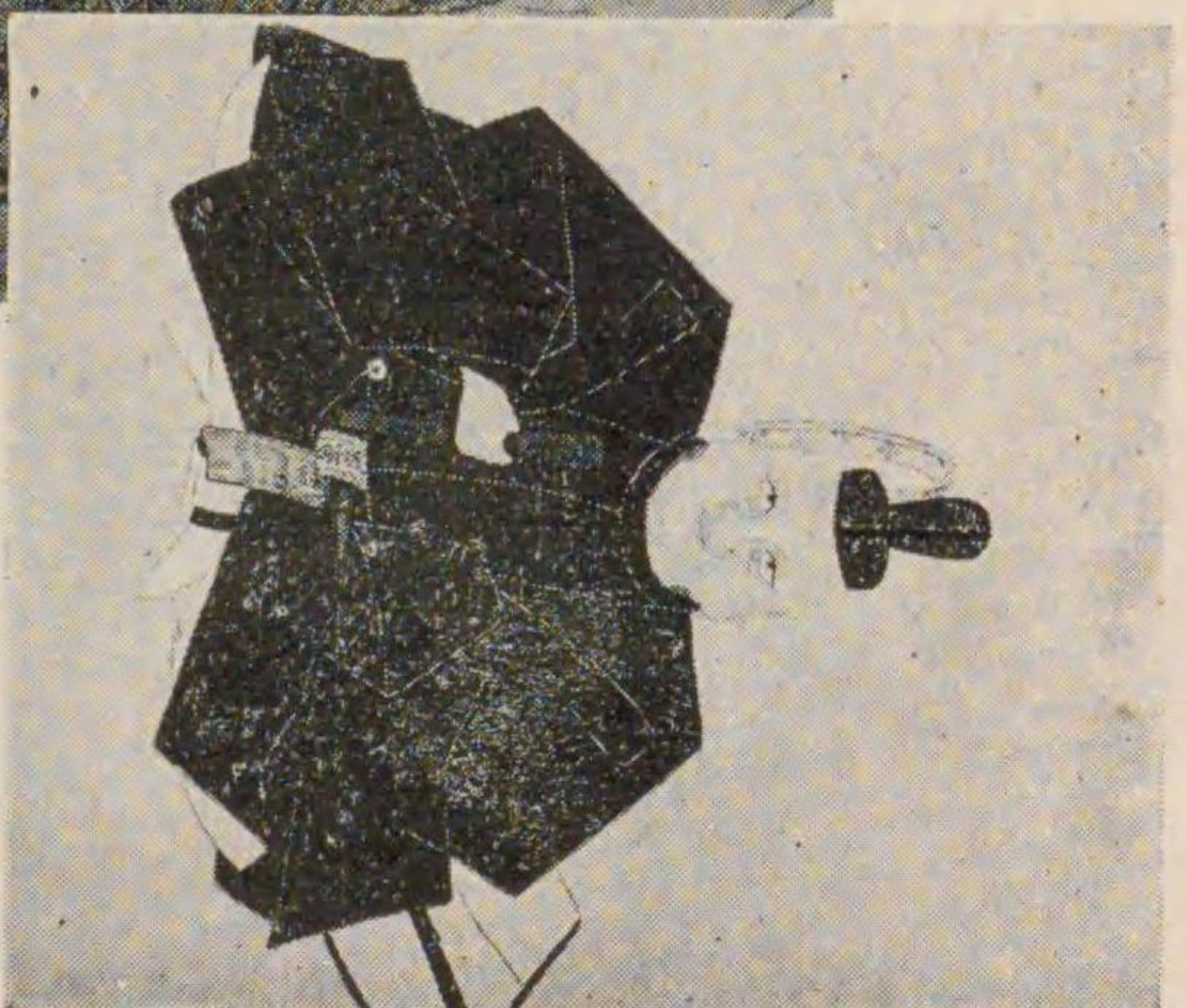


豊臣秀吉肖像與其誕生地





徳川家康肖像與其誕生地





報國以死處事
 詳身披凶賊義
 杖槍去志元出
 解揚亦楚王國
 明甲三狂

告

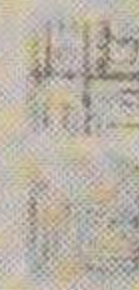
天文二年壬戌

孟冬應

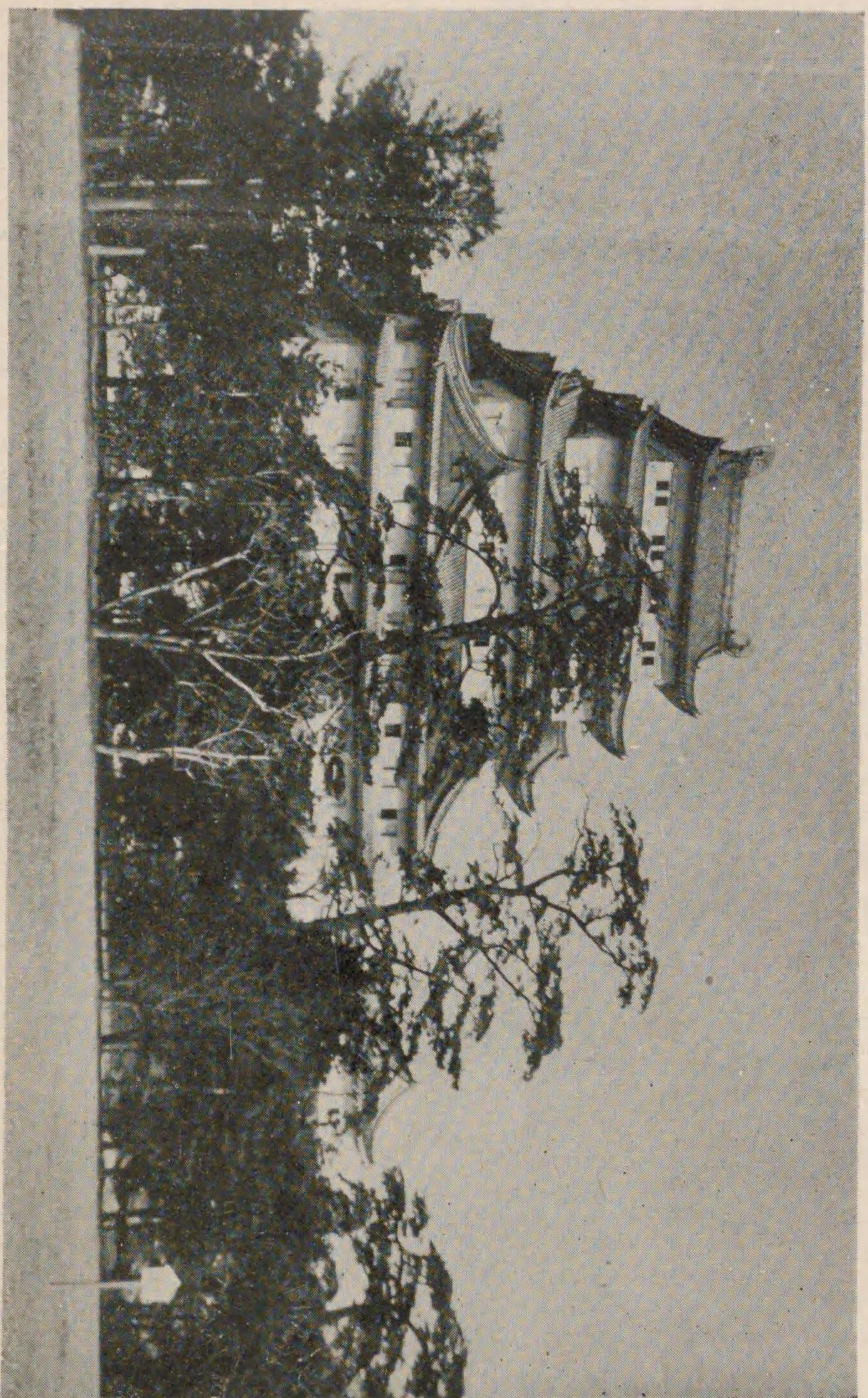
尾崎大將為慨然

難題

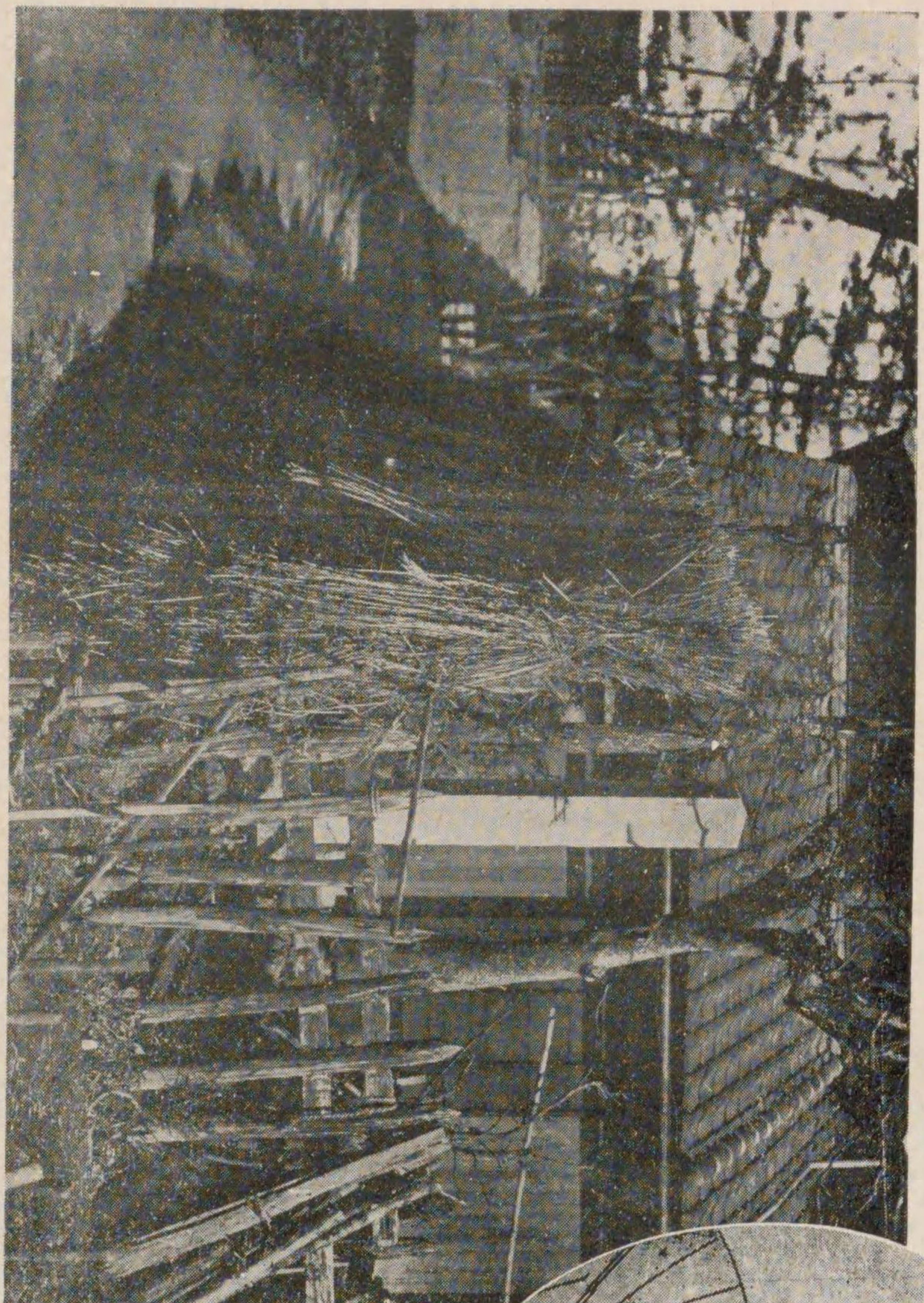
阿年山居



鳥居勝商殺圖
 (菊池容齋筆)



名古屋城



地生誕其と像肖洲平井細



不忠不孝渡邊登

渡邊華山



渡邊華山肖像とその絶筆

595-423

序

輓近郷土史研究の氣運は時代的欲求により生れたる一の思潮となつて現れ、地方自治の觀念を旺盛ならしめ、國民思想を涵養する上の根柢として郷土に關する知識を十分に領得せしむることが最も緊要であると叫ばれるに至つた。

凡そ世界の人類多しと雖も、己が郷土の洵美を讚へない人類はあるまい。炎熱燬くが如き熱帶の住民も、積雪山をなす寒地の土人も、郷土といへば其處に捨て難い執着を覺える。況んや造化の粹を鍾め、金甕無缺の國体を誇る我が國土の人民が、各の其の育まれたる郷土に對して離れ難い愛着を感ずるのは無理からぬことだと謂はねばならぬ。吾人は此の郷土愛

によつて郷土研究を促がされ、郷土研究によつて先人の生々たる脈動を感得し、更に熾烈なる郷土愛を促進される。此の熾烈なる郷土愛こそ疑つて以て熱烈比無き愛國となるのである。げにや健全なる國民性は郷土愛の情操より醸成されるものに外ならない。

抑も我が尾三の地は、京畿の東國に對する咽喉に當り、海陸共に氣候温和にして物産豊かに、交通又極めて便利である。従つて古代優良民族の移住も早く、王朝時代には己に或は上皇の御幸となつて大宮人の詠草に上り、或は悠紀の國となつて五節の舞姫が優艶な舞袖を翻し、武家時代には幕府の近親一門封を受け東海の中樞として重きをなした。而も吾が縣が頼朝、信長、秀吉、家康の如き國史上著名なる人物を始め英雄豪傑を雲の如く輩出せしめた事は他縣の敢て匹儔を許さない處で、吾が縣民の大なる誇とする所である。翻つて現代に見よ。之等英傑の子は商工業界に活躍し幾多新進氣鋭の士を出して、其の繁榮既に三府を凌がんとしてゐるではないか。

惟ふに郷土の歴史を闡明し、其の真相を把握せんとするは人類の本能に基因し、尙又郷土人としての義務であり、權利である。況んや其の地方が過古に於て一國文化の消長に關與し、將又將來に於てより重大なる關與を有せんとする地方に於ては、此の義務と權利とは更に大なるものがあるらねばならぬ。此の意味に於て本書を編纂し以て本縣の郷土研究に敢て一石を投じ、且又郷土人の渴を醫するさゝやかはる一資料としたのである。

例言

一、書は晩近郷土研究の高調せられるに際して、縣民としての殊に中等學校修了程度の知識階級者の一般常識として心得べき郷土に於ける史實を知らしむる爲に小學校乃至は中學校國史教科書と關係ある愛知縣内の史料を蒐集整理して編纂したものである。

二、本書は第一編を總説、第二編を尾張部各説、第三編を三河部各説に分ち、附録として卷末に年表及び國寶一覽を附した。第一編に於ては上古より現代に至るまでの一般國史を概説し、特に縣内に關係ある部分を稍々詳説して一貫せる愛知縣通史として縣内變遷の概要を知らしめ、第二編第三編に於ては各その地方に於ける人物史蹟を凡そ其の年代の順を追うて記述し、郷土を年代的に知らしむるやうに努めた。

一、委員が分擔して編輯したのであるから、行文の措辞、語脉、叙述の精粗等にも幾分の相違を免れなかつたが、これは態と調整しなかつた。

一、本書に輯録した外に尙重要な幾多の資料が残されてゐるであらうが、委員の淺學菲才なる、其の撰衡にも考證にも適切精覈なるを得ず、杜撰不備の点も亦多からうと思ふ。更に大方諸賢の御批正を仰ぎ、増補訂正を期することを得ば幸甚である。

昭和六年九月 日

委員 識す

郷土研究 愛知縣史要目次

第一編 總 說

第一章 上古時代の文化並に文化……………一

第二章 中古時代の文化並に文化……………五

第三章 近古時代の文化並に文化……………一〇

 第一節 鎌倉時代……………一〇

 第二節 室町時代……………一六

 第三節 戰國時代及安土桃山時代……………一七

第四章 近世時代の文化並に文化……………二四

第五章 現代一般……………四九

第二編 尾張部各説

目次

二

一、尾張一宮と二の宮……………五三

(1) 眞清田神社……………五三 (2) 大縣神社……………五四

二、日本武尊と尾張……………五五

(1) 日本武尊の御東征と白鳥古墳……………五五 (2) 宮簀媛命と斷夫山古墳……………五七

(3) 建稻種命と内津神社……………五九

三、熱田神宮と八劍宮……………六〇

(1) 熱田神宮……………六〇 (2) 八劍宮……………六三

四、津島神社と津島祭……………六三

(1) 津島神社……………六三 (2) 津島祭……………六四

五、尾張國分寺址と國廳址……………六五

(1) 國分寺址……………六五 (2) 國分尼寺址……………六五

(3) 國廳址……………六六

六、尾張大國靈神社と國府宮祭……………六六

(1) 尾張大國靈神社……………六六 (2) 國府宮祭……………六七

七、尾張四觀音と密藏院……………六七

(1) 甚目寺……………六七 (2) 笠覆寺……………六八

(3) 觀音寺……………六九 (4) 龍泉寺……………六九

(附) 密藏院……………七〇

八、二村山と年魚市湯……………七一

(1) 二村山……………七一 (2) 年魚市湯……………七四

九、小野道風の事蹟……………七六

一〇、融通念佛の開祖良忍……………七六

一一、大御堂寺と其の附近の史蹟……………七六

(1) 大御堂寺の沿革及現状……………七六 (2) 義朝の最後……………七九

(3) 附近の史蹟||義朝、政家夫妻、信孝の墓、安養院等……………七九

一二、源賴朝の誕生地……………八〇

一三、承久亂と山田重忠一族の勤王……………八一

(1) 山田重忠……………八一 (2) 重忠一族の勤王……………八二

(3) 長母寺……………八二

一四、大橋、堀田兩氏の勤王……………八三

(1) 大橋定省……………八三 (2) 同 定元……………八四

(3) 堀田正泰……………八四 (4) 同 正重……………八四

一五、千秋親昌の勤王……………八五

一六、陶祖加藤春慶と磁祖加藤民吉……………八六

(1) 陶祖加藤春慶……………八六 (2) 春慶の碑……………八七

(3) 磁祖加藤民吉……………八七

一七、寶生院及七ツ寺と國寶……………九〇

目次

三

(1) 寶生院……………九〇 (2) 寶生院の寺寶……………九一
 (3) 七ツ寺……………九三 (4) 七ツ寺の國寶……………九四
 一八、篠島の史蹟……………九五
 (1) 篠島……………九五 (2) 伊勢神宮と篠島……………九五
 (3) 吉野朝廷と篠島||篠島聖跡||帝井等……………九七 (附)可睡齋等膳……………九七
 一九、妙興寺と曼陀羅寺……………九八
 (1) 妙興寺……………九八 (2) 曼陀羅寺……………九八
 二〇、織田氏の興起と勝幡城址……………九九
 (1) 織田氏の勃興……………九九 (2) 勝幡城址……………一〇〇
 二一、織田信秀と末森城址及萬松寺……………一〇一
 (1) 織田信秀……………一〇一 (2) 末森城址……………一〇一
 (3) 萬松寺……………一〇三
 二二、織田信長の偉業……………一〇四
 (1) 織田信長の事蹟||生立、其事業、成功の原因、勤王敬神……………一〇四
 (2) 平手政秀と政秀寺……………一〇八 (3) 清洲城址……………一〇九
 二三、桶狭間古戰場と關係史蹟……………一一一
 (1) 桶狭間古戰場……………一一一
 (2) 關係史蹟||大高城址、鷺津砦址、丸根砦址、鳴海城址、善照寺砦址、丹下砦址、中島砦址……………一一三
 二四、織田信長の一族……………一二五

(1) 織田氏の系譜……………一二五 (2) 織田信忠……………一二六
 (3) 同 信雄……………一二六 (4) 同 信孝……………一二七
 二五、柴田勝家と佐久間盛政……………一二八
 (1) 柴田勝家……………一二八 (2) 佐久間盛政……………一二九
 二六、丹羽長秀と佐々成政……………一三〇
 (1) 丹羽長秀……………一三〇 (2) 佐々成政……………一三一
 二七、英雄豊太閤と北の政所……………一三三
 (1) 秀吉の生立……………一三三 (2) 其出世……………一三三
 (3) 海内一統……………一三四 (4) 勤 王……………一三四
 (5) 政 治……………一三五 (6) 外 征……………一三六
 (7) 薨 去……………一三六 (8) 誕生地……………一三七
 (9) 北の政所……………一三八
 二八、小牧城址と小牧合戦……………一三九
 (1) 小牧山……………一三九 (2) 小牧城址の沿革……………一三〇
 (3) 小牧合戦……………一三三
 二九、長久手古戰場と關係史蹟……………一三四
 (1) 長久手古戰場……………一三四 (2) 長久手合戦……………一三四
 (3) 關係史蹟||小幡城址、岩崎城址、首狹間其他……………一三七 (附)森長可の事蹟……………一三九
 三〇、池田信輝と同輝政……………一三九

目次

(1) 池田信輝……………一五〇 (2) 池田輝政……………一四〇

三一、前田利家と荒子城址……………一四二 (2) 荒子城址……………一四二

三二、加藤清正と其誕生地……………一四三 (2) 清正の誕生地……………一四三

(1) 加藤清正……………一四三 (2) 正則の誕生地……………一四七

三三、福島正則と其誕生地……………一四七 (2) 正則の誕生地……………一四七

(1) 福島正則……………一四七 (2) 正則の誕生地……………一四七

三四、淺野長政と同幸長……………一四七 (1) 淺野長政……………一四七 (2) 淺野幸長……………一四八

三五、蜂須賀正勝と其子家政……………一四九 (1) 蜂須賀正勝……………一四九 (2) 同家政……………一五〇

三六、増田長盛と長束正家……………一五一 (1) 増田長盛……………一五一 (2) 長束正家……………一五二

三七、堀尾吉晴……………一五三

三八、山内一豊と其夫人……………一五四 (1) 山内一豊……………一五四 (2) 一豊の夫人……………一五五

三九、徳川義直と名古屋城……………一五六 (1) 徳川義直……………一五六 (2) 名古屋城……………一五六 (3) 平岩親吉……………一六〇

四〇、定光寺と建中寺……………一六一 (1) 定光寺……………一六一 (2) 藩祖徳川義直墓……………一六一 (3) 建中寺……………一六一

四一、名古屋の三名社……………一六三 (1) 東照宮……………一六三 (2) 那古野神社……………一六三 (3) 若宮八幡社……………一六三

四二、犬山城址と成瀬氏……………一六五 (1) 犬山城址……………一六五 (2) 成瀬正成……………一六五 (3) 成瀬正肥……………一六六

四三、東西別院と高田派別院……………一六九 (1) 西本願寺別院……………一六九 (2) 東本願寺別院……………一七〇 (3) 高田派専修寺別院……………一七一

四四、本遠寺と高岳院……………一七二 (1) 本遠寺……………一七二 (2) 高岳院……………一七二

四五、八事山興正寺……………一七三

四六、江戸時代に於ける尾張の學者、文學者……………一七五

(一) 儒學者……………一七五

甲、堀杏庵と京學派……………一七五 (1) 堀杏庵……………一七五 (2) 京學派……………一七五

乙、松平君山と其學派……………一七七

目次

目次

(1) 松平君山……………一七 (3) 君山學派……………一七

丙、細川平洲と其門流……………一七

(1) 細井平洲……………一七 (2) 平洲の誕生地……………一七

(3) 平洲の門流……………一八

丁、冢田大峯と其學統……………一八

(1) 冢田大峯……………一八 (2) 其學統……………一八

(附) 儒醫淺井圖南……………一八

(一) 國學者、歌人……………一八

(1) 尾張の國文學……………一八 (2) 天野信景……………一八

(3) 吉見幸和……………一七 (4) 植松有信……………一八

(5) 小澤蘆庵……………一八

(三) 俳人……………一八

(1) 内藤文章……………一九 (2) 横井也有……………一九

(3) 加藤曉臺……………一九 (4) 井上志朗……………一九

四七、同時代に於ける美術家……………一九

(1) 概観……………一九 (2) 田中訥言……………一九

(3) 宮川長春……………二〇 (4) 僧月僊……………二〇

(5) 中林竹洞……………二〇 (6) 山本梅逸……………二〇

四八、同時代に於ける事業家……………二〇

(1) 竹田庄九郎と有松綾……………二〇 (2) 鬼頭景義の功業……………二〇

四九、維新前後に於ける勤王家

(3) 梶常吉と七寶燒……………二二

(1) 徳川慶勝……………二二 (2) 田宮如雲……………二七

(3) 植松茂岳……………二九 (4) 尾崎八衛……………三〇

(5) 尾崎長知……………三一 (6) 丹羽賢……………三一

(7) 田中不二麿……………三三

五〇、明治時代に於ける人物と史蹟……………三三

(1) 佐藤牧山……………三三 (2) 西川鯉三郎……………三四

(3) 伊藤圭介……………三五 (4) 森槐南……………三七

(5) 石川素童……………三八 (6) 山本梅莊……………三八

(7) 加藤高明……………三〇 (8) 八代六郎……………三一

(9) 豊竹呂昇……………三三 (10) 其他の知名人物……………三三

(11) 明治天皇覽禮所……………三三 (12) 覺王山日蓮寺……………三三

第三編 三河部各説

一、景行天皇の諸皇子と三河に於ける遺跡……………二七

(1) 大碓命御陵……………二七 (2) 猿投神社……………二七

(3) 氣入彦命御陵……………二六

二、三河總社……………二六

(1) 總社……………二六 (2) 砥鹿神社……………二六

(3) 知立神社……………二四〇

三、鳳來寺……………二四〇

四、三河に於ける歌枕……………二四一

(1) 宮路山……………二四二 (2) 八橋……………二四二

(附) 糟谷磯丸……………二四三

五、三河國分寺……………二四七

六、瀧山寺……………二四六

七、財賀寺……………二五一

(附) 三河七御堂、三河五山……………二五一

八、足助重範の一族……………二五二

(1) 足助重範……………二五三 (2) 足助城址……………二五四

(3) 足助神社……………二五四 (4) 香積寺……………二五四

(5) 風外……………二五五

九、妙嚴寺……………二五五

一〇、長興寺……………二五六

一一、小豆坂……………二五六

一二、鳥居強右衛門勝商……………二五七

(1) 長篠城址……………二五七 (2) 奥平信昌……………二五七

(3) 鳥居勝商……………二五六

一三、野田城址……………二五九

一四、山本勘助……………二六〇

一五、徳川家康……………二六一

(1) 三河八代……………二六一

(一) 松平親氏……………二六二

(三) 松平信光……………二六三

(五) 松平長親……………二六三

(七) 松平清康……………二六四

(二) 稱名寺……………二六五

(4) 徳川家康……………二六六

(6) 本多忠勝……………二六六

(8) 本多正信……………二六九

(二) 松平泰親……………二六三

(四) 松平親忠……………二六三

(六) 松平信忠……………二六三

(八) 松平廣忠……………二六四

(3) 岡崎城址……………二六五

(5) 大樹寺……………二六七

(7) 榊原康政……………二六九

(9) 酒井忠政……………二七〇

目次

(10)	大久保忠教	二七〇	(11)	鳥居元忠	二七一
(12)	平岩親忠	二七一	(13)	成瀬正成	二七二
(14)	板倉勝重、重宗、重昌	二七三			
	一六、石川丈山	二七四			
	一七、西尾城址	二七五			
	一八、加藤嘉明	二七六			
	一九、吉田城址	二七七			
	二〇、青山忠俊	二七六			
	二一、土井利勝	二七九			
	二二、小野湖山	二七九			
	二三、兒島閑窓	二八〇			
	二四、羽田野敬雄	二八〇			
	二五、大岡忠相	二八一			
	二六、松本奎堂	二八二			
(1)	刘谷城址	二八二	(2)	松本奎堂	二八二
(3)	宍戸昌明	二八五	(4)	倉田銈太郎	二八五
	二七、渡邊華山	二八七	(2)	渡邊華山	二八七

(3)	渡邊小華	二八九	(4)	鈴木春山	二八九
(5)	村上範致	二九〇			
	二八、三河に於ける社會事業家	二九〇			
(1)	明治用水	二九〇	(2)	都築彌厚	二九一
(3)	岡本兵松	二九二	(4)	伊豫田與八郎	二九二
	(附) 明治川神社	二九三			
(5)	古橋源六郎暉兒	二九三	(6)	古橋源六郎義真	二九四
	二九、志賀重昂	二九五			
	三〇、土屋光春	二九六			
	三一、今井鎌三郎	二九七			
	三二、佐々木月樵	二九八	(2)	上宮寺	二九八
(1)	佐々木月樵	二九八	(4)	西方寺	二九九
(3)	清澤滿之	二九九			
	三三、悠紀齋田	三〇〇			

目次

郷土研究 愛知縣史要

第一編 總說

第一章 上古時代の 大勢並に文化

愛知縣教育會編

神代の昔、大國主命先づ出雲地方を經營せられ、次いで瓊瓊杵尊は天祖天照大神の神勅を奉じて日向の高千穂の宮に降臨まし／＼て後、御三代の間は此の地に徳教を布き給うたが、やがて神武天皇は大和地方を平定して樞原の宮に祭政一致の建國の大業をお開きになつた。其の頃から我が國家組織も大凡整頓したが皇威の及ぶ處は尙僅かに近畿地方に限られてゐて、吾が尾張三河の如きも未だ蒙昧の域を脱しなかつた。然るに崇神天皇の御代四道將軍の派遣などがあり、漸く中央部との交渉が繁くなつたやうである。武渟川別命は大和より伊賀伊勢を経て此の地方に來られた事は明白だが、只尾張に其の後裔の裳昨臣モラヒノオミがゐた外遺憾ながら何等の史實も残つてゐない。

尾張は和名抄に乎波里と註し、古書に尾治、又小針とも作り、修して尾州とも張州とも呼び、大和河

内に起つた尾張連の兼治した國であるが、尾張氏入國以前に於ける當國の状態は史籍に漏れてゐて殆んど知るよしが無い。しかし京畿に近く、東海に對する咽喉を占めてゐるから中央貴族の來往もあり其の文明は割合に早く此國に注入されたに違ひない。

其の頃此の地に居た部族としては、今の海部、中島郡地方に海部があり安曇氏に率ゐられ、丹羽郡あたりには、邇波縣君大荒田があつて支配してゐた。其の女王姫は尾張氏建稻種に嫁してゐるから相當勢力があつたらしい。愛知郡には尾張大印岐が勢あり、國造尾張氏と姻を通じ、中島郡には三輪氏族が榮え、葉栗郡には葉栗臣が、知多郡には知多臣が勢があつた。

尾張の國造に最初に任ぜられたのは、天別ノワケホアカリノミコト火明命（瓊々杵尊の御兄、一説には御子ともいふ）十世の孫（國造本紀には十世の孫さあるも、熱田縁起及天孫本紀には何れも十一世の孫さあり）尾張氏小止與である。（國造本紀には成務朝に始めて任ぜられたやうに見えるが、小止與は景行朝に活動した建稻種の父であるから垂仁朝前後に己に入國してゐたやうである）小止與は尾張大印岐の女眞敷刀婢を娶つて、建稻種及び美夜受比賣（宮簀媛）を生んだ。

日本武尊は東征の途伊勢から當國に入り愛知郡氷上邑（今の知多郡大高村）の尾張氏建稻種の宅に泊し、美夜受比賣と婚約を結び、數日の後御自身は海道を下り、建稻種をして山道を下らしめ給うた。尊の陸奥に入り給ふや建稻種も來り會し、かくて東伐の功を終へて歸途稻種は甲斐酒折宮より別れて海道から上り途中駿河に於て薨じた。尊は山道より尾張に歸り給ひ、美夜受比賣を上げて妃とせられた。後尊は草薙劍を、美夜受比賣の許にとゞめ、出でて膽吹山の賊を討ち病を得て都に直行し給うたが、

伊勢の能褒野に於て薨ぜられた。比賣は追慕やまず、留め置かれた神劍を以て御靈代となし社地を定めて奉齋した。これが即ち熱田神宮である。

景行天皇は、尊の薨去を痛く悼ませられて、其の御名代として諸國に建部を置かれたが、當國の建部は尊の御子武田王が率ゐられた。それが丹羽建部君である。

建稻種の子尻綱根命は尾張第三代の國造である。其の妹尻綱眞若刀婢（志理郡紀斗賣）は五百城入彦命の妃となりて品陀眞若王を生み奉つた。品陀眞若王は更に尻綱眞若の妹金田屋野姫を娶り其の三女は應神天皇の後妃に上げられ、仲姫は仁德帝の御生母である。斯様な外戚關係から尾張氏は一層榮え尾張一國の民政はもとより間敷屯倉（中島海部）、入鹿屯倉（丹羽）等を管理して盛大な勢力をふるつてゐた。

三河は和名抄に參河、三加波と註し、古書には皆參河と作つてゐるが、後世専ら三河に作り、又修して參州ともいつてゐる。

當國で最も古い氏族では安曇氏と三輪氏とであらう。尤もそれらの入國以前に東人系統の種族が居住してゐた事は勿論である。

當國はもと三河と穂との二國で、國造本紀によると、前者の國造は成務朝、後者の國造は雄略朝の創設となつてゐる。

穂の國は寶飯郡を中心とする地方即ち東三河の稱であつて、國造本紀による國造以前に己に穂別と呼ばれる國造があつた（古事記開花の段）。其の穂別の祖美己止直（朝廷別王）は開化天皇の曾孫で丹波道主命の

子である。其の族丹波氏は日本武尊の東征に従つて功を立てた。雄略朝葛城襲津彦の後裔菟上足尼が國造に任命されてゐる。

三河國は矢作川を中心とする西三河の稱であつて、國造には物部連の祖出雲醜大臣シホオミの後裔知波夜命チハヤが成務天皇の御代に初めて補せられてゐる。

此の外地方の豪族としては御立史ミタチ(碧海)、大伴部(八名、幡豆、碧海)、青海首(碧海)、衣君(許呂母之別)、(加茂)、高巢鹿別タカスカ(渥美)、宮道氏(寶飯)、安曇氏(渥美)、などがあつた。

さて我が皇威は次第に遠きに及んだが、成務天皇の朝には國縣の分界を定め、國造・縣主・稻置・村主等を増置して地方政治を整へられて朝廷の權威は益々四方に振つた。神功皇后が新羅征伐の壯舉を敢行し給ひて後は、大陸文化がしきりに輸入せられ、儒教佛教の傳來は精神文化の發達を促し、物質文明又長足の進歩を見た。ついで聖德太子の攝政時代には支那大陸との交通も開け庶政大いに振ひ所謂飛鳥時代を現出した。

古傳説などによつて考察するに我が大和民族は上古から既に相當に進歩した文化を有し倫理道德の思想も發達し民俗は清潔を好み快活で進取の氣象に富み、特に忠孝の觀念尙武の精神が盛んであつたやうである。こゝに至つて朝鮮支那印度希臘等の文化は吾が固有の文化と融合して日本文化の基礎をなしたのである。

聖德太子は深く佛教を信じ給ひ、自ら教を説き給ふと共に攝津の四天王寺、大和の法隆寺を始め國々に多くの佛寺を建立し給うた。

縣下の寺院で太子の創建と傳ふるものは左の三ヶ寺であるが、其の眞偽の程は疑はしい。尙矢作町の妙源寺の太子堂に安置する像は太子の自作と傳へられ國寶に指定されてゐる。

光明寺(知多郡大野町)

上宮寺(碧海郡矢作町)

本證寺(碧海郡櫻井村)

第二章 中古時代の文化

上古の氏族制度は、一種の封建制度で、豪族が土地人民を私有して種々の弊害が生じたから、孝德天皇の御代隋唐の制に倣つて、根本的に大化の改新が斷行された。即ち版籍奉還が行はれて、中央集權の制となり、國郡の政を布いて各國に國司郡司が派遣せられて内治も次第に整頓した。(喜田博士は國に古い時代からあつたといはれる)この改革は文武天皇の御代大寶律令の制定されるに及んで略完成した。最初の國司に任命せられた人は尾張では小子部連鉏鉤チヒサコベノムラジサヒチ(書紀弘文元年六)で、三河國は許勢朝臣祖父(續日本紀大寶元年正月に見ゆ)

である。當時國司の駐割した公廨即ち國府は尾張では中島郡(今の一宮の東方國府宮の西松下)にあつて文武天皇の大寶二年(一三六二)には持統上皇の東國御巡幸の御事があり、十月此の國府に御駐輦、駕を三河まですゝめさせられた。三河の國府は寶飯(今寶飯に作る)郡にあつた。

かくて奈良奠都が行はれ、壯麗なる都城が建設せられて、爾來七十餘年の間の奈良時代には學問藝術

が著しく發達し、史書・地誌・歌集が編纂されて文物燦然として興り、殊に聖武天皇の御代には佛教の興隆に伴ひ美術工藝の發達は實に目ざましいものがあつて所謂天平時代を現出した。

聖武天皇は特に佛教を信じ給ひ、國家安穩・五穀豊作を祈る爲に天平十三年諸國に令して國分寺(金明四天王)及び國分尼寺(法華滅罪の寺)を建てしめられた。國分寺は通例國府所在地附近に置かれ、國分寺の國師・讀師は國司と協力して地方文化の開發を謀つた。現在國分寺の多くは廢絶に歸してゐるが、尙往

時の規模を偲ばしめる遺物遺跡を留めてゐるものは若干ある。(吾が愛知縣に於ては中島郡明治村(尾張)寶飯郡八幡村(三河)に残つてゐる)かく佛教の興隆につれ、名僧亦輩出し、中にも行基は諸國を巡つて寺を建て、教を弘め、民利を計つ

たから上下の尊信を受け、行基菩薩と崇められた。しかし佛教獎勵の爲僧徒の勢力漸く強大を加へ、其の弊の及ぶ所遂に道鏡の事あり、幸に和氣清麿の忠誠によつて、之を斥くる事を待たけれども、政

治は次第に亂れ、爛熟した奈良文化はやがて沈滞して來た。

縣下で行基の開基と傳へられてゐる寺院は次の通である。

- 長福寺(名古屋市中區門前町)……俗に七ツ寺といふ。
- 護國院(西春日井郡楠村) 地藏寺(一宮市)
- 龍照院(海部郡蟹江町) 岩屋寺(知多郡内海町)
- 法藏寺(額田郡本宿村) 財賀寺(寶飯郡八幡村)
- 窟觀音(渥美郡二川町) 東觀音寺(渥美郡二川町)
- 法言寺(八名郡石卷村) 富賀寺(八名郡八名村)

藥王寺(碧海郡矢作町西本郷蓮華寺。又同町の北野廢寺趾ともいふ)

國府には公廨國分寺の外に神社があつた。之を總社といつた。

さて桓武天皇は沈滞しきつた佛教政治の弊を一新せんが爲に都を平安に遷された。かくて前代の弊政を改め、又大いに蝦夷を征して皇化を邊境に布き給ひ、嵯峨天皇の御代には文物制度大いに面目を改め日本的文化の興起を促し、漢文學又隆盛を極めた。佛教も亦最澄・空海によつて日本化せられ、神佛調和の思想を參酌して時代に適合した天台・眞言の新宗派が開かれ上下の信仰を得た。最澄・空海は諸國を巡回して教を説き、殊に空海は道路を開き、橋梁を架け、水利を通ずるなど、民利を興したことが少くない。

縣下の寺院で最澄・空海の開基と傳へるものは左の通りである。

- 龍泉寺(東春日井郡志段味村) 最澄空海兩僧の開基
- 高田寺(西春日井郡師勝村) 最澄の開基
- 常安寺(〃 郡豊山村) 空海の開基
- 性海寺(中島郡稻澤町) 〃
- 蓮華寺(海部郡美和村) 〃
- 櫻井寺(額田郡豊臣村) 〃

前代より佛教文化の興隆につれて次第に隆盛となつた漢文學は平安時代の初期に至つて益々盛んとなつたが遣唐使の廢止せられて以來漸く衰へ、これに代つて國文學が著しく勃興し、和歌の隆盛と假名

文の流行とは在原業平・紀貫之・凡河内躬恒・紫式部・清少納言等歌人女の輩出となり、藝術又漸く日本化せられて豊艶優美の特色を發揮し、書道の如きも次第に國風を帯び一條天皇の御代には小野道風・藤原佐理・同行成等の名手が出た。繪畫の巨勢金岡・宅磨爲成、彫刻の定朝等も亦特筆すべきものである。

かゝる間に藤原氏は漸く勢を得、遂には皇室の外戚を以て世々攝政關白に任じ榮華と權勢とを恣にした。而も政治に努めず遊惰逸樂を事とした爲、文學藝術は特殊な發達を遂げた。けれども政綱弛廢し社會の秩序紊亂して盜賊亂徒跳梁するも、廷臣之を平ぐるに力なく、地方の豪族や寺院は兵を養つて自ら守つた。これが武士の起である。朝廷はこれら武士の力をかりて、承平天慶の亂・前九年後三年の役等の叛亂を平げ給うたので武士の勢力、就中源平二氏の勢力は益々加はつた。後三條天皇は大いに藤原氏を抑へ給うたが、御子白河法皇以後院政行はれて政權は全く院中に移つた。

かくて藤原氏一族間及び源平二氏の政争は遂に保元の亂・平治の亂を醸し、平氏遂に勝利を得て藤原氏に代つて政權を執つたが、忽ちにして文弱の風に染み、その榮華も槿花一朝の夢と化して遂に西海に亡んでしまつた。

平治の亂

二條天皇の平治元年十二月、都には平治の亂起り、源義朝は破れて東國に走り鎌田正家の案内で、舊

臣である野間内海の長田莊司忠致の許に身をよせた。然るに忠致・景致の父子は逆心を存し、翌二年(永曆元年)正月義朝を湯殿に誘致して弑した。當時頼朝は十三歳を以て從軍し父の後を慕つて近江まで逃れたが平宗清の手に捕へられ、池の禪尼の哀憐によつて死一等を減せられ、同年三月伊豆に流された。

頼朝は近衛天皇の久安三年四月はたや村(南區熱田旗屋町 誓願寺の境内)に生れ童名を幡屋(ハタヤ)の武屋王といつて、母は熱田大宮司藤原季範の女である。

かくて源氏の勢力は全く地を拂つたのに反し、平氏の勢は次第に強大となり、其の驕暴は日に甚だしく、遂には後白河法皇を幽し奉るに至つた。

源氏の擧兵と平氏の滅亡

高倉天皇の治承四年(一八三七)四月源頼政は平氏の驕暴を憤り、皇叔父仁王に勸め平氏追討の令旨を乞ひ、源行家をして諸國の源氏に傳へしめた。頼政は平等院に敗死したが頼朝之に應じて伊豆に起り、石橋山の一戦に一敗地に塗れたけれども捲土重來富士川の對陣に戦はずして平氏を潰走せしめ、其の勢は日に強盛となつた。時に源義仲は信濃に、山木義經及柏木義兼は近江に、源行家は尾張に起つて頼朝に應じた。平氏は焦慮して連りに源氏追討の兵を分遣したが、其の成績は渺々しからず、翌養和元年閏二月には清盛焦慮の中に薨じ、次子兼を領して自家の維持に盡した。同三年平重衡・維盛・忠度等は七千餘騎を率ゐて源行家を尾張洲股河(スノノマタ)に討つて大いに之を破り僧義圓を斬つた。行家は小熊・熱田に退

いて又敗れ參河に走つて矢作川の東岸を保ち、額田郡の兵の來援を得て勢復振ひ、遂に平軍を西に走らせた。かくて源氏の軍次第に振ひ、平氏は一ノ谷、屋島に敗れ、遂に壇浦に滅びた。

尾參の國勢

當時に於ける尾參の國勢を和名抄によつて比較して見ると、三河國六十七郷六千八百町歩に對して、尾張は六十二郷一萬一千町歩であつて、開墾の田地は遙に廣く地味亦肥沃ではあつたが、木曾川汎濫の爲年々害を蒙つて寧ろ收穫不確實であり、而も其の美濃との交堺さへ古來頗る變遷が多かつた。従つて古くは三河の國が餘程榮えて悠紀國に卜定された事も數回である。

第三章 近古時代の大勢並に文化

第一節 鎌倉時代

高倉天皇の治承四年^(一八三七)、源賴朝は羈府を鎌倉に開き武家政治の端を發したが幾何もなく、弟義經と確執して守護地頭を置くや、大屋安資を三河、安達盛長を尾張の守護に補した。やがて義經衣川に自殺し天下統一するや、賴朝は京師に朝せんとし建久元年十月鎌倉を發し、尾張を過ぎ義朝の墓に禮し、十一月後鳥羽天皇、後白河法皇に謁し、十二月關東に歸つた。^(其途宮路山中に宿つた)次いで賴朝は征夷大將軍に任

ぜられ名實共に武家政治が出来上つた。

賴朝は朝廷をあがめ勤儉尙武の政を布き、力めて民力の休養を計つたので、頗る時宜に適し天下はよく治つたが、猜疑心が深く、其の骨肉を殺したから、外戚北條氏ひとり權を專らにし、源氏の正統は僅かに三代で絶えた。この期に乗じて後鳥羽上皇は朝權恢復の擧を企てさせられ北條義時追討の院宣を下し給うた。

承久の亂

仲恭天皇の承久三年^(一八八一)五月、後鳥羽上皇は北條氏の專横を憤らせ給ひ、順徳上皇と謀つて、關東征伐の兵を徵し給うたので、義時は泰時・時房をして兵を率ゐて上京せしめた。京方では藤原秀康・三浦胤義等官軍を督して進發、之を美濃尾張に防ぐべく大井戸・鵜沼、板橋・摩免戸^{マメド}・洲股等を守つた。己にして泰時・時房は尾張一宮に着し、軍を別つて各方面に向はせた。かくて東軍の將武田信光の爲に大井戸渡が、又北條時氏の爲に摩免戸が敗れると、其の他の要害も皆守を失つて官軍は西に敗走した。時に尾張の住人山田次郎重忠は、食渡^{じよのわたし}(美濃國羽栗郡)を守つて獨り殘留、關東軍の伊奈三郎行政と戦ひ利あらずして退き、次いで藤原忠信、源有雅等と宇治勢多に防いだが衆寡の勢敵し難くして潰滅し、遂に三上皇は隱岐、佐渡、土佐に遷され給うた。かくて朝權はかへつて衰へ、幕府の勢は愈々固くなつた。殊に泰時・時頼の善政はよく人心をつなぎ、時宗は元寇を擊退して偉功を立てたけれども

財政漸く窮乏に陥り、次第に衰頹の兆を生じた所に、高時の失政、人心の離叛をまねき元弘の亂を醸した。

元弘の亂

これより先、高時政を失ふや、(一九八四)正中元年後醍醐天皇は後鳥羽上皇の御志を繼ぎ、高時の專横を憤らせ給ひ、日野資朝・藤原俊基・花山院師賢及び三河の武人足助重範・美濃の武人土岐頼貞・多治見國長等と朝權恢復の計をめぐらし給うたが、謀洩れ、謀議に參畫した資朝俊基は執へられ御企は遂に失敗に歸した。次いで元弘元年八月、天皇は再び討幕を企てられたが、又幕府の知る所となり、俊基は再び捕へられて鎌倉に送致された。

太平記に名高い俊基朝臣東下りの一節は此の時の事を叙したのである。

「いつか我身の尾張なる熱田の八劍伏拜み塩干に今や鳴海渦、傾く月に道見えて明ぬ暮ぬと行く道の末はいづくと遠江……」

かくて關東兵が大舉上洛したので、天皇は之を避けて笠置に幸して之に據り給うた。そこで北條時益同仲時等大兵を率ゐて來り侵し、足助次郎重範及其の子重政等奮闘善く拒ぎ關東軍は頗る苦戦したが幾何もなく城陥り、重範父子は捕へられて六條磔に斬られ、天皇は隱岐に遷され給ひ、其他謀議に參畫した公卿は夫々處分された。けれども人心は既に北條氏を離れてゐたから護良親王始め楠木正成・

新田義貞等の活動は諸國勤王軍の奮起を促し六波羅鎌倉相ついで陥つて、高時等誅に伏し、建武中興の新政が行はれた。

中先代の亂と足利尊氏の叛

及

吉野朝廷時代

王政復古して建武中興の大業は成つたが、輔弼の臣に乏しく、且其の政治が實務に當らなかつたのと國民が尊王の大義を解することが不十分だつたのによつて忽ち失敗に歸した。かねて武家政治の再興を望んでゐた足利尊氏は士民の不平に乗じて巧みに人心を收攬して時機の至るのを待つた。偶々建武二年七月北條時行其餘孽を嘯聚して亂をなし鎌倉を攻めたので、相模守足利直義は防ぐ能はずして走つた。尊氏は時至れりとなし、八月勅許を待たずして京都を發し、直義と三河の矢作川に會し、橋本及相模川に時行を破つて、鎌倉に入り、其の儘留つて擅に征夷大將軍と稱し、新田義貞を除くを名として叛をはかつた。かくて建武中興の業破れ、新田義貞は勅命により、尊良親王を奉じて弟脇屋義助と共に進發した。尊氏は之を聞き兵を發して、十一月二十五日三河矢作川に拒いだ。義貞は水に遠かりて陣し、弓手を出して射て賊を誘はしめると賊は果して川を濟つて進んだ。官軍は番を分つて戦ひ殺傷頗る多く、賊は鷺坂に敗走した。熱田大宮司千秋親昌(一説昌能。以下同じ)等更に追迫して又之を走らし、次いで手越河に克つたが、箱根竹ノ下に戦つて利なく、親昌百餘騎を率ゐて敵を支へてゐる間に義貞等は辛うじて退軍して尾張に屯したが、天皇は之を召還し給うた。尊氏は弟直義と共に大軍を

以て、官軍に尾し西上したので、官軍は之を大渡・宇治・勢多等に防いだり利あらず、天皇は已むなく神器を奉じて延暦寺に幸し給うた。千秋親昌等が供奉した。時に延元元年正月であつた。こゝに於て尊氏等は京都に入つたが、北畠顯家が義良親王を奉じて大兵を率ゐて上洛するに及んで、楠木正成等と謀を設けて尊氏を破り九州に走らしめた。しかし尊氏再舉東上し來り官軍利あらず、正成は湊川に戦死した。依つて天皇は吉野に遷幸し給ひ、賊を討たしめ給うたが南風競はず、名和長年・北畠顯家・新田義貞等相ついで戦歿したので、延元三年八月、天皇は北畠顯信をして義良親王を奉じて陸奥を鎮せしめられた。顯信の父親房之を輔けて伊勢の大湊を舟出したが、途中暴風に遭ひ、親王及顯信の舟は尾張の篠島に漂着した。親王は吉野に歸り給ひ顯信は後に征西府の懷良親王に屬して小貳氏と戦ひ斃れた。かくて官軍不振の中に天皇は崩ぜられ、義良親王が即位し給うた、後村上天皇と申上げる。此頃熱田大宮司親昌は尾張波津ヶ崎城(又羽豆、幡豆崎に作る)にあつて尙王事に盡した。又宗良親王は遠江にあつて東國を經營し給ひ、三河の人足助重範の子重春は信濃の人香坂高宗、駿河の人狩野介貞長等と共に親王をお輔けて南朝の爲に氣を吐いた。又尾張津島の人堀田正泰は楠正行に従つて王事に盡してゐたが後村上天皇の正平三年正行と共に四條畷に戦死を遂げた。次いで北畠親房薨するに及び諸國の官軍は益衰へた。やがて後龜山天皇は足利義滿の請を入れて京都に還幸あらせられて天下は統一したが、政權は足利氏に歸して再び武家政治の世となつた。

鎌倉時代の文化

此の時代は文化の中心が二つに分れ、京都の公家文化は優美華奢であつたが一般には鎌倉の武家文化即ち質實剛健の風が行はれ殊に武士の間には武士道が勃興した。佛教は打續いた前代末以來の戦亂の影響を受けて一層盛んとなつた。平安時代の初め最澄・空海によつて創められた天台・真言の二宗は漸く衰へ、時勢の變轉について一層日本化した淨土・眞(一向)・日蓮・時宗等の新宗派が起つた。又臨濟・曹洞の禪の二派は宋より傳へられた。中にも眞宗の開祖親鸞布教の足跡あまねきの中に、縣下碧海郡矢作町にある妙源寺は三河國最初の道場であつて親鸞の法弟信念房蓮慶(俗姓安藤信平と稱し桑子の城主であつたが親鸞に歸依して法弟となつた)の創建にかゝり、境内の太子堂は特別保護建造物に指定されてゐる。

文學では和歌が最も盛んであり、國文には和漢混淆文の一体たる軍記物が新に出で、漢文は全く衰へて僅かに僧侶の手によつて其の命脈を保つてゐた。

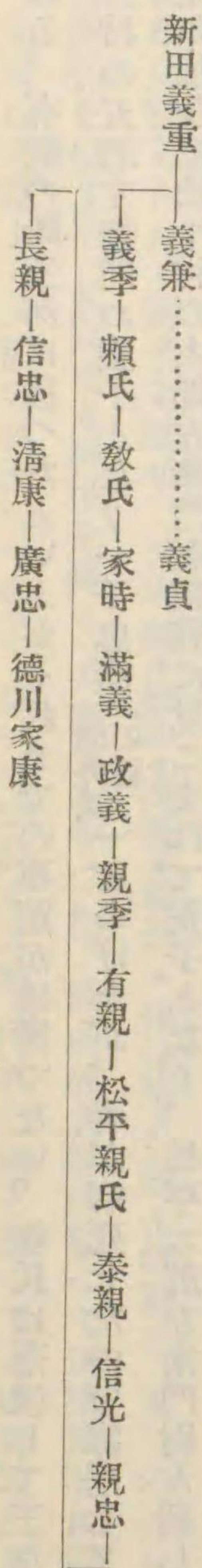
美術工藝方面では建築の新様式が支那から輸入せられて寺院邸宅の建造に影響を與へ、繪畫亦繪卷物に新傾向をあらはし、武器武具就中刀劍の製作等は時勢の影響を受けて著しく進歩し、彫刻界には運慶・湛慶の名工出でて雄渾の腕を揮つた(額田郡常盤村瀧山寺の鬼の面は運慶の作であるといふ)。此頃山城深草の加藤景正は僧道元に従つて入宋し製陶の法を習つて歸り、尾張の瀬戸に窯を開いて所謂瀬戸焼を始めてから、製陶の術は著しく進歩した。

を襲いで牛久保に居た牧野古白に命じて吉田城(當時今橋といつて今の豊橋)を築かしめて(後柏原天皇永正二年二一六五)根據とし、客將伊勢長氏をして屢々松平氏を侵かさしめた。當時今川氏に屬してゐた參河の豪族は戸田(二連木)牧野(牛久保)、本多(惠那)、鵜殿(西郷)、奥平及設樂(設樂)、菅沼の三家(段峯、長篠、野田)等であつて、松平氏は(長親)吉良氏と結んで之に抗した。やがて氏親は永正十四年尾張の守護斯波義達(サト)を破つて尾張に進出し、大永年中には氏親の末子今川氏豊をして那古野に城かして柳の丸と號した。かくて大永六年(二八六)氏親卒して子氏輝嗣いだが、松平氏の勢次第に振ひ長親の子清康は吉田・田原を略して東三河の諸族を服せしめ、後奈良天皇の天文元年(二九二)には勝幡の城主織田信秀は那古野を攻めて、之を奪つたのでこれより織田氏今川氏は隙を深めた。然るに天文四年守山崩(次節参照)に松平氏衰ふるや仙千代(廣忠)は遁れて今川氏輝によつたが、幾何もなく氏輝卒して弟義元つぎ織田氏と三河を争つた。同十一年織田信秀の三河上野城を攻むるや今川氏は松平廣忠を援けて小豆坂に戦つたが、却つて織田勢に破られた。同十七年(二九八)織田松平氏鳴原(又重原)に作る、今の刈谷町(二九八)の西野に戦ひ、安祥城は織田氏に奪はれた。今川氏は松平氏を救はんとして生田村に來り、再び小豆坂に戦つて、信秀を走らせたが、今川勢追撃して自ら備を亂し、織田勢に逆撃されて敗走した。同十八年織田信秀、松平廣忠相ついで卒し、今川勢は安祥をせめて城主織田信廣を擒にしたが、さきに織田氏に質となつてゐた松平竹千代(徳川家康)と笠寺に於て交換して兩氏の和睦が一時成立した。しかし今川義元は虎視眈々尾張美濃を略し一日も早く上洛して天下に號令せんとし、先づ弘治二年松平元信(竹千代、翌三年元康と改む)を岡崎の陣代として尾張を圖らしめ

た。次いで今川勢は漸次尾張を侵し、正親町天皇の永祿二年(二二九)には元康は重圍を冒して大高城に兵糧を入れて勇名を轟かした。かくて翌三年五月義元は大舉して尾張に入り知多郡沓掛を本據として諸軍を部署し松平元康は丸根砦に向つた。十九日丸根鷲津等を陥れ今川勢大いに驕り、義元は本營を田樂狭間に置いて、酒宴を開き警備を忽せにした爲、信長の奇襲に遇ひ周章狼狽措く所を知らず、義元は遂に戦死した。今川勢潰走し松平元康は岡崎に歸つた。今川氏の老將岡部元信は鳴海城を死守せんとしたが、今川氏眞の退却の命により、信長に乞うて義元的首級を貰ひ受けて歸國した。これより今川氏の勢大いに衰へたが、永祿六年(二二三)家康(此年改名)が氏眞と絶つた爲、翌七年氏眞は三河を侵し、一宮塞を攻めたが、家康の來るに遇つて退いた。其後今川氏は徳川武田兩氏の挾撃にあひ永祿十二年(二二九)氏眞遂に小田原に出走して滅びた。

松平氏漸く顯る

徳川氏の世系は明かでないが、新田氏の後といはれ、其の系統は次のやうに傳へられてゐる。



義季から教氏までは吾妻鏡にも見え、確かな文書(上野國新田庄世良田の長樂寺文書)も残つてゐる。義季は世良田郷得

川村に住んで得川氏といつた。得川氏が新田氏に従つて吉野朝時代に功を立てた事は太平記にも見え
てゐる。有親の時三河に移つたといふがそれまでの事蹟が確實でない。親氏は落魄して三河國碧海郡
酒井村の五郎左衛門の養子となり一子忠廣(酒井氏の祖)をあげたが、妻が病死したので寡居してゐると永
享元年(二〇八九)加茂郡松平村の太郎左衛門尉信重に見こまれて養子となり、松平太郎左衛門尉と稱したのが松
平氏の起であるといふ。親氏から廣忠までを三河八代といつてゐる。親氏の子泰親は參州目代となり
岩津に城きて居り、孫信光は織田氏の屬城安祥を奪つて此に居たが、後土御門天皇の長享元年(二一四七)今川氏の
客將伊勢長氏に奪はれた(聞書)翌二年八月今川氏親來り侵し、ついで伊勢長氏再び今川氏の軍將として
吉良義堯を降し桑子村に屯したが松平長親は討つて之を走らせた。長親の孫清康は後柏原天皇の大永
四年岡崎並に山中の城主松平信貞を降し、其の女を納れて岡崎城を得、安祥に鎮し、享祿元年(二一八九)には尾張
岩崎小野田城を略し、後奈良天皇の天文元年(二一九二)吉田城(牧野氏)を取り、田原(戸田)・作手(つくて)・野田・長篠・田
峯・牛久保・設樂・西郷・二連木等を悉く服せしめた。然るに天文四年に尾張の織田信秀の弟信光兄に
代らうとして清康に通じたので、清康は大舉して尾張を侵し、十二月守山城を攻むる際、其臣阿部定吉
の子彌七郎正豊の爲に過つて刺殺された。軍兵陣を纏めて三河に歸り織田信秀の追兵と伊田郷(井田野)
に戦つて之を斥けた。かくて仙千代(廣忠)が幼にして後を嗣いだ。翌五年松平信定(信忠の弟、清康の叔父)反逆を
企て織田氏に通じて岡崎城主となつたので、阿部定吉は仙千代を奉じて伊勢に奔り神戸の東條氏に據
り、後遠江より駿河に赴き今川氏輝に據つたが、六年五月岡崎に還つた。九年六月織田信秀は安祥城を

攻めたが、松平利長等よく防いだので効なくして退いた。同十一年信秀又三州に亂入し上野城を攻略
したので、今川勢は松平勢を援けて小豆坂に戦つたが敗れた。同十五年には廣忠上野城を奪還したが
形勢非にして救ひを今川義元に求め、竹千代(家康)を人質として駿府に赴かしめたが、田原の戸田彈
正少弼康光は伴つて半途に迎へ之を尾州の織田氏に送つた。廣忠は寛平三郎重忠をして、さきに叛い
て織田氏に應じた松平三左衛門忠倫を上和田塞に殺さしめたので、信秀大いに怒り上和田城に兵を入
れ、且數ヶ所の砦を築いて岡崎に迫つた。同十七年織田信秀遂に安祥城を攻略したので今川勢は松平
氏を救はんとして生田村に來り、再び小豆坂に信秀の軍と戦つたが反つて敗退した。同十八年三月松
平廣忠卒し、織田信秀も亦歿して一時少康を得たが十一月今川勢安祥城を攻め落し、城主織田信廣を
擒にして、先に織田氏に奪はれた竹千代と交換せんことを求めた。織田信長之を容れて一時今川織田
兩家の和睦が成立した。駿河に在つた竹千代は同二十三年十三歳にして元服し名を元信(二二四)と改めた。今
川織田の和議は己に破れ互に小鬪を續けてゐたが、弘治二年には元信が今川氏の陣代となつて岡崎城
に入つて敵を計つた。(三年元信は名を元康と改めた)。正親町天皇の永祿二年元康は義元の命により重圍を冒して大
高城に兵糧を入れて勇名を馳せ、又寺部・梅坪・廣瀬・舉母・伊保等の敵と轉戦し、翌三年五月今川義元
大舉尾張を侵すや、元康は丸根城を略し、大高城を守つた。時に義元勝に驕つて田樂狭間に討死したの
で、元康は大高より大樹寺に至つて屯し、次いで岡崎に入城、所在の敵と戦つて互に勝敗があつたが、
同五年正月信長と和睦し、次いで今川氏眞と絶つて、信長と結び、名を家康と改め徳川氏を稱した。や

がて永祿七年には三河の一向一揆を平げ翌八年遂に三河を統一して家康の武名漸く海道に高まつた。

織田氏の興亡

(後小松天皇御宇) 應永中斯波義重が尾張の守護職に補せられてから、子孫其の職を嗣いだが、其の身は京都にあつて國中の政治は守護代織田氏に委ねてゐた。守護の権力漸く衰ふるや、織田氏の勢は次第に強く寶徳の頃(一一〇頃)には己に小守護と稱して二派に分れて互に勢力を争つた。一は清洲に據りて下四郡を領し、一は岩倉にあつて上四郡を領した。應仁亂後文明九年(後土御門天皇二二七)義廉入國して清洲城にあり、孫義達(サト)に及び永正中駿河の今川氏親と争ひ破れて斯波氏の武威漸く尾張に衰へた。此の頃織田大和守達勝清洲城にあつて下四郡を守護し義達を輔佐して勢があつた。信長の家系は岩倉織田の庶流であるが、當時信長の祖父彈正忠信定は勝幡城を再築して居り其の領地は勝幡附近數邑に過ぎなかつた。然るに後奈良天皇の享祿五年(天文二一九)信定の子信秀は今川氏豊を破つて那古野城を奪ひ之に移り威名漸く近隣に振つた。(二一九)天文四年信秀の弟信光兄を除かうとして三河の松平清康に通じたので、清康來り侵し守山に於て家臣の爲過つて刺殺され、軍兵は陣を纏めて引揚げるのを信秀は八千人を以て追撃し伊田郷(井田野)に戦つて却つて敗れ歸つた。當時清康の叔父信定は織田氏に通じ岡崎城主となつた。これより信秀連りに三河を侵し、安祥上野等の諸城を攻め、(二二〇頃)同十一年には今川氏及び松平氏の軍を小豆坂に破つた。此の頃美濃では齋藤秀龍(入道)が、其の主土岐頼藝(ヨリヨシ)を革手城(カハテ)に攻めたので頼藝は逃れて尾張に走り信秀に依

つた。

(二二〇頃)天文十二年信秀は其の臣平手中務丞政秀をして四千貫を持して西上せしめ朝廷に献じ宮垣を修復し奉つた。十三年九月信秀は土岐頼藝の爲、尾張諸家の援助を得て美濃に入り、齋藤道三を稻葉城に圍んだが却つて破られて歸つた。十月連歌師宗牧女房奉書を持參して那古野に下り信長に對面、後奈良天皇勅書の救書を述べ、古今集一部を下賜せられた。十一月に齋藤道三は六角氏の援兵をかりて織田氏の屬城大垣を攻めたので、信秀は再び稻葉城を攻めた。時に清洲織田大和守の部下坂井大膳等が信秀の古渡城を攻めたので、信秀は急遽歸國して坂井氏と戦つたが、翌年之と和した。(二二〇七)十六年九月信秀濃州を侵し數處を焚き稻葉山城を攻めたが勝つ事能はずして退いた。此の年今川義元は松平廣忠に質を求めたので、廣忠は嫡男竹千代を駿州に遣したが戸田彈正伴つて半途に迎へ尾州熱田に送つた。信秀は大いに喜んで始め熱田の加藤圖書の宅に入れ、後名古屋萬松寺に移し居らしめた。かくて十七年(二二〇八)に鳴原(刈谷町)の西野に於て松平の勢と大いに戦ひ、ついで安祥城を奪還し、息信廣(三郎五郎)をして守らしめた。今川勢は松平氏を救はんとして生田村に來り小豆坂に於て信秀と大いに戦つた。信秀敗れて羽根村に退くや駿河方は北ぐるを追うて却つて備を亂したので尾州勢逆襲して之を敗り、守山は又織田氏の有に歸した。信秀は織田孫三郎信光をして之を守らしめ、更に鉾を轉じて美濃に入り火を縦つて侵掠したので、齋藤秀龍和を乞ひ女を以て信長に妻はし、又舊主土岐頼藝を迎へて揖斐城に居らしめた。翌十八年三月には信秀及び松平廣忠相ついで卒し、織田氏は二男信長が嗣をうけた。今川

氏は之に乗じ雪齋和尚・朝比奈泰能等をして安祥城を攻めしめたが勝たず、更に十一月再び安祥を攻め遂に城主織田信廣を擒にした。かくて信廣と先に質たりし竹千代とを笠寺に於て交換し、今川織田兩家の和が成立した。此頃より信長意や、傲り狂暴の振舞あり、傳平手政秀屢々之を諫めたけれども聞かず、同二十二年政秀は遂に信長を諫めて自殺した。信長は大いに之を悼み、追福の爲政秀寺を建立した。此歳木下藤吉郎秀吉が來り仕へた(或は永祿元年)。翌二十三年二月當時清洲に在つた斯波武衛義統(又義元に作)の子岩龍丸(義銀)が城を出て獵した隙に乘じ、城主織田彦五郎信友は坂井大膳・織田三位等と謀つて本丸にある義統を襲うた爲、義統は老臣三十四人と共に自殺した。岩龍丸は變を聞いて那古野に走つて援を信長に乞うた。信長は之を天王坊に置き、次いで清洲を攻めて織田三位を討取つた。信友は守山城主織田信光を招き城南矢藏に在らしめたが、信光は反つて信長に通じ、坂井大膳を逐ひ信友に詰腹を切らせた。こゝに於て信長は清洲を得て居を此に移し、那古野は信光に與へ、その弟孫十郎信次をして守山を守らしめた。時に弘治元年四月であつた。

正親町天皇の永祿三年五月、今川義元は大舉上洛せんとし駿遠參の精兵を率ゐて駿府を發し、沓掛を根據として諸軍の部署を定め、松平元康をして丸根砦を、朝比奈泰能をして鷲津砦を攻めしめ、本軍は葛山信貞等を先鋒として清洲城に向つた。信長は老臣林通勝の籠城説を斥け、十八日の夜半急に進軍を令し、酒を給ひ、自ら立つて敦盛の舞を演じ、東天紅を告ぐる頃熱田神宮に詣でて祈願を籠めた。恰も丸根鷲津の陥落の報に接したが、信長敢て驚かず、丹下善照寺の砦を経て三千人を得、梁田政綱

の勸を用ひて暴風雨の中を、急に義元の本營田樂狭間を襲つた。時に義元は捷報頻に來るのに酔ひ、酒宴を開いて警備を忽せにしてゐた爲、信長の兵至るや、軍中反者ありとて周章狼狽措く所を知らず、服部小平太忠次槍を以て迫り、毛利新助秀高義元と相搏つて遂に之を討取つた。爲に今川氏の全軍總崩れとなり、義元の雄圖も遂に一場の夢と消えた。今川氏の驍將岡部元信は鳴海城を死守しようとしたが、信長撤兵を説き、今川氏眞亦退却を命じたので、信長に請うて義元の首を得て東歸した。松平元康も亦岡崎城に歸つた。こゝに於て信長の威名大いに揚り海道一の弓取となつた。永祿五年には松平元康と和し、同七年には齋藤氏を亡して稻葉城を陥れ、同八年には武田信玄と和親を結び(其姪を養)武田勝頼に妻はすを約し十年には子信(忠の爲に信玄の女を娶るこゝを約す)、同十年には小牧山より稻葉山に移り住み地名を岐阜と改めた。この年十一月には正、親町天皇は立入宗繼を信長の許に遣して美濃尾張兩國の御料所回復を命じ給うた。

今度國々屬二本意一由、武勇之長上、天道感應、古今無双之名將、彌可レ被レ乘レ勝條、爲ニ勿論一、就中兩國御料所且被レ出レ御目錄一之條嚴重被レ申付一者、可レ爲ニ神妙ニ旨、綸命如レ此、悉レ之以狀。

永祿十年十一月九日

右中將晴豊

織田尾張守殿

信長は大いに感激し機を見て京都に入り、天下を平定し宸襟を安じ奉る事を己が一生の任務と考へた。處が恰も前將軍義輝の弟義昭が幕府の勢恢復の事を求めて來たので、信長は和田伊賀守等を越前に遣し義昭を迎へしめた。

信長は南近江の六角氏に上京の路を開かんことを求めたが命に従はなかつたので、伐つて之を逐ひ、

(三二八) 十一年九月遂に義昭を奉じて上京し、三好松永の殘黨を逐うて義昭を將軍たらしめた。次いで十二月には伊勢に兵を出し北畠具教を降し、次男信雄を養子として家督をつがしむべきことを約せしめた。(三三〇) 元龜元年信長は京都に二條城を營んで義昭を居らしめ、禁裡及仙洞御所を修理し參らせ、又朝廷の儀式の復舊に努力した。同年六月には徳川家康と共に淺井朝倉の聯合軍を近江の姉川に破り、ついで翌二年には延暦寺を攻めて之を焼き僧徒を擧にした。足利義昭は信長の威望のますく揚るのを忌み、且つ自己の地位を危んで、毛利・武田及び三好・松永の殘黨を語らひ、天正元年三月兵を擧げて信長を除かうとした。信長は怒つて之を逐うたので、義昭は逃れて備前の宇喜多氏に身をよせた。この年淺井朝倉を亡し、翌年には長島の一向一揆を平げ、三年には長篠に家康をたすけて武田勝頼の軍を破り、八年には大阪の本願寺光佐と和し近畿地方は概ね平定した。これより先信長は近江の安土に宏大な城を營んでゐたが、天正四年に落成したのでこれに移つた。(三三六) 越えて十年信長は自ら兵十二萬を率ゐて美濃から木曾路を経て勝頼を討つた。家康は騎河から甲斐に入つて之に會した。武田氏の軍は到る所に敗れ、勝頼は遂に天目山で戦死して武田氏は亡んでしまつた。信長は瀧川一益をして上野に進んで關東を經營せしめて北條氏に備へ、柴田勝家を越中に出して上杉氏の押へとして歸つたが、偶々中國經營中の羽柴秀吉から援兵を求めて來たので信長は親しく軍を督して赴き救はんとし、先づ明智光秀を發せしめ、自らは其の子信忠と共に安土を發して京都に入り本能寺に泊し、信忠は妙覺寺に宿つた。然るにかねて信長に怨を含んでゐた光秀は急に叛して本能寺を襲うた。近侍森蘭丸等皆奮戦して死し信長は火を放つて自殺した。妙覺寺に在つた信忠は變を聞いて急ぎ父の難を救ひに出掛けたが、途中で本能寺に火の起るのを見て、去つて二條城に籠り光秀の兵の來り圍むに及び力戦して自殺した。信長の海内平定の大業は半ばにして挫けたが其の土臺を築いた勳功は又偉大なものがある。

豊臣秀吉の功業

豊臣秀吉は尾張愛知郡中村の農家に生れた。通稱は藤吉、幼名を日吉丸といつた。父は木下彌右衛門といひ、父の死後母の再嫁によつて同朋筑阿彌に養はれたが、後出でて遠江の松下嘉兵衛の奴となり、暫くにして去つて織田信長に仕へ木下藤吉郎秀吉と稱した。其の才幹を愛せられ頻りに登用せられ、正親町天皇の天正元年に淺井氏滅亡の後をうけて江州長濱の二十二萬石に封ぜられ、信長の部將丹羽長秀、柴田勝家の姓をとつて羽柴と稱した。同五年には拔擢せられて中國征伐の大任をうけ、播磨の上月・佐用の二城を降し、三木城を陥れ、兵を因幡に進めて鳥取城を略し、伯耆に入り、天正十年には轉じて備中の高松城を圍んで水攻にした。城の運命が旦夕に迫つた時、本能寺の變を聞き急に清水宗治にさとして自殺せしめ高松城を收めて毛利氏と和を結び、翌日軍をかへし疾風の如く東上して光秀の叛逆の罪を鳴らして、同年六月十三日丹羽長秀・織田信孝等と共に大いに山崎に奮戦して光秀の軍を破つた。光秀は近江の阪本に走らうとして山城の小栗栖で土民の爲に傷を負うて自殺した。かくて同月十八日秀吉は清洲に諸將と會して亡君信長の後事を議し、信忠の子三法師秀信を立てて織田氏

の嗣となし、又信長の遺領を諸將に分つた。即ち信雄は尾張を、信孝は美濃を領し、夫々清洲・岐阜にあつて秀信を後見し、秀吉は山城、勝家は越前、一益は伊勢を與へられた。既にして信雄信孝隙を生じ、勝家一益は信孝と結び秀吉の威名を忌んで除かうと謀つたので、秀吉は信雄と結んでこれに當り(三二八)天正十一年四月には大いに勝家の軍と賤ヶ嶽に戦つた。秀吉の部將加藤清正・福島正則・加藤嘉明等槍を揮つて、勝家の將佐久間盛政の軍營を突き大いに之を破り、北ぐるを追うて勝家を越前の北ノ庄に圍んで亡し、前田利家等をして北國を鎮せしめた。信孝は信雄に攻められて支ふること能はず岐阜城を出で、尾張國知多郡内海に奔り野間安養院に於て自殺した。一益も力竭きて秀吉に降つた。こゝに於て秀吉の威名は隆々として揚り織田氏の部將で秀吉に對抗する者は一人もなく、海内統一の大業は自ら秀吉に歸した。

此の年(天正十一年)秀吉は三十餘國の諸侯に課して大阪城を修築せしめ、翌十二年之に移つた。秀吉の威名がかくして益々盛んとなるにつれ、信雄は自ら安んぜず、この年三月秀吉と絶ち、家康に援を請うたので家康は師八千を率ゐて來り清洲に會盟した。十三日夜秀吉の先鋒池田信輝は大垣城を發し犬山城を襲うて之を陥れた。森長可(又長一に作る)も亦秀吉に應じ、兵を丹羽村羽黒に出し、家康の將酒井忠次・松平家忠・同家信・奥平信昌等と戦ひて互に勝敗あり。家康は小牧山に壘を築いて之に據つた。二十七日秀吉は十餘萬の兵を率ゐて、犬山に到り次いで樂田に陣し二重堀・岩崎山・小松寺・青塚山・内窪山等の諸壘を構へて小牧に對した。秀吉の部將池田信輝・森長可・堀秀政・羽柴秀次等切に秀吉に乞ひて、

家康の本據三河を襲はんとし、四月六日二萬餘騎を以て樂田を發し八日長久手に達した。家康は之を探知し、酒井忠次・本多忠勝等を小牧山に留め水野忠重・榊原康政・大須賀康高等に四千餘騎を授けて先發せしめ、自らは其夜信雄と共に井伊直政を先鋒として小牧を出でて小幡城に入つた。かくて九日兩軍大いに長久手に戦つたが西軍利あらず、信輝・長可戦死し、秀次は樂田に向つて敗走した。秀吉は急を聞いて之を救はんとし、長久手に向ひ龍泉寺に到つたが、家康は己に兵を收めて小幡より小牧に歸つて應戦しなかつたので、秀吉も己むなく樂田に歸つた。五月一日秀吉は堀秀政をして樂田を、加藤光泰をして犬山城を守らしめ、自らは美濃に赴いて信雄の諸邑を脅したが、やがて一旦大阪にかへつた。六月家康は清洲に移り、信雄は伊勢の長島城に入つた。此の頃秀吉の軍は伊勢で活動し、瀧川一益又秀吉に應じて知多半島を攻めたが、家康は之を斥け却つて一益の居城蟹江を攻めて抜き、更に桑名に至り壘を濱田・四日市に築いて信雄の外援とした。八月秀吉再び尾張に出陣し丹羽郡二宮に陣し羽黒・五郎丸・奈良口等に壘を築いたので、家康は岩倉に出で小牧と相應じて之を防いだ。秀吉は九月又大阪に歸り、永く家康と争ふの不利をさと十一月から方針をかへて伊勢を侵し諸城を陥れ、長島に迫り和議を謀つた。十二月十一日秀吉は信雄と矢田河原に會し、犬山城を信雄に返して和睦が成立した。これより先家康は岡崎に歸つてゐたが、秀吉が伊勢を侵すや清洲に至り先鋒として酒井忠次を伊勢に遣して信雄を援けしめたが、和議成るに及んで石川數正を信雄及び秀吉の陣に遣して和を賀せしめ、清洲を去つて岡崎に歸つた。

小牧の對陣に際して四國の長曾我部元親は紀伊根來寺ネコロの僧徒・雜賀の一揆と共に、秀吉の背後を脅し、越中の佐々成政も亦家康に應じて兵を動かした。そこで秀吉は天正十三年三月紀伊を略し根來寺を焼き雜賀の一向一揆を滅し、六月には羽柴秀長・蜂須賀正勝等をして長曾我部元親を伐つて四國を平げしめ、又佐々成政を降して越中を定めたが、次いで上杉景勝來り服するに及んで、北陸地方を平定した。(二四六)十四年正月には家康と和し、五月妹朝日姫を家康の後室に入れた。十五年には自ら九州を征して島津氏を従へ、(二五〇)十八年には北條氏を討つて關東を定めたので、奥州地方の大名も風を望んで來り降り海内始めて一に歸した。於は大いに論功行賞をなして、家康を關東八州二百五十六萬石に封じ家康の舊領三河・遠江・駿河・甲斐・信濃は諸將に分與した。

秀吉はこの間に次第に官位が進んで天正十三年三月には正二位内大臣に進み、七月には關白となり、從一位に叙せられ、翌年には太政大臣に任ぜられ豊臣の姓を賜つた。其の昇進の速かなる事古今に其の比を見ない。秀吉は天正十三年から京都の内野に壯麗な邸宅(北は一條、南は下長者町、東は大宮、西は淨福寺に及ぶ)を營み、(二四八)十六年四月、後陽成天皇の臨幸を仰ぎ、自ら文武百官を率ゐて供奉し、皇室の御料(京中の税金)、公卿門跡の料(近江高島郡八千石)を奉り、諸大名をして皇室を尊び關白の命に背かぬ事を誓はしめた。天皇の御駐輦は五日に及び頗る盛儀を極めた。

かく秀吉は上皇室を尊び下諸將を統べて海内の秩序を正すと共に頗る民政に意を用ひ、徳川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多秀家・上杉景勝(始め小早川隆景)を五大老として大事を議決せしめ、前田玄以・

淺野長政・石田三成・増田長盛・長束正家等を五奉行として百般の政務を分掌させ、かつ京都の市街を修め諸國の守護を廢して大名を置き、莊園を廢し諸國の土地を檢査して田地の制度を整へ、度量衡及び税法を一定し、人口を調査し、新に貨幣の制を立て、天正大判・小判を鑄させた。

秀吉はかねてより海外征伐の意圖を抱いて居たが、九州平定の後、朝鮮の來貢を促し其の來聘するや大明征伐の嚮導を命じたが肯んじなかつたので、先づ朝鮮を伐たんとて後陽成天皇の文祿元年(二五二)關白職を養子秀次に譲つて太閤と稱し肥前の名護屋(今名古屋に作る)に赴き自ら軍を督し、小西行長・加藤清正を先鋒とし、宇喜多秀家を總師とし其の軍凡そ十三萬、別に九鬼嘉隆・藤堂高虎等九千を水軍として之を助けしめた。かくて我が軍は釜山に上陸し、破竹の勢を以て進み忽ちにして京城を陥れたので朝鮮王は出奔して援を明に求めた。行長は進んで平壤を奪ひ、清正は咸鏡道に出でて二王寺を擒にした。明の援將祖承訓は平壤に於て行長に破られ、又李如松は碧蹄館に於て小早川隆景・立花宗茂等の爲に大敗したので、明は大いに恐れて沈惟敬をして和を乞はしめた。秀吉之を許し軍を撤したが、明使の齎せる國書に「特封爾爲日本國王」の句があつたので大いに怒り、直ちに再征の命を發した。かくて慶長二年(二五七)小早川秀秋を總師として諸軍を率ゐて再び朝鮮に入らしめた。此の役清正は淺野幸長と共に蔚山に苦戦して大敵を走らせ、島津義弘は泗川に奮闘して敵膽を寒からしめたが、偶々秀吉の薨去の爲征韓軍は悉く引揚げた。此の役は物質的には殆んど何等の利益もなかつたが、國民の士氣を鼓舞し國威を海外に發揚するところが尠少ではなかつた。

今當時に於ける尾張三河に封地を持つた主なる諸氏をあげるに次の通である。

尾張

○清洲

當時尾張の首府で天正十年清洲會議の結果織田信雄の有となつたが、天正十八年秀吉に逐はれ、秀吉の養子秀次が之に代つたが、文祿四年罪あつて自殺し、福島正則之をつぎ二十四萬石を領す。

○犬山

秀吉信雄和睦の頃より天正十五年頃まで武田五郎三郎、信雄の城代として在城したが、次いで土方勘兵衛雄久天正十五年信雄より當城を賜り四萬五千石を領した。當國が秀次の有となるや、其の實父長尾吉房入道常閑天正十八年より在城、次いで石川備前守光吉(貞清)秀吉より當城に封ぜられ十二萬石を領す。

○黒田(葉栗郡)

天正十八年一柳監物直盛秀吉より當城を賜ひ二萬石を領す。

三河

○吉田

永祿七年より酒井左衛門尉忠次在城、天正十八年池田輝政當城を賜り十五萬二千石を食む。

○西尾

天正十八年十月田中兵部大輔吉政岡崎より當城を兼領す。

○岡崎

天正十八年田中兵部大輔吉政當城を賜ひ五萬七千四百石を領し、その後加増ありて十萬石となる。

○刈屋(今刈谷に作る)

天正八年水野和泉守忠重、信長より當城を賜ふ。

○田原

明應二年戸田彈正左衛門宗光、當城を築き、其の曾孫康光天文元年(又享祿二年ともいふ)に松平清康に降り、天文十六年今川氏の爲陥落して戸田一門没落し、今川氏の將朝比奈元智當城に據つたが、永祿七年本多廣孝當城を陥れ徳川領となり、天正十八年徳川氏關東に移るや池田輝政兼領し、其の臣伊木清兵衛忠次當城を守る。

室町時代及安土桃山時代の文化

室町時代に入つては文化の中心は、また京都に移つた。足利將軍が京都にあつて概ね奢侈文弱に流れ權臣權を専らにし政令行はれず遂に戰國時代を現出するに至つたが、藝術方面は最も發達して絢爛たる東山時代の一時期を劃するに至つた。佛教は前代の後を承け盛んであつたが學問は頗る衰へ僅かに五山文學として命脈を保ち、特殊のものとして、謡曲連歌の新文學が興つた。

安土桃山時代の政治は幕府政治ではなかつたが、尙武家政治であつて、その治績は大いにあがつた。宗教文學又見るべきものがあつたが、其の精華は室町時代と同じく藝術方面にあつて、其の豪壯華麗の特色は秀吉の氣象を如實にあらはしてゐる。

第四章 近世時代の文化並に文化

徳川氏の興起

徳川家康が今川氏と絶ち織田氏と結ぶや、今川氏眞は正親町天皇の(一三二四)永祿七年大擧して三河に來り吉田より牛久保城に入り兵を遣して一宮塞を攻めたので、家康後詰となつて來り救ひ今川勢は戦はずして退いた。其の頃武田信玄は今川氏を挾撃しようとして使を家康の許につかはして好を通じて來た。次いで同八年家康は吉田・牛久保城を陥れ三河を一統したが、(一三三八)十一年二月武田信玄は更に使を家康の許に遣はし、駿河分割を約し、大井川を以て堺とする事を誓つた。そこで家康は遠州を侵し、堀河・字豆山・濱松城を奪ひ、翌年掛川城を陥れて今川氏眞を小田原に逐うた。時に武田氏誓を破つて大井川以西をも侵したので、家康は武田氏と絶ち、武田氏の部將山縣昌景を追ひ、やがて居城を濱松に移し、岡崎は長子信康をして守らしめた。次いで元龜元年二月家康上洛して、信長との盟を固め、六月には姉川の戦に信長を助けて大いに淺井・朝倉の軍を撃破した。然るに武田信玄は翌二年伊奈より西三河に入り、足助等の諸城を陥れて一旦去つたが、(一三三〇)翌三年十月大擧上洛せんとし、甲信の精銳二萬餘を率ゐ、北條氏の援兵二千と共に遠江より三河に向ひ、別に山縣昌景をして兵五千を以て東三河を突かしめた。家康は援を信長及上杉謙信に乞うたので、信長は佐久間信盛・瀧川一益等三千餘人を遣し

て應援し、十二月二十二日家康の軍一萬餘と共に、武田軍を三方ヶ原に逆へ撃つたが却つて大敗し、家康は辛うじて濱松城に逃れ歸り、城は實に累卵の危に直面したが、家康の苦肉の策功を奏し、信玄は窮迫せずして西に向ひ、刑部に陣して越年した。(一三三二)翌天正元年正月信玄は野田城を圍んで之を陥れたが、病を得たので鳳來寺に養生して、尙三河尾張を略し一擧上洛せんと圖つたが再び立つ能はざるを覺り、四月歸國の途信州駒場に至つて卒した。そこで家康は信玄に侵された諸城の恢復を計り、信康に命じて、足助・長篠等を奪還せしめ、奥平信昌に命じて長篠を守らせた。時に信玄の子勝頼も亦遠江・三河を侵してゐたが、足利義昭の勧めによりて、毛利輝元との連絡成るや、(一三三五)遂に同三年四月大擧して來り攻め、五月長篠を圍んだ。信昌は鳥居勝商をして急を濱松に報じ援を乞はしめたので、家康は更に信長に救を求め、共に來つて信長は極樂寺山に、家康は高松に陣した。勝頼は姥が懷・鳶ヶ巢山・中山等に壘を設けて城を監せしめ、別に諸將の兵を三隊に分つて後援軍に當らしめた。二十日夜酒井忠次は中山及び鳶ヶ巢の壘を襲ひ之を陥る。二十一日家康は信長と共に勝頼と清井田原に於て大いに戦つた。この役に信長は新戦術を工夫し、諸隊をして柵を陣前に設けしめ、又銃手三千人を抽んで之を守らしめた。勝頼は馬場信房等の老臣の諫を斥けて決戦せんとし數回の突撃を試みたが、西軍は飽くまで自重し、十分に敵を柵まで近づけ銃手に命じて亂射させたので東軍は勝基倒しに倒れ、そのひるむに乗じて西軍の槍隊一齊に突進し、一方鳶ヶ巢山を陥れた一隊と挾撃したので東軍は總崩れとなり死傷夥しく、山縣・眞田・土屋・馬場等の老将悉く戦死し、勝頼は辛うじて甲州に逃れ歸り、多年

蓄積した武田氏の勢力は一時に失はれた。かくて同十年二月織田氏は信濃より徳川氏の兵は駿河より進んで甲斐を侵し、三月遂に天王山に勝頼を滅して徳川氏は駿河を併せた。五月十五日家康は甲州平定を賀すべく安土城に至つたが、偶々中國征伐中の羽柴秀吉より援軍を乞うたので、信長は京都に入つて本能寺に宿つた。家康は其の序を以て京阪地方を遊覽して泉州境にゐたが、六月突如本能寺の變を聞いて大いに驚き自らも信長に殉ぜんとしたが、侍臣の諫を容れ伊賀路を歴て、伊勢白子より船に乗つて三河大濱につき四日岡崎に歸つた。次いで同十九日に光秀征伐の爲鳴海まで出陣したが、秀吉より光秀伏誅の報を得て歸陣した。同十二年三月織田信雄秀吉と絶ち家康に援兵を求めたので、家康は之を諾し、清洲城に入つて信雄と會盟し、小牧に據つた。秀吉又大軍を率ゐて尾州に來り樂田に屯して動かす。池田信輝・羽柴秀次・森長可・堀秀政等二萬餘騎を以て三河に入り家康の虚を突かうとした。家康之を知り、自ら長久手に逆撃して大いに之を破り勇名を馳せた。かくて信雄秀吉の和成り、家康も秀吉と和した。秀吉は家康の上洛を欲したが、家康は疑をいだいて應じなかつたので、秀吉は其妹の朝日姫を家康の後室として嫁せしめた。これを南明院夫人といひ(二二四六)天正十四年の事である。しかも尙家康は上洛を肯んじなかつたので、秀吉は母大政所をして南明院夫人見舞の爲と稱して濱松に下らしめ、暗に人質に擬して其の誠意を示したので、家康今は拒む事を得ず、其の年十月遂に上洛し大阪に至つて秀吉と會見し十一月岡崎に歸つた。其の後家康は屢々上洛して、秀吉家康の諒解は完全に成(二二五〇)立した。後陽成天皇の天正十八年秀吉北條氏を討つや、家康先鋒として大いに功があつたので、關東八州二百五十六萬石に封ぜられ、江戸に城いてこゝに居つた。秀吉が征韓の軍をおこした時、家康は之に従つて名護屋に赴いたが、直接兵を用ひなかつたので、出征諸將の如き損失は蒙らなかつた。慶長三年秀吉の薨するに及んで、嗣子秀頼なほ幼なかつた爲、石田三成等五奉行これを補佐し、又秀吉(二二五八)の遺托によつて、前田利家はこれが傳となりて大阪に在り、家康は大事を決裁して伏見に居つたが、幾程もなく利家薨するや、家康の權勢は益々盛んになつた。

關ヶ原役

石田三成は家康の權勢が日に盛なるを見て、豊臣氏の爲家康を除かんと計り慶長五年六月上杉景勝を(二二六〇)して、まづ戰備を修めしめた。家康は之を征せんとして鳥居元忠を留めて、伏見を守らしめ自ら兵を率ゐて東下した。こゝに於て三成は増田長盛等と共に大いに家康の罪を鳴して兵を募り、毛利輝元を立て、盟主とし、宇喜多秀家・小早川秀秋・島津義弘・長曾我部盛親・大谷吉隆等と結んで、其の勢凡八萬、先づ八月朔日伏見城を抜いて元忠を斬り、東進して家康を挾撃しようとした。家康は下野の小山で伏見の變を聞いたが豫期したことであるから少しも驚かず、長子秀康を留めて景勝に當らせ後嗣秀忠をして中仙道より西上させ、自らは東海道を引返した。秀吉恩顧の將福島正則・池田輝政・淺野幸長・山内一豊等は家康の東征に従つてゐたが三成と惡かつた爲、皆之に従ひ其の勢凡七萬五千加藤清正・伊達政宗も亦其領國にあつて遙かに之に應じた。かくて東軍の先鋒福島正則・池田輝政等

は途に美濃の岐阜城を攻めて織田秀信を走らせ、同國赤阪に陣した。其の時三成は大阪城に居つた。九月十四日家康赤阪につき、直ちに大阪に向ふべき様を見せたので、三成は其の夜、軍を引いて關ヶ原に陣し家康の西上の途を要した。明くれば十五日明方、井伊直政は衆に先じて宇喜多秀家の軍と開戦し、正則又之に加はり加藤嘉明は黒田長政と共に三成の營にせまり、本多忠勝は中央を突進して小西行長・秀家の軍を突破せんとして激戦數刻勝敗は容易に決せなかつたが、吉川廣家家康に内應して兵を動かさず、秀秋及び脇阪安治等叛逆して鉾を逆にし吉隆の陣を襲ふに及んで西軍總くづれとなつた。こゝに於て家康は進んで大阪に入り大いに賞罰を行つて、三成・行家を斬り、秀家・盛親を流し、輝元・景勝等の所領を削り、只義弘だけは其の罪を問はなかつた。東軍の將士には大いに重賞を與へ、殊に清正は行長の遺領を得て肥後の大部(五十二萬石)を領し、正則は安藝(五十萬石)に封ぜられて清洲から廣島に移り、池田輝政は吉田から姫路(五十二萬石)に移り、幸長は紀州(三十八萬石)に、嘉明は松山(二十萬石)に、山内一豊は土佐(二十萬石)に、堀尾吉晴は出雲隱岐(二十四萬石)に封ぜられ、田中吉政は岡崎から筑後に移り親藩及譜代では結城秀康は福井(七十五萬石)に、松平忠吉は清洲(五十二萬石)に、井伊直政は近江佐和山(十八萬石)に本多忠勝は伊勢桑名(十萬石)に封ぜられ、その外加増轉封各差があつた。これを要するに外様の賞は一般に豊富であつたが中國四國九州などの邊境へ追ひやり、親藩譜代の賞は一般に少かつたが近畿東海道の要地に置いた。この役により秀頼は攝津・河内・和泉の三國六十五萬石を與へられたのみで全く一大名に過ぎなくなり、豊臣徳川氏の地位は全く變じて政權は徳川氏に移つた。

幕府の創立と豊臣氏の滅亡

後陽成天皇(三六三)の慶長八年、家康は征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いて名實共に天下號令の權を其の手に握り、再び鎌倉以來の武家政治の形式を整へた。ついで十年將軍職を其の子秀忠に譲つて駿府に退隱したが、大事はなほ自らこれを裁決した。世に之を大御所といつた。

然るに秀頼資性凡庸ならず、その長ずるや漸く秀吉の偉業を恢復せんとの志があつたので、家康はまづ其の豊富なる財力を費消せしめんが爲に、秀頼に勸めて近畿地方の社寺を造營せしめたが、方廣寺の再建に當り、大佛殿の鐘銘「國家安康」「君臣豊樂」の文字は己れを呪咀し豊臣氏の繁榮を祈るものと曲論し嚴重に大阪方を責めて之を激せしめ、大阪方の憤慨して兵を擧ぐるや、後水尾天皇(二七四)の慶長十九年十月、其の子秀忠と共に大車を率ゐて大阪を圍んだ。秀吉の舊臣で關ヶ原の役後も大阪の爲に盡してゐた諸將の多くは己に歿してゐたので、(淺野長政(慶長十五年四月)、加藤清正(同十六年六月)、池田輝政(同十八年正月)、淺野幸長(同十八年八月)、前田利長(同十九年五月))所領を有する諸侯の來り援くるもの一人もなく、大阪方は苦戦を免れなかつた。加之秀頼の生母淀君は寵臣大野治長と事を専らにして衆心の一致を缺いだ。しかし城は名に負ふ天下の堅城、軍師眞田幸村を始め、長曾我部盛親・後藤基次・木村重成等の諸將孤立無援の中にあつてよく防いだので、家康は遽に抜き難きを慮つて、一時之と和を議し、偽つて城濠を埋めつくし、翌年四月大阪方の怒

つて再び兵を擧ぐるに至り、遂に之を攻略した、時に元和元年五月であつて、秀吉が光秀を滅してから三十五年豊臣氏こゝに亡びて海内全く平定し、これより長く兵を用ひなかつたので、元和偃武と稱してゐる。

幕府の制度

かくて家康は元和元年七月武家諸法度・公家諸法度・寺院諸法度を制定して、各その據るべきを示し以て其の勢力を抑へた。家康は大名の配置に深く留意し、親藩譜代外様をして相交錯し相掣肘せしめ關東及近畿其の他駿府長崎等の要地を幕府の直轄地とし、大阪駿府には城代を、京都には特に所司代を置いて朝家の監視に當らしめた。これは尤も重職であつたから老中同様三萬石以上の譜代大名を以て之に任じた。第三代の所司代板倉勝重、第四代の重宗父子は良吏の譽が高かつた。親藩は家康の子義直(始め松平忠吉)を尾張に、頼宣を紀伊(始め駿府)に、頼房(始め武田信吉)を水戸に封じ三家と稱して特に之を重んじ三河以來徳川氏に忠勤を勵んだ譜代の諸士は比較的小封であつたが、何れも直轄地の周圍に置き戰國以來徳川氏と對峙した外様は奥羽・北陸・中國・九州等僻遠の地に封じた。其の役更に諸大名をして江戸に邸宅を設け、妻子を住せしめて暗に人質とし參勤交代の制を立てて隔年に領國から江戸に詰めさせる事とし、武家法度を勵行して、城營の修築、浪人の登用等を禁じ、縁組も亦許可を得て後之を行はしめ苟も之に觸れた者は遠慮なく所領を沒收し、尙後嗣のない者も其所領を奪つたので、元和以來斷絶した大名も甚だ多い。殊に加藤・福島の如き秀吉恩顧の大名は法度を楯に皆滅された。法度は譜代にも親藩にも勵行され、かの關ヶ原の役後福島氏のあとを襲うて尾張の清洲に封ぜられた家康の四男松平忠吉は慶長十二年卒し嗣がなかつたために除封され、その弟義直が代つて甲府から移封された。

名古屋築城と尾張藩の奨學

當時幕府は諸大名の富力滅殺の目的を以て、臨時の土木事業をおこして之を大名に課してゐた。後陽成天皇の慶長十五年閏二月加藤清正以下關西の諸大名二十侯に課して名古屋城の修築を命じ、六月から四ヶ月を閲して落成したので、義直は之に住み尾張の首都は清洲から名古屋に移つた。時に平岩親吉・成瀬正成之が傳として盛名あり、義直は頗る民政に力を注ぎ、努めて産業を保護奨勵して遂に其の領土をして東海第一の富饒地たらしめた。又彼は幼にして林羅山に師事したが、その名古屋に移つてからは堀杏庵を招いて儒教を尊崇し、城内に聖廟を建て、釋奠の儀を行ひ學問所(後に繼述館といふ)をおこななどして大いに文教の奨勵に力をつくした。かくて名古屋は文物の盛なる當時他の諸侯に其の比がなかつた。

然るに其後學問所の事業甚だ振はなくなつたが、藩主宗勝の代に至り學問所の復興をはかり、之を更めて明倫堂と稱した。後宗睦の代に至つて(安永年間)一代の碩學細井平洲を明倫堂督學繼述館總裁に任じ國内の耆儒や弟子數人を選抜して學職に充て學政大いに振つた。此の頃松平君山又篤學の譽あり其の門

下から出た名士が頗る多い。

二代秀忠以後の大勢

(後水尾天皇、二七六)
元和二年家康は薨じたが、其の子秀忠よく其の後を守り、福島正則の大封を奪ひ、家康の功臣本多正純を斥くる等、幕威を示したが、其の子家光將軍職を嗣ぐに及び、井伊直孝・土井利勝・酒井忠勝・松平信綱・阿部忠秋・大久保忠教等の名臣之を佐けて、權威いよく張り、制度又全く整つた。然るに秀吉の頃から禁令を出して取締つてゐた基督教は尙禁絶を見ず、其の後ひそかに來つて布教する宣教師も多く弊害も少くなかつたので、家光は極刑を以て之にのぞみ、その禁令を徹底せしめんとした。九州に於ける信徒は此の幕府の壓迫に絶えず、明正天皇の寛永十四年亂を起し島原半島の原の古城趾に據つて亂を起した。幕府は板倉重昌をして之を討たしめたが、容易く鎮め難かつた爲、更に松平信綱を遣して軍を指揮せしめたので、重昌は軍功の擧らないのを愧ぢ、信綱の未だ至らざるに先だつて強襲を試み銃丸にあたつて斃れた。信綱の至るや持久戦を以て對し、寛永十五年二月末遂に之を平げた。

(二九九)
かくて家光は翌十六年邦人の海外渡航を嚴禁すると共に、和蘭・支那以外の外船の來航を禁じたので基督教禁絶の目的は達したが、邦人の海外發展の途全く絶え國民は外國の事情に疎く世界の進運におくるゝに至つた。

家光薨じ子家綱を経て綱吉第五代の將軍職をついだ。元和偃武以來打續く太平に世風漸く安逸に流れ尙武の氣象は衰へ遊樂に耽り、上下華美を競ひ奢侈を争つた。然るに此時に當つて、播磨赤穂の城主淺野長矩の遺臣大石良雄・片岡源五衛門等四十七人、吉良義央を殺して舊主の讐を報い、廢れんとする士風に一脈の清氣を注いだので、天下相傳へて其の擧を賛した。

六代家宣・七代家繼の時代は新井白石政を輔けて大いに元祿の弊政を改めた。

次いで吉宗八代の軍職を嗣ぐや更に前代華美の風を矯めんとし、儉素以て自ら率ゐ、實學を起し、人材を用ひ、養生所を設けて貧者に施療し、或は産業を奨勵し、或は又意を刑律に留めて公事方定書を制定し、名奉行大岡越前守忠相を用ひて江戸の市政を更張する等治績の見るべきもの頗る多く、後世幕府中興の祖と仰ぎ、其の治世を賛して享保の治といつた。

かくて九代家重・十代家治の所謂田沼時代を経て、第十一代家齊立つや、松平定信入りて政をたすけ専ら享保の治に倣つて前代の弊政を改革して、紀綱を張り寛政の治と稱せられた。定信退いて後は家齊親ら政を執つたが漸く政に倦み、風俗再び奢侈に赴き所謂化政度を極点として衰運の兆があらはれた。次代家慶の天保年間水野忠邦老中となり、大いに弊政の改革を計つたが措置急激に過ぎて失敗に終り、其の後は内憂外患交々起り幕府は唯衰滅の一筋道を辿るのみとなつた。

江戸時代の文化

佛教。家康は基督教を禁じたが、佛教各派に對しては、よく之を保護したので佛教はなかく榮えた。禪宗の崇傳・鳳山(可睡齋等膳)・天台の天海等は家康の尊敬があつた。しかし僧侶は一般に安逸に耽り、家綱の頃明僧隱元が禪の一派黃檗を傳へた外には新宗派は一つも起らなかつた。

漢學。家康・綱吉等は又學問を獎勵したから朱子學特に發達し、陽明學派・古學派にも學者が輩出して空前の盛況を見た。當地關係の學者としては慶長の頃石川丈山あり、元和の頃堀杏庵あり、明和安永の頃に松平君山、稍おくれて細井平洲等があつた。

文藝。文藝方面に於ては詩文に和歌に相當の盛況を見せたが特に注目すべきは俳諧・戯曲・小説等の平民文學である。當地關係の著名なるものには、和歌に慶長の頃木下長嘯子あり、寛政の頃小澤蘆庵あり、天保の頃糟屋磯丸等があつた。俳句俳文には元祿の頃内藤丈草あり、明和の頃横井也有が出た。國文には石原正明が著名である。

美術工藝。美術では繪畫界の躍進は實にめざましいものがあつて、殊に浮世繪の流行は此の期獨特のものである。當地關係の畫家としては渡邊華山・僧月僊(寛政享和)・田中訥言(文化)・山本梅逸(弘化)等が著はれてゐる。工藝方面でも陶器・蒔繪・彫金・染織・刺繡等各方面に斬新の意匠を出し華麗精巧を極めた。慶長の頃竹田庄九郎は有松絞を案出し、文政年中加藤景正の裔民吉青華磁の法を發明し、幕末に梶常吉が七寶燒を始めたのなどは愛知縣の誇である。

教育。幕府には昌平坂學問所があり、諸藩にはそれ／＼藩學があり(名古屋には明倫堂繼述館)其他儒者神官僧侶

浪人等の私塾寺小屋あり、僻陬の地にも普く及んだ。

社會事業。萬治寛文の頃鬼頭景義は萱津用水と荒田開墾に名を擧げ、都築彌厚又所謂明治用水の開発に努力し果さずして逝つたが、伊豫田與八郎・岡本兵松其の遺志をついで明治に及んで之を完成した。

幕府の衰亡

先に家康の獎勵によつて學問が復興した結果、尊王論が勃興し幕府の勢また昔日の如くならず、中期以後は稅政を重ねて自ら民心の離反を招き、財政の窮乏と士風の頽廢とは外交問題の粉紛と相俟つて幕府を衰亡に導いた。家光が鎖國政策を確立して以來、我が國民が徒に桃源の夢を貪つてゐた間に、世界の形勢は一變して西班牙・葡萄牙・和蘭は衰微し、之に代つて英佛露米が新に勃興し相競うて勢力を東洋に擴張せんとした。就中英は佛を壓して印度經營に成功し我が西陲を脅し、露は西比利亞一帯の地を占領して我が北邊に寇したので、幕府は遂に外國船擡の令を出した。そこで渡邊華山・高野長英等の蘭學者は書を著して攘夷の非を論じ、開港を唱導したけれども、幕府は却つて之を嚴罰に處した。しかし幕府も流石に悟る所があつて、仁孝天皇の天保十三年(二五〇二)さきの擡夷令をゆるめたけれども祖法を變じやうとはしなかつた。そこへ偶々米使ペリーの來朝に遇ひ、神奈川條約の締結について假通商條約の草案議定を餘儀なくせられた。時に首席老中堀田正睦は攘夷論の優勢だつた朝廷と米領事との間に立つて頗る困窮した。この難局に善處すべく開港論者井伊直弼は大老に擧げられ、間部詮勝

や松平乗全を老中に任じて専ら自説の遂行に猛進し遂に勅許を待たずして、先に正睦の議定した假條約案に調印した。恰も此の時幕府には將軍繼嗣の問題起り、尾張の徳川慶勝、越前の松平慶永等を始めとし多くの輿望が一橋慶喜にあるに拘らず、井伊大老は家定將軍の意を休し、紀州家から家茂を迎へて繼嗣と定めたので世論大いに沸騰し直弼の違敕專斷を非難した。

これより先尾張侯慶勝は家老成瀬正肥ミツを始め田宮如雲・尾崎良知・間宮六郎・丹羽賢・田中不二鷹等の名臣を用ひ藩政見るべきものがあつたが、此の時にあたり水戸の徳川齊昭と志を一にし、齊昭・慶永と共に不時登城を行ひ違敕並に繼嗣問題につき將軍家定に謁して直諫しようとして果さず大廊下の上局に於て井伊大老等と激論を闘はした。これを世に殿中間答と稱してゐる。時に朝廷に於ては條約調印の報に接し、三家大老の中一人急遽上京すべき旨の救命を下された。直弼等大いに其の處置に苦み終に台命と稱して齊昭・慶勝・慶永に謹慎を命じ、慶篤(齊昭の嗣)・慶喜の登城を停止した。そこで直弼に反對の有志者は朝廷を動かし奉つて密勅を仰ぎこれらの人々の謹慎を解き且つ幕府の改新を企てようとした。よつて直弼は老中間部詮勝を上京せしめて假條的調印の止むを得ざる事情を上奏すると共に降勅に與つた尊融親王をはじめ公卿の處罰を奏請し、志士五十餘名を流斬に處し所謂安政の大獄を起して之を鎮壓せんとしたが、人心は益々激昂し直弼は却つて櫻田門外に暗殺されて幕府の威權は急に衰へた。是に於て老中安藤信正は懷柔政策をとり、先づ慶勝・慶喜・慶永等の謹慎を解き尊融親王以下公卿の赦免を奏上し、公武合体説を唱導して難局を展開せんとし、(二五二〇)萬延元年七月將軍家茂

の爲に皇妹和宮親子内親王の降嫁を奏請し、十年を期して攘夷を斷行する旨を誓ひ奉つた。(二五二一)翌文久元年孝明天皇は勅許あらせられたが、幕府の處置は世人非難の的となつて信正は坂下門外に要撃せられて傷づいた。當時朝臣志士の間にも望を屬せられてゐたのは薩長二藩であつたが、薩摩は公武合体説を採り、長州は表面攘夷を唱へ陰に討幕を企ててゐた。三條實美等の急進派は長州と結び、一時其の勢力は朝廷を占めて攘夷の決行を幕府に促し、幕府がやむなく其の期日を定むるや長州は獨り之を決行した。是に於て攘夷論者は大いに元氣づき攘夷親征の朝議さへ起り大和行幸の議が仰せ出された。然るに溫和論者の運動によつて親征の議は中止となり朝議は俄に一變し、長州藩は斥けられ長藩と親しい三條實美等の七廷臣も參内を停められた。此の時に當つて藤本鐵石・松本奎堂・宍戸昌明等は大和に在つて攘夷親征の先鋒たらんとしてゐたが、朝議の一變に憤慨して討幕を名として侍從中山忠光を擁して自ら天忠組といひ十津川に兵を擧げ、平野國臣も亦これに應じて但馬の生野に兵を擧げたが忽ち幕兵に撃破せられて、翌元治元年長州藩は多數相率ゐて上京し無實の罪を闕下に奏せんとして蛤御門の變を起した。よつて幕府は奏請して征長の議を決し、同八月尾張侯徳川慶勝を總督とし、山陰・山陽・南海・西海の諸藩の兵を率ゐて赴き討たしめた。慶勝等進んで廣島に至り、長州藩主を諭して謝罪せしめ一旦事は鎮つた。しかし幕府は此の寛大の處置に不満であり又長藩士中には恭順を喜ばぬ者があつて頻りに戦備を修めたので、幕府は再征の軍を發したが、尾州薩州はじめ諸大藩異議をとなへて出兵せず、却つて連戦連敗して其の無力を天下に暴露した。たま／＼將軍家茂大阪に薨じて慶喜

嗣ぎ、ついで孝明天皇崩ぜられて明治天皇踐祚あらせられ、大喪の故を以て征長の師をやめしめられた。此の頃薩長の提携成り三條實美・岩倉具視等と密に討幕を謀つたが、慶喜は深く時局に鑑み山内豊信の勸告を容れて慶應三年十月大政を奉還した。しかし薩長二藩はあくまで兵力に訴へる覺悟で尾張・越前・土佐・安藝等を誘つて之に加擔せしめた。かくて十二月九日明治天皇は王政復古の大號令を發せられ、攝關・征夷大將軍の官職を廢し、新に總裁・議定・參與の職を置き、熾仁親王を總裁に王政復古に功勞ある公卿諸侯(薩・土・尾・越)を議定に、俊秀の公卿並に諸藩(薩・土・尾・越・藝)より各三名を擧げて參與に任ぜられ薩・土・尾・越・藝の藩兵は宮門の護衛に任じた。ついで小御所會議の結果徳川家に對して辭官納地の御沙汰が發せられた事と薩藩のとつた挑戰的態度とは徳川家の君臣を憤激せしめ遂に明治戊辰の役を醸すに至つた。尾張藩は親藩であつたにも拘らず、大義親を滅するの覺悟に出で藩兵をして東海北越奥羽甲信の野に轉戦せしめた。元來尾張藩は尊王論の盛んな藩で、かの初代義直は堀杏庵を招いて朱子の學風をうけ神祇辭典や類聚日本紀を編纂せしめて同藩尊王論の淵源をなし、その曾孫吉通の如きは「萬が一朝廷と幕府との間に矛盾の生じた場合には、直ちに官軍に屬すべきである。一門の好みを思つて、かりそめにも朝廷に弓を引いてはならぬ。これは義直以來の遺訓である」といつた位であるから、この役に同藩がかうした態度に出た事は別に不思議ではない。かくて年餘にわたつた戦亂も皆平ぎ全國は一に歸した。

第五章 現代一般

大政は愈々古に復り、萬機は皆天皇に決し大いに更新をはからせられたが、朝廷の直轄に屬する地は幕府の舊領のみで、諸大名の領地は尙元のまゝであつたから政府の威令は十分全國に行はれない爲、^(二五二九)明治二年正月薩長土肥の四藩は率先して版籍奉還を願ひ出で、全國の諸藩多く之に倣ひ、尾張・阿波・肥後・因播等の如きは併せて郡縣の制を布かんことを願つた。かくして版籍奉還は實現されたが、舊狀なほ改まらざるものがあつたので、同四年廢藩置縣實施せられて郡縣の制定り、中央集權の實が行はれるやうになつた。此の時我が愛知縣には名古屋・額田の二縣が置かれ、名古屋縣は尾張の大部を、額田縣は三河と尾張の一部(知多郡)とを管したが、翌五年十一月兩縣を合併して愛知縣と稱することとなつた。^(二五三二)

明治五年八月初めて學制が制定されたが、本縣では此の學制に準據し、六年五月中小學區の地劃並に小學校の配置をなし、管下全部を十中學區に區分し、一中學區を二百十小學校に分ち縣全管下に二百の小學校を設置するの標準を立て、漸次その實現に努力した。

明治六年に徴兵令が布かれたが、この時さきに^(二五四八)明治四年)名古屋に置かれてあつた東京鎮臺第三分營を廢し、名古屋鎮臺を置かれ、後明治二十一年五月に至つて第三師團と改稱された。

急激な維新の改革は保守主義の者を不満ならしめ、征韓論破れて人心動搖し、終に反政府の人々は佐

賀・熊本・秋月・萩等に叛亂を起したがいづれも直ちに平定された。最後の西南の役はやゝ重大性を帯びてゐたが、熊本鎮臺の好守と征討軍の善戦によつて間もなく平定された。この役に名古屋鎮臺兵も出動して諸所に轉戦功をたてた。

この役は官賊兩軍共死傷者が甚だ多かつたので元老院議員佐野常民・大給恒等は總督府の許可を得て博愛社を創立し、戦地に病院を設け官軍賊軍を問はず傷病者を治療した。これが日本赤十字社の濫觴である。

此の役によりて政府の威權政策確立し五ヶ條の御誓文に基いて公議輿論を採用し着々其の施設を進めた。即ち政府は漸進主義をとり、先づ大審院、元老院を置き、府縣會を設け、次いで官制を改めて内閣制とし、市町村制を布き、二十二年には帝國憲法を發布し、翌年には府縣郡制を實施して地方自治制度を整へ、同年十一月には始めて帝國議會を召集して、東洋唯一の立憲君主政体を確立した。

かくて政黨政治發達し自由改進の二政黨創立後屢々その離合集散が行はれ、やがて政友會、憲政會對立し互に政權を争つたが、大正十四年加藤高明を首班とする憲政會内閣の當時多年の懸案であつた普通選舉法案が成立し、明治天皇の御聖旨がこゝに十分に徹底せられるに至つた。

此の間に外交も亦次第に振ひ、朝鮮と修好條約を結んで其の獨立を宣明し、清國との修好をも恢復して通商條約を結び、又日支兩屬關係にあつた琉球の領有を確定し、千島樺太を交換して北邊の境界を決定し、次いで朝鮮の内治をたすけて其の獨立を確立せしめ以て東洋の平和を維持せんとしたが、遂に清國と衝突して明治二十七八年の役を醸した。我が第三師團は第五師團と共に第一軍を組織すべき

豫定の下に、先づ豊橋の第十八聯隊は平壤攻撃に参加した。この時一等卒原田重吉は單身玄武門を破つて偉功を立てた。かくて皇軍海陸に大勝を得て北京に迫つたので、清國は遂に和を乞うた。然も三國の干涉は血によつて得た遼東半島の還附を餘儀なくせられ、國民は悲憤の涙に咽び孜孜として戦後の經營に勵んだ。かくて不平等な稅權法權を改正し、北清事變には我が軍主力として列國兵環視の中に武勇を輝した。當時露西亞は此の亂に乗じて兵を出し、滿州占領の宿望を達しようとしたから、我が國は清韓の領土を保全し東洋の平和を確保する爲に英國と同盟を結んだ。然も露西亞は猶其の志を翻さず、滿州の軍備を着々進めたから、我が國は遂に國交を斷絶し、皇國百萬の貔貅は滿州の野に轉戦して遼陽に克ち、旅順を陥れ、奉天を占領して次第に敵を北に壓迫した。この役我が第三師團は第二軍に屬し金州・南山・得利寺・蓋平・大石橋・海城・牛莊・遼陽・沙河・黑溝臺・奉天に轉戦して偉功を立てた。岡崎の人士屋光春は第十一師團長として第三軍に屬し、第三回旅順總攻撃に際して重傷を負うた。海軍又仁川に、黃海に、蔚山に克ち、遂に日本海に敵を殲滅して東洋に於ける制海權は全く我に歸した。當時尾張の人八代六郎は淺間艦長として偉勳を立て、風流艦長の名を擲にした。やがて米大統領の居中調停により兩國の平和克復し、日英同盟は擴張され、屢々禍因をなした韓國は我が國に併合されて東洋の平和は安定した。

僅々五十年の間に於てかくも我が國運を進め、古今絶類の鴻業をなし遂げ給うた。明治天皇の神去り給うてから後三年にして世界大戰勃發し、我が國又參戦して東洋に於ける獨逸の勢力を掃蕩して、更

に遠く地中海に出動し、平和克復後は獨逸領南洋諸島を統治する事となり、次いで世界三大強國の一としてワシントン會議、ロンドン會議に海軍々備制限を議定して世界平和の爲に磐石の重きをなした。

參考資料

- 愛知縣史
- 尾參寶鑑
- 縣内各郡市史
- 國史大辭典
- 尾參遠郷土史論
- 日本國誌資料叢書三河
- 同 尾張
- 最新日本歴史年表
- 大日本歴史集成
- 續大日本歴史集成
- 大日本時代史
- 趣味の日本史
- 王政復古の歴史
- 大日本人名辭書
- 大日本地名辭書
- 愛知縣偉人傳

第二編 尾張部各説

一 尾張一宮と二の宮

(1) 國幣中社眞清田神社 (一宮市)

一宮市の略ぼ中央に位し、祭神は鏡造祖神天火明命である。命は天照大神の御孫で、天忍穗耳尊の第一皇子に坐しまし、八咫神鏡を鑄造し給ひ、子孫に美術工藝を教へ、鏡造祖として尊崇せられる神である。其御子香久山命は神武天皇の功臣で、初め葛城國高尾張の邑に居られたが、後當國に來て土地を開墾せしめ、尾張國造の祖とられた。而して御父の神靈を此地に祀られたのは神武天皇の第三十三年三月三日と傳へられて居る。

當神社は延喜式内の名神大社で、又尾張一ノ宮であつて、熱田神宮に次ぐ名社である。明治十八年國幣小社となり、大正三年國幣中社に昇格した。

社域は一萬四千五百餘坪を有し、古杉老樅蔚蒼として境内幽邃、社殿莊嚴、神威稜々たる感がある。享徳四年の兵火に罹り社殿の大部が焼失したので、長祿元年再建し、永正、寛永兩度の修繕を経て今日に及んだ。其中入母屋造の樓門と切妻造の西門とは、享徳の兵火を免れて應永年間に建立したものである。神寶には國寶に指定せられて居る舞樂面十二面の外に、神鏡、神劔、神輿、獅子頭、古鈴、

高麗犬があり、境内の古繪圖も珍重すべきものである。

三月三日は古來例祭日で、一宮祭と云つて有名であるが今は桃花祭と稱せられて居る。

うらゝかや馬のいなゝく花の中。

甚洞

拍手に花ちりかゝるきよめかな。

曉窓

(2) 國幣中社大縣神社 (丹羽郡樂田村)

丹羽郡樂田村地内に在つて、當國第一の高峰たる本宮山の麓に鎮座、祭神は大縣神(瀨波縣君祖)大荒田命(大荒田命)で、延喜式神名帳の名神大社であつて、尾張二の宮である。境内は老松古檜が蔚々として繁り、神々しき趣が籠つて居る。

社傳に依れば、垂仁天皇の第二十七年の鎮座で、天武天皇の御代に再建せられ、清和天皇の貞觀年中修理を施されたが、永正年間烏有に歸したので、同十五年に織田彈正左衛門久長が再建した。

現在の本殿、祭文殿、廻廊等は万治三年に尾張藩主光友の奉建に係り、神社建築として他に類例の少い特殊の構造である。

大正七年縣社より國幣中社に昇格した。例祭は毎年十月十一日、奥宮は本宮山の頂上に祀られてゐる。

二 日本武尊と尾張

(1) 日本武尊の御東征と白鳥古墳

日本武尊の御東征 尊は景行天皇の第三皇子に坐しまし、御名は小碓、一名日本童男と申し奉る。

幼より雄傑、長じて容貌魁偉、御力最も優れ給うたと申し傳へられて居る。天皇の二十七年筑紫の熊襲叛くや、尊は御年十六歳であつたが、命を奉じて筑紫に下り、單身其巨魁川上梟帥を誅し給うた。

日本武と申す尊名は、梟帥が尊の武勇を嘆稱して奉つた御名である。然るに、天皇の四十一年に東國の蝦夷が叛いたので、再び尊に命じて之を討たしめ給うた。

命は勅を受けて東征の途に上り給ひ、先づ伊勢神宮に參拜して御伯母倭姫命に御暇乞を致されたが、此時倭姫命は尊に叢雲劍と燧袋とを授けられた。かくて尊は尾張國愛智郡にお越しになつた時、國造小止與命の子建稻種命がお迎へして、當郡氷上邑(今の高町氷上山)の館に駕を枉げられん事を請うたので、尊は懇請を納れてその宅に入り給ひ、建稻種命の妹小止女命の婦徳に感じ給ひ、姉子ノ命と云ふ美稱を與へて皇妃となし、數日御滞留の後、建稻種命等を率ゐて御東征の途に就かせられた。然るに駿河國に至り給ひし時、土賊等尊を給いて野に誘ひ奉り、火を放つて害せんとしたので、尊は神劍を抜いて草を薙ぎ、燧を取つて向火を放ち、悉く賊を滅し給うた。

之より此御劍を草薙劍と申すことゝなつた。それより尊は遠く進んで日高見國に至り蝦夷の本據を御

平定の上、甲斐、信濃、美濃を経て、尾張に御歸りになつたが、丁度尊が篠城の地にお著きになつた時に途中甲斐の國から別れた稻種命が、駿河の海に没して薨去したとの報らせを聞き給ひ、甚だ嘆き悲まされて現哉現哉と仰せられ、此地に命の靈を祀り給うたと申すことである。それが今の内津神社である。かくて後、宮竇媛(即ち姉子ノ命)の家に留まり給ふこと月餘に及んだが、時に近江の膽吹山に暴神ありと聞かせられ、草薙劍を媛に授けて、「我れ京師に歸る日必ず汝を迎ふべし。敬みて此劍を持し護れ」と仰せられ、單身彼の山に至り給ひしが、俄に病を得て山を下られ、尾張より伊勢に入り、漸く鈴鹿山を過ぎ給ふに及び、病愈々篤く、「乙女の床の邊に我が置きし劍の太刀その太刀はや」と宣ひ、遂に能褒野に薨じ給うた。御年三十。

此時宮竇媛の許に置き給ひし草薙劍は、やがて熱田に社を營みて遷し祀られた。之が今の熱田神宮である。

白鳥古墳(名古屋市南區熱田白鳥町) 日本武尊の御陵は伊勢の能褒野、河内の古市、和泉の琴彈原の三箇所にあつて、此三陵を何れも白鳥陵と言ふのであるが、我が尾張にも亦白鳥陵があつて、日本武尊の御陵と云はれて居る。

此白鳥の古墳は、熱田神宮の西約三丁、熱田白鳥町に在つて、丘陵の西へ傾斜せる上に西面して築かれた前方後圓型のもので、現に隍の跡を存して居り、墳の表面には所々に陶質の埴輪が現はれて居る。天保八年暴風のために墳上の大木が倒れ、石槨が現はれて、其中から六鈴鏡、轡、杏葉、子持齋瓮、太刀、曲玉、管玉、切子玉等が多數發見されたが、再び元の儘に埋めたと云ふことで當時の圖面だけが残つて居る。

曾ては法持寺で奉仕して居たが、現在は熱田神宮の管理となつて居る。

(2) 宮竇媛命と斷夫山古墳

宮竇媛命 尾張國造小止與命の女、建稻種命の妹に當り、日本武尊の皇妃である。始めは小止女命と稱した。

日本武尊御東征のみぎり、尾張に進み給ふや、宮竇媛の館に入り給ひ、建稻種命に命じて之を納れさせられ、寵幸甚だ厚く、數日御滞在の上、御東征の途に就かせ給うた。又御凱旋の際にも媛の許に留まり給うこと月餘、膽吹山に暴神ありと聞き、草薙劍を媛の家に置いて近江に赴き給ひしが、山中に於て病に罹らせ給ひ、遂に伊勢の能褒野に薨去あらせられた。

宮竇媛は尊との御約を守り、獨り寢殿の床上に神劍を安置して奉仕せられたので、宮主媛命と稱するに至つた。宮主とは宮司の意味である。かくて媛命年老いて凡そ百歳ばかりになられた仲哀天皇の元年に、神託と朝命とに依つて美しき社殿を熱田に營み、神劍を遷し祀られる事となつた。之が即ち熱田神宮の起原である。

熱田神宮第四相殿及び知多郡大高町火上山鎮座の氷上姉子神社には宮竇媛命を祀つてあり、斷夫山古

墳はその御墓と云はれて居る。

斷夫山古墳（名古屋市南區熱田西町）|| 名古屋市南區熱田西町字根山にある前方後圓型の一大古墳である。此種のものとしては縣下第一の大古墳であるのみでなく、東海道地方第一のものとも云はれて居る。墳上には雜木林が繁茂して、中に數本の大木もあるが、所々に残つて居る切株から察すると曾ては老木が多數あつたのを知る事が出来る。

墳の大きさは前後の長さ七十一間三尺、前方の幅六十間三尺、高さ約八間あつて、前面は東南に向つて居る。昔は周圍に幅八間乃至十間の環濠を繞らしてあつたが、今は其痕跡を一部に於て認め得るに過ぎない。前方部と後圓部の接觸部の右側に半圓形の陪塚があり、又後圓部の西南其他に陶質の圓筒埴輪が露出して居る。

此古墳は宮簀媛命の御墓として世に知られ、古來熱田大宮司たる千秋家に於て奉仕して來たが、明治九年、白鳥陵と共に熱田神宮所屬地と定められ、現に「宮簀媛命之墓」と云ふ標柱が建てられて居る。

(3) 建稻種命と内津神社

建稻種命 || 天火明命^{アノホアカリ}十世の孫、尾張國造小止與命^{オトヨ}（小豐）の子で宮簀媛命の兄君である。景行天皇の皇子日本武尊が御東征の途次、尾張に入らせ給ふや、尊を己が家に迎へて奉仕し、更に東征軍の將として従軍せられ、各地に大功を建てられた。尋で甲斐國より尊と別れて越後方面に向はれ、所謂越の

蝦夷を平定せられたが、歸途不幸にも、駿河の海に過ち没して薨去せられた。

日本武尊は丁度美濃から尾張の内津まで歸られた時に、其の訃報に接して夢現のやうであると歎き悲まれ、其地に命の靈を祀られた。今の縣社内津神社が即ちそれである。内津^{ウツ}の地名も此時から起つたと傳へられて居る。尾張誌の一節に、「稻種命社當國に四社あり。第一内津社、第二尾張戸社、第三熱田第五相殿、第四波豆社（知多郡師崎）此外所々に之を祭る。宜なる哉、此命當國氏神の本居の靈にして、日本武尊嚮導の武勇神なり」とある。實に命は忠誠武勇共に拔群のお方であつた。

内津神社（東春日井郡坂下村大字内津）|| 東春日井郡坂下村大字内津、字上ノ町にある縣社で、祭神は建稻種命である。景行天皇の四十年、皇子日本武尊御東征をなし給ひ、年を超えて御凱旋の途次、信濃美濃を経て尾張の國に入り給ひ、篠城の地で建稻種命が駿河の海に没して薨去された事を聞き給ひ、尊は甚く悼み悲み給うて、現哉、現哉と仰せになり、此地に命の靈を祀り給うたのが、當神社の起原であることは前記の次第である。次で景行天皇は命の戦功を思召されて社殿を御改造あらせられた。然るに後世兵火に罹つて社殿其他が炎焼し、久しく假殿を設けて祀つたが、豊臣秀吉が朝鮮征伐の時當社に戦勝を祈願し、凱旋の後御禮のために社殿を造營したと云ふ。降て享和三年、崇敬者等が發起して、社殿を改築したのが今の建造物である。本社後方の山上に奥の院がある。

世俗に當社を妙見社と稱するのは、曾て妙見寺の僧徒が祭祀を掌つた時代があつて、大富村にありし妙見菩薩を此處に移し祀り、本地垂跡の説に基いて、妙見菩薩を建稻種命の本地であると唱へたから

である。

三 熱田神宮と八劔宮

(1) 熱田神宮 (名古屋市南區熱田新宮坂町)

官幣大社熱田神宮は、伊勢神宮に亞いで我が國に於ける最も由緒尊き大社で、名古屋市南區熱田新宮坂町に鎮座せられて居る。古來、熱田大神宮、熱田社、熱田神社、熱田大宮、熱田皇大神宮等と稱したが、明治四年官幣大社熱田神宮と稱し奉ることゝなつた。

御神體は日本武尊の和御魂ニギハクマなる草薙劔である。此神劔は、神代の昔素戔鳴尊が八岐大蛇を退治して獲られたもので、もと叢雲劔と申した三種神器の一たる事は、今更記するまでもなき次第である。

御劔は何時頃よりか土用殿に奉祀せられて、正殿には五座の神を祀られたが、明治に至り土用殿を廢して、五座の神と相殿とせられた。五座の神とは、

- 一ノ御前 天照大神
- 二ノ御前 素戔鳴尊
- 三ノ御前 日本武尊
- 四ノ御前 宮寶媛命

五ノ御前 建稻種命である。

御神體なる草薙劔は、元、日本武尊が宮寶媛命の許に残し置き給ひしもので、媛は敬みて奉仕されたが、やがて宮を營みて遷し祀られたのが本神宮の始めである。爾來尾張氏は神劔を奉齋しつゝ、一國の民政を行つたもので、其後大宮司が置かれるやうになつたが、矢張尾張氏か其一族が之に補せられた。當社に對して歴代の國司が尊崇したのは勿論、源賴朝は大宮司季範の女を母として其邸に生れた程で崇敬の念甚だ篤く、其他足利、織田、豊臣、徳川等の武將は何れも尊崇して多くの神領を奉り、社殿の造營も度々行はれた。

朝廷の御尊崇も亦格別で、後花園天皇の御宸翰の如きは國寶として現存して居る。維新後に於ても明治、大正、今上の三陛下を始め奉り、皇后、東宮、各宮様も度々御參拜あらせられた。

現今の社殿は明治二十六年に改築せられたものであるが、正面の海上門は元龜二年、信長の建立したもので、特別保護建造物となつて居り、又桶狭間戰勝の御禮として築いた青色瓦の築地塀も残つて居る。

社叢は老樹古木鬱蒼として茂り、古來七本樟と稱する樟の大樹が所々にあつて、極めて美しく、莊嚴な趣がある。攝社には、

上知我麻神社(熱田市場町鎮座)

日割御子神社(表參道入口の東方)

三 熱田神宮と八劔宮

三 熱田神宮と八劔宮

六二

孫若御子神社(日割御子神社の北方)
高座結御子神社(熱田東町字高藏)
氷上姉子神社(知多郡大高町氷上山)
等がある。

本神宮の寶物中國寶に指定せられたるものには、

金銅兵庫鎖太刀一口、菊蒔繪手筈一合、木造舞樂面十一面、紙本着色法華經涌出品一卷、紙本墨書後花園天皇宸翰一幅、

太刀||銘則國一口、銘宗吉二口、銘備前長船兼光一口、銘國友一口、銘長光一口、銘備前長船重光一口、銘九郎左一口、無銘一口、

短刀||銘來國俊一口、銘長谷部國信一口、銘國光一口、
脇差||銘長谷部國信一口、
劔||銘吉光一口、等があり。

海上門、鎮皇門は特別保護建造物に指定せられて居る。

ひむかしの國ことむけてみつるきは熱田の宮にしつまりいます (本居宣長)

(2) 八劔宮

熱田神宮の別宮で、本宮の南方に在つて、古來別宮、外宮、下の宮の稱がある。延喜式には愛智郡八劔神社、本國帳貞治本には正一位八劔名神、同元龜本には正一位八劔大明神とあるが、明治三十年今の稱に改められた。

祭神は祭神記に本宮御代官とあり、本國神名張集説には素戔鳴尊の和魂とし、名所圖繪には「祭神十座、神秘にして其何れの神たる事を知らず、故に謹んで私意を加へず」と記してある。八劔宮の八は彌の義で、八口の劔の意味ではない。

元明天皇の和銅元年、勅して神劔を作り熱田宮に別祠を建て、之を納めしめ、其祭祀を本宮の如くなさせしめ給うた。其後、伏見天皇の御代に、本社御改造があり、天正三年織田信長は當社の壞敗を見て修理を命じた。徳川家康も慶長四年に拜殿、廻廊、築地を修造し、又淺野長政に命じて本殿を營進せしめた。

貞享三年將軍綱吉が又社殿を新築したが、更に天保十年に改造せられた。明治元年天皇御東幸の際に内侍所は當宮に御假泊あらせられた。然るに明治二十六年に至り、伊勢神宮の外宮に倣つて、現在の如く御改造になつたのである。

四 津島神社と津島祭

(1) 津島神社 (海部郡津島町)

四 津島神社と津島祭

六三

海部郡津島町にある國幣小社で、祭神は素戔鳴尊である。元は牛頭天王社と云つて、牛頭天王の日本總社と云はれて居る。江戸時代より庶民の崇敬甚だ盛んで、東北地方から九州方面にまで及び、維新前は寺領千二百餘石を領して居たと云ふ。

縁起に依れば、欽明天皇の御代に素戔鳴尊の和魂が、對馬から此地に光臨せられたので、對馬(津島)と稱するに至つたと云ふ事である。降て南北朝時代に至り、後龜山天皇の勅命によつて、大橋三河守定省が社殿を造營したと傳へられ、織田信長も非常に尊崇して、社殿を營み神領を寄進した。當社の神紋が織田氏と同様木瓜であるのも之が爲めであると云ふ。現存丹塗の本殿は矢張信長の寄進で、特別保護建造物となつて居る。徳川時代に至つても、歴代藩主の尊崇が甚だ篤かつた。

境内は老樹繁茂し、社殿壯大で、實に森嚴の趣がある。堀田正泰が寄進したと傳へられる銘眞守の太刀一口及び銘長光の劔一口は本社之神寶で、國寶に指定せられて居る。六月十四日に行はれる船祭は古來著名である。

(2) 津島祭

津島の天王祭は車樂祭マシジリと云はれ、古來特色ある祭典の一つとして頗る著名なもので、由來最も古く、遠近より参拜者が集まり來つて非常に雑踏するのである。陰曆六月十四日は宵祭であり、十五日は朝祭であつて、本樂である。名高い提燈祭は即ち十四日の宵祭で、祭船五艘が萬燈の如く提燈を点じて、

車河戸の方より漕ぎ來る光景は、云ふべからざる壯觀を呈するのである。

五 尾張國分寺址と國廳址

(1) 尾張國分寺址

中島郡明治村大字矢合に在つて、地勢稍々隆起し、中島郡の平野に於て一丘を成す所である。聖武天皇の天平十三年勅願に依り諸國に國分寺が建てられたが、其當時に尾張の國分寺は此地に建立せられたのである。

現今、國分寺と稱するのが同字地内に在るが、昔の國分寺址は此寺より數町南の所に残つて居て、愛知縣から標石が建て、ある。礎石が附近に露出して居たり、古瓦が畑や小川の邊に散在して居たりするのを見受けるが、全體の範圍や規模は明かでない。本來の國分寺は何時しか廢頽して、其後に今の國分寺が經營せられたのである。寺には木像釋迦如來坐像一軀、同傳覺山和尚坐像一軀、同傳熱田大宮司夫妻坐像二軀があつて、何れも國寶に指定せられて居る。

(2) 尾張國分尼寺址

同郡同村大字法花寺にあつて、往昔、此處に國分尼寺なる法華滅罪之寺が建立されて居たのであるが今は推定するさへ困難な程である。後世に至りて現に存する法華寺と云ふのが、尼寺の跡に再興せれ

たものと云はれて居る。同寺の藥師堂に安置せられた木造藥師如來坐像一軀は國寶となつて居る。

(3) 國 廳 址

同郡稻澤町大字松下に在つて、俗に國衙屋敷と云ひ、現今神社が祀られて居る。附近からは遺瓦等も出で、比較的よく保存されてゐる。大化以後郡縣政治が布かれる時代となり、諸國に國司が任命せられて、國廳が設けられ、奈良朝に至りて國分兩寺が其附近に建立せられたのである。尾張の國司に就ては天武天皇の朝に小子部連鉤サヒチが國司となつた事が記録に見えて居る。それより壽永年中まで、凡そ五百年間に約百人の國守が更代して居るが、大江匡衡の如きは最も優れた國守で、此地に學館院を創設して、自ら其教授に當り、政教兩方面に盡力して居る。かの女流歌人として知られた赤染衛門は其夫人であつた。要するに數百年間に亘り尾張一國の政廳所在地として、由緒淺からぬ史蹟である。

六 尾張大國靈神社と國府宮祭

(1) 尾張大國靈神社

中島郡稻澤町國府宮に在つて、祭神は大國靈命を始め、伊弉諾尊其他六神で、尾張の國靈を奉祀した社である。延喜式内社で古くから鎮座せられた神社であるが、平安時代に入つて尾張の總社に充てられた。張州府志に、神庭に高き磐石あり、祠官最も之を敬ふとある。文徳天皇の仁壽三年官社に列せられ、古來毎年正月七日(陰曆)の御田祭、同月十三日の追儼祭(所謂國府宮祭)、五月六日の祭事等が行はれて居る。今は縣社となつて居るが、社殿、拜殿、祭文殿、廻廊、樓門等は、何れも古雅な建築で、境内も亦奥ゆかしい趣がある。

(2) 國 府 宮 祭

尾張大國靈神社に於て、舊曆正月十三日に行はれる追儼祭で、人身供奉の遺風を今に存する裸體祭として、全國屈指のものである。昔は往來の人を捕へ來つて、一國の災厄を負はせて追拂つたものであるが、一度びそれが禁止せられてからは、志願者の中から選抜して儼負人を定め、祭日の一ヶ月前から修祓潔齋せしめ、祭の當日未明に惠方に當る杜の中に逃れしめ、捕人が之を捕へて連れ來るのであるが、儼負も儼追も何れも裸體で、儼負に手を觸れて己の厄を負はしめんとして、幾千の裸體者が揉み合ひ押し合ふ様は、實に天下の奇觀である。而して當日集り來る者は厄年の男子が多いと云ふ事である。

七 尾張四觀音と密藏院

(慶長の名古屋築城に際し、西北は甚目寺、東北は龍泉寺、南東笠寺、西南荒子明神を以て四方の地鎮と定められた)

(1) 甚目寺 (海部郡甚目寺村大字甚目寺)

海部郡甚目寺村字東門前に在つて、新義眞言宗で、大須寶生院の末寺である。縁起に依れば、推古天皇五年、甚目龍鷹ハダメタツマロと云ふ漁夫が海中から黄金の聖観音像を得、一寺を建て其姓により甚目寺と稱したと傳へられて居る。

天智天皇御不豫の時、此寺の観音に祈願して御平癒あらせられたので、勅願寺となし給ひ、天武天皇の時、法皇寺(一説に鳳凰山)の額を賜はり、堂舎一字を建立せられ、次第に庶民の信仰も盛となつて一大伽藍を營むに至つたが、其後屢々震火災に罹つて荒廢に歸した。建久七年聖觀が再興の業を起しやがて佛閣の造營落成したが、天正十三年又も地震に遭つて殿舎が破壊した。同十七年修理漸く成り大須寶生院の法流を受けて、從來天台宗であつたのを改めた。

明治六年七月、火災に罹りて本堂以下焼失し、尋で再建せられたが、復々同二十四年の濃尾大震災によつて被害を蒙るに至つた。但、南大門(仁王門)は建仁元年の上棟に係るもので、明治三十三年特別保護建造物に指定せられた。又、本寺に藏する紙本著色の不動尊像(藤原時代のもの)と、兆殿司作と云はれる絹本著色佛涅槃圖とは共に國寶に指定せられて居る。其他塔中の釋迦堂には田中訥言、渡邊清の筆に成る襖がある。

(2) 笠覆寺 (名古屋市南區笠寺町)

名古屋市南區笠寺町に在つて、俗に笠寺観音と云ふ。新義眞言宗で、甚目寺と同じく大須寶生院の末寺である。天平八年、僧善光の開基で、十一面觀世音を安置し、小松寺と稱したが、其後荒廢して、本尊のみ風雨に露されて居たのを、鳴海の長者太郎成高の家女が、自らの笠を以て之を覆ひ參らせた。その女はやがて藤原兼平に嫁したので、延長年間に兼平が巨財を投じて堂宇を復興し、笠覆寺と名づけたと云ふのである。本寺所藏の色紙墨書妙法蓮華經卷第五、一卷は國寶となつて居る。

(3) 觀音寺 (名古屋市南區荒子町)

名古屋市南區荒子町に在つて、俗に荒子の觀音と稱し、天台宗で、東春日井郡篠木村密藏院の末寺である。天平元年僧自性の草創で、往古は七堂伽藍、塔頭十二坊あつて無双の靈場と云はれたが、其後衰頽したのを永祿年中智音院全運が再興した。前田利家は此地に出生せしを以て、當寺を崇敬し、天正四年堂舎を修築したことがある。本尊は正觀世音菩薩木像で、泰澄の刻せしものと云ふ。天文五年再興の多寶塔(三間二層塔婆屋根銅板葺)は室町時代の様式で特別保護建造物となつて居る。

(4) 龍泉寺 (東春日井郡志段味村)

東春日井郡志段味村大字吉根、字松洞の丘陵上に在つて、尾張平野を展望する景勝の地を占め、天台宗に屬し、松洞山大行院と云ひ、密藏院の末寺である。本尊は馬頭觀世音菩薩閣浮檀金の立像で、寺内の多羅々ヶ池より出現せられたものと稱せられて居る。

延暦年中傳教大師が熱田神宮に參籠中創建したと云はれ、熱田八劍中？の三劍は當時の寺中に納めたと傳へられ、ために古來熱田神宮の奥院と稱せられた。又弘法大師が神宮參籠の時にも、當山に參詣したと云ふ事である。

其後屢々兵火に罹つて炎上したが、天正十二年長久手役の時、秀吉が軍を當寺に駐め、諸堂宇、什寶等悉く烏有に歸した。慶長三年に至り、密藏院の僧秀純が自資を投じて再興し、本堂、二王門、多寶塔等を建立し、藩祖義直より寺田を寄進せられ、正徳二年輪王寺門跡から色衣免許の令旨を受けた。仁王門は規模壯大なる樓門で、特別保護建造物となり、又木造地藏菩薩立像一軀は、嘉元元年無住作の銘があつて、國寶に指定せられて居る。

(附) 密 藏 院 (東春日井郡篠木村)

篠木村大字熊野に在つて、天台宗延暦寺末で、醫王山藥師寺と云ひ、本尊は藥師如來である。後醍醐天皇の嘉暦三年慈妙上人の創造する所で、當初は七堂伽藍立ち並び、尾張、三河、美濃、遠江、駿河等の十一ヶ國に亘つて、七百有餘の末寺があつたと云はれて居る。開祖慈妙上人は、建仁寺葉上僧正四代の法嗣として禪密を傳へたから、當寺の傳法を葉上派又は篠木派と稱した程で、其榮えたことが想像されるのである。然るに元龜天正の頃より世の兵亂に伴ひ、遠國の末寺との關係も絶え、寺門も次第に衰頽した。

文祿四年豊臣秀吉は寺領百三十餘石を寄附し、徳川氏に至つても同様寺領を與へられた。元和五年名古屋城内に東照宮が造營せられるに及び、當寺の住僧は其別當に補せられ、爾來明治維新まで兩所を兼ねて管理した。

本堂は明治二十四年の濃尾の大震災に罹つて倒潰し、假本堂であるが、残存せる三間二層柿葺の多寶塔は室町時代の建築で、特別保護建造物となつて居り、本尊の木像藥師如來立像は國寶に指定せられて居る。其他本寺には後伏見上皇宸筆の扁額、宸翰、院宣を始め、古文書、佛畫類等の寺寶が澤山ある。

八 二村山と年魚市瀉

(1) 二 村 山 (愛知郡豊明村)

二村山は往昔鎌倉街道筋に當り、今の鳴海町と豊明村沓掛との境に在る山で、其頂上の眺めが頗るよいので古來尾東第一の景として旅人の眼を引いた名勝地である。

従て昔から此處を通過した人々の吟詠が多く残つて、後撰集、千載集、續古今集、續後拾遺集、新千載集、夫木抄等の歌集は勿論、東關紀行、貞應海道記、富士歴覽記、弘長百首、富士紀行、雪玉集等に載つて居る。左に其一部を摘記すれば、

權中納言俊忠

さつき暗 二村山の時鳥 峰つゞき鳴く聲を聞くかな

堀川院中宮上總

時鳥二村山や越えつらむ

源俊頼朝臣

あけはてゝのみ聲の聞ゆる

橋爲仲朝臣

くれはとり二村山を來て見れば

めもあやにこそ月はすみけれ

重之

から錦おらまくほしき木のもと

二村山のみぢなりけり

たがおりそめしからにしきそ母

秋風にはたおりむしの聲しげみ

たづねこえつる二村の山

後九條前基家内大臣公

霞たつ二村山の岩つゝじ

雪となり時雨となりて嶺わけに

かゝれる雪も二村の山

はるくくと二村山を歩き過ぎて

猶ほ末たどる野邊の夕やみ

阿佛尼

けふこゆる二村山のむらもみぢ

まだいろいろすし歸るさに見む

堯孝法師

しづかなる二村山の麓にぞ

千年の秋の花も咲きける

此山の峠に袈裟切地藏が在つて熊坂長範の傳説で有名である。尾張の俳人士朗の句に、

御佛は大同二年すゝきかな

とあるが、それは此石地藏の背に大同二年の文字が刻んであつたからである。猶ほ東北には勅使ヶ池

があつて一層の景觀を添へて居る。

八 二村山と年魚市湯

七三

(2) 年魚市潟アユチガタ (附、櫻田、鳴海潟)

年魚市潟の位置に就ては古來數説があつて明確になつて居ないが、一説には熱田、鳴海、知多の海濱の總稱であると云ひ、二説には、鳴海、櫻田、熱田の海岸を指したものと稱せられ、更に他説では熱田の海が深く北に灣入して居たそれであるとも云はれて居る。

地質の上から上代の地勢を推定すると、名古屋の東北から延びて來た丘陵が、名古屋城の邊から南走して熱田神宮の方に向つて半島形を爲して居て、其西方は庄内川の下流に沿つて今の甚目寺邊まで内海となつて居り、又東方は熱田の海が北に深く入江となつて居た。前津渡、古渡等の名稱が現存するのは古代渡場の名残である。即ち年魚市潟は此熱田東方の深き入江を呼んだのであると考へて大差はなからうと思はれる。而して同じく古來知られた鳴海潟は星崎の東天白川に沿つた入江で、櫻田は入江を隔てた東の丘陵地帯の裾であつたのであらうと推定されるのである。

現に名古屋市南區呼續町の眉間山白毫寺の見晴しのよい境内に「年魚市潟勝景」と刻した立派な記念碑が建つて居り、傍の別碑には「わだつみの神もほぐらしあゆちかた知多の浦波千代の聲して」と云ふ歌が刻されて居る。

夫木抄に

あゆちかた梶音すなり知多の江の あさげの風に片帆かくれて

あゆち潟しほひにけらし夕さらす あそぶちどりの聲のどかなり
年魚市潟あさこぐ舟のほのくと ちたのうらべに波よする見ゆ

奈良朝の高市連黒人の歌の、

櫻田へたづ鳴きわたる年魚市潟

潮干たづにけらし鶴鳴きわたる

は古來有名である。

今櫻田神社の境内の記念碑に、

あゆちかた汐みちくらしうちかすむ

さくら田さしてだづ鳴きわたる

と云ふ歌が刻まれて居る。

又、鳴海潟の歌で有名なものには、

なるみがた夕波千鳥たちかへり

友呼びつぎの濱に啼くなり

遠くなり近くなるみの濱千鳥

啼く音に汐の満干みちひをぞ知る

等がある。



九 小野道風の事蹟

(東春日井郡鳥居松村上條。宇多天皇の寛平六年(一五五)
四) 村上天皇の康保三年(一六二六)十一月十二日)

道風は筑前守葛弦の子で篁の孫である。寛平六年東春日井郡鳥居松村上條(一説には松河戸村)に生れた父葛弦事に坐して此地に謫せられ、里人の女を娶つて道風を生み、後赦されて都に歸つたと傳へられるが確實は保し難い。上條には今も道風の森と云ふのがあり、松河戸には道風朝臣遺跡碑があつて、側の觀音寺には道風の畫像及び眞筆が保存せられて居る。

道風は醍醐、朱雀、村上の三朝に歴史して、正四位下内藏權頭に至つたが、其書は一世を風靡して千古の能筆と讃へられ、佐理、行成兩卿と共に三蹟と稱せられた。其筆勢は遒勁神逸、流麗暢達の趣があつて、各體何れも佳なるが中に、草書は最も得意であつた。當時諸殿の題額や宮門の扁榜等は、道風の筆ならざるなき有様で、醍醐天皇は特に彼の書を愛し給うた。

天曆の頃、道風と大江朝綱とが書の甲乙を論じて決せなかつたので、主上の御批判を奏請した時、主上は朝綱の書の道風に劣ることは、道風の才の朝綱に劣るが如しと仰せられたと申す事である。

道風は曾て橋直幹のために、奏疏を書いたが、村上天皇は常に之を御座側に置いて鑑賞し給うた。會々禁中火を失した時、主上は左右を顧みて、直幹の疏は全きやと宣うて他を顧み給はなかつたと傳へられて居る。

道風は亦畫にも長じ、多武峰護國院の藤原鎌足の神像や高野山小坂房の勢至像は其筆である。近江國滋賀郡和邇村、京都府下葛野郡小野郷等には、道風を神として祀つてある。

一〇 融通念佛宗の開祖良忍

(知多郡上野村、後三條天皇の延久四年(一七三)
二) 正月元日―天承二年(一七九二)二月一日)

良忍は知多郡の人で、十二歳の時叡山に登りて、觀法を學び密灌を受け、後更に仁和寺に學んで顯密兩宗の奥儀を究め、二十三歳の時洛北大原山に隠れ、來迎院を創建して専ら身を禪定に委ねた。

一日、一異人が來て告げて曰ふに「師は何故に融通念佛を唱へないか、融通念佛とは我が唱へる所を廻らして衆人に之を融會し、衆人の唱ふる信念が亦我に通ずるを謂ふのである。而して衆生無邊なるが故に此念佛の功德は獨稱に優ること萬々である。師希くば此事を以て四海に勸誨せよ」と。良忍は之れより苦修練行、遂に鳥羽天皇の永久五年融通念佛を創唱するに至つた。時に年四十六。

やがて、鳥羽法皇は良忍を宮中に召して融通念佛の幽旨を聞し召され、御尊信愈々厚く、女院、公卿百官の歸依する者が次第に多くなつた。其後法皇は攝津の住吉に一寺を建立し給ひ、良忍を以て座主となさしめ給うた。之が即ち融通念佛の總本山大念佛寺である。かくて良忍は天承二年二月、六十一

歳を以て大原山の來迎院に入寂したが、安永二年後桃園天皇より聖應大師と謚せられた。

一一 大御堂寺とその附近の史蹟

(1) 大御堂寺の沿革及び現状 (知多郡野間村)

知多郡野間村宇柿並區にあつて、眞言宗に屬し鶴林山大御堂寺と云ふ。天武天皇の御代の草創にかゝり、聖武天皇の時僧行基が再び之を開基し、大同年中空海が諸國修行の途次、此寺に留錫して大護摩を修した事がある。其後、白河天皇の承暦年中に勅願寺となし、大御堂寺と命名せられたと傳へられて居る。大御堂寺は一山の總稱で、大坊、執行坊以下の十四坊があつて、大坊は別當職で一山を支配したのである。

平治の亂後、源義朝が此地に於て弑殺されたのを悼んで、平康頼が文治二年に寺祿として水田三十町歩を寄附し、一堂を建立して其冥福を祈つたが、更に頼朝が天下を一統するに及んで、建久年中當寺に來つて亡父義朝及び家臣鎌田政家の碑、並に康頼、池ノ禪尼等の墳墓を築き、尋で七堂伽藍を建てて大法會を營み、逆臣長田父子を墓前に誅して父の靈を慰めた。

かくて當時は、堂塔坊舎軒を並べて宏大であつたが、享祿四年兵燹に罹つて、唯大坊と樓門を残すのみとなつた。天文年間漸く本堂、鐘樓等を再建したが、慶長五年再び兵火のために大半烏有に歸した

其後更に復興に努めたが、亦昔日の壯觀を見る事が出来なかつた。

やがて徳川家康は寺領二百五十石を寄進し、其子義直も保護を與へて修繕せしめたが、明治維新の影響を蒙つて大に衰頹し、現在は本堂、山門、大坊、密藏院、安養院、法山寺等が存するのみである。

(2) 源義朝の最後

義朝は平治の亂に敗れて、漸く美濃に逃れ、更に關東に赴いて再舉を圖らんとし、鎌田政家等を従へて、伊勢海より内海に上陸し、政家の岳父に當る野間の長田忠致の許に到つた。長田父子は珍客として大に歡待したが、利に迷つて先づ政家を殺し、次で義朝を浴室に襲つて弑殺した(平治二年正月三日)。義朝は時に三十八歳であつた。その後、頼朝が天下の權を握るに及び、長田父子を磔殺して仇を報じた。

(3) 附近の史蹟

大御堂寺の境内に一區を劃して、義朝、政家夫妻、織田信孝等の墓があり、其外側に池ノ禪尼の供養塔がある。

義朝の墓は御廟所と云ひ、其碑石は寶篋印塔で、墓側に木太刀が堆をなして居るのは、義朝最後の時に「せめて木太刀にてもあらば」と叫んだと云ひ傳へられて、今に至るまで供養のために、木太刀を捧げる者が多いからである。

政家夫妻の墓は義朝の墓の北にある。政家の妻は長田忠致の女であるが、父兄の逆意を恨み、夫の最期を悲んで自害したのである。

織田信孝の墓は義朝の墓の南にある。小五輪塔で、右側に「大禪定門」、左側に「天正十二年五月二日」と刻してある。

山門は寺の東方に南面して建てられてある。七百五十餘年前頼朝の建立した古建築物であるが、近年修理が加へられた。

平康頼の墓は山門の西方にある。

安養院は大坊の南方にあつて、織田信孝の自刃した所である。寺には信孝辭世の歌、血染の幅等がある。

長田邸址は大御堂寺の東方約二町の所にあつて、今は桑畑となつて居る。

磔松は當寺の東南數町の丘上にあつて、頼朝が長田父子を誅して、其首を埋めた所と傳へられて居る。

一一一 源頼朝の生誕地 (名古屋市 區旗屋町)

頼朝は左馬頭義朝の第三子で、其母は熱田大宮司藤原季範の女である。彼は久安三年四月八日、母の生家なる季範の邸で呱呱の聲を擧げた。今は其跡が名古屋市南區熱田旗屋町の誓願寺の境内に残つて居る。

頼朝は極めて偉大な人物で、平家を滅ぼして天下の權を統べ、我が國政上の三大變革の一つなる武家政治を創始した次第は、今更記述するまでもなき程顯著な事實であるから、茲に省く事とするが、兎に角、頼朝を始め、後の信長、秀吉、家康と云ふ様な大偉人が、我が愛知縣から生れた事は、我等の最も誇りとする所である。

又、彼の外祖父に當る藤原季範は、熱田大宮司の中でも最も傑出した人で、平氏全盛の時に拘はらず克く源氏のために盡した。其伯母に當る池ノ禪尼を通じて頼朝の命乞をなし、更に義經を其邸に於て元服せしめ、源行家を助けて平家の軍を防ぎ等して、源氏の勃興に就て少からざる勳功があつた。

一一三 承久の亂と山田重忠一族の勤王

(1) 山田重忠 (名古屋市東區山田町。仲恭天 皇の承久三年(一一八八)歿)

重忠は山田太郎泉冠者重満の子で、春日部郡山田莊(今の名古屋市東區山田町)に生れた。源經基の後裔で五世の祖重實は鳥羽上皇に仕へて四天王の一人と稱せられた程で、代々武勇と勤王の家柄であつた重忠は性勇武にして才幹があり、人を待つこと寛恕、親に事へて孝、又勤王の志が厚かつたから、時人の推賞する所となつた。時に鎌倉に於ては、源氏の正統滅びて陪臣たる北條義時が幕府の實權を握り、朝威を輕んじて屢々勅命に背き奉つたので、英邁なる後鳥羽上皇は大に憤らせ給ひ、順徳上皇と

謀つて承久三年五月、義時追討の院宣を下し給うた。

重忠は直に院宣に應じて起ち、藤原秀澄と共に美濃洲股を守つたが、鎌倉勢が長驅して來り迫るに及び、官軍の諸隊忽ち崩壊し、戦はずして或は降り、或は逃げた。之を見た重忠は大に憤慨して、獨り九十餘騎を率ゐて杭瀬川の岸に踏み留まり、強弓を以て賊軍を防いだ。北條泰時の大軍が殺到するに及んで、衆寡敵せずし退却した。更に賊軍都に迫るや、重忠は延曆寺の僧兵を率ゐて勢多を守り、力戦して屢々敵を破つたが、泰時が宇治の官軍を破つて勢多を壓迫するに及び、支へる事が出來ず、殘兵を率ゐて京都に退き、嵯峨野に入つた。然るに賊兵又も來り迫つて重圍に陥り、遂に自刃して歿した。年五十六。大正六年正五位を贈られた。

(2) 重忠一族の勤王

承久の亂に重忠の一族は、擧つて官軍に屬し、王事に盡して忠死した、重忠の子重繼は傷を負うて捕斬せられ、其子兼繼は越後に流され、一族の重朝、重村、重慶等も皆死んだ。又美濃の住人木田重國、小島重俊、三河の士足助重成等も重忠の族であつたが、何れも此役に殉じた。

(3) 長母寺 (名古屋市東區矢田村)

山田重忠は又親に事へて孝心が厚かつた。長母寺は彼が母の菩提を弔ふために建立した寺である。寺は名古屋市東區矢田村に在つて、臨濟宗東福寺末で治承三年の創建にかゝり、觀勝を初代の開山とす

る。其後山田道圓坊夫妻によつて七堂伽藍が建立せられた。始めは天台宗であつたが弘長三年に第三世靜觀坊が寺を無住國師に譲つて開山とし、臨濟宗に改めたのである。

弘安四年には勅願所となり、康永二年には足利尊氏の祈願所ともなつた。織田信長も寺領を寄附したと云ふことであるが、秀吉に沒收せられ、寺も兵火に罹つた廢頽した。然るに慶安三年澤彦和尚が之を再興し、天和年間に至り尾張藩主光友によつて坊舎が建立せられた。

寺寶の木造無住國師等身の坐像は、無住自刻のもので、國寶に指定されて居る。同寺内には無住國師の墓(開山堂内)と、蓑蟲山人の墓とがある。

一四 大橋、堀田兩氏の勤王

(傳へられるが如く混合記、信濃宮傳記等が偽書であるとするれば、大橋、堀田兩氏の事蹟も不確實なる譯であるが暫く記して確説を待つこととした。)

(1) 大橋定省 (海部郡津島町の出生。吉野朝時代の人)

海東郡(今の海部郡)津島町の人で、平貞能の裔である。貞能は平家滅亡の後、肥後の大橋に隠れ、大橋氏と稱した。その後常陸、三河、尾張に潜み、遂に源頼朝に捕へられたが、やがて赦されて尾張國海部郡門間の莊を領するに至つた。貞能から六代目の貞方が始めて奴野城を築いた。夫れより貞則、貞清を経て定省が家を繼いだ。定省は神祇を尊重し、勤王の心篤く、後醍醐天皇の皇孫尹良親王に仕

へた忠臣である。親王が信濃に於て戦歿し給ひし後は、親王の遺命に依り御子良王を奴野城に奉じて終始忠誠を致した人である。

(2) 大橋 定元

定元は定省の第二子である。出で、吉野に赴き南朝に仕へた。應永四年世良田、桃井の諸將が尹良親王を上野に迎へ奉るに及び、定元は岡本、山川、恒河、堀田、平野等の諸士と共に、親王を守護して上野國に到り寺尾城に入つた。其後親王が信濃浪合の戦に薨じ給ひし後は、御子良王を奉じて故郷津島の奴野城に歸着し、子孫永く忠勤を勵んだと云ふ事である。

(3) 堀田 正泰

(海部郡津島町の人。後村上天皇の正平四年(二〇〇九)歿)

正泰は同じく津島の人で之高の子である。父之高は久明親王に仕へて鎌倉に在つたが、後尾張に來り中島郡堀田村を領し、やがて尾張守に任ぜられ、姓を堀田と稱するに至つた、其子正泰は彌五郎と云ひ勤王の心篤く、元弘建武の亂に吉野朝廷に仕へて忠節を盡し、正平四年、四條畷の戦に桶木正行に屬して勇戦奮闘し、終に戦死した、其子正盛、孫正重も亦正泰の志を繼いだ。

(4) 堀田 正重

正泰の孫である。同じく尾張守に任ぜられ、南朝に仕へて吉野に在つたが、應永四年大橋定元等と共に、尹良親王を守護して上野に赴き、親王薨去の後は御子良王を奉じて虎口を脱し、幾艱難を凌いで尾張の奴野城に入り、定元と共に永く王に忠誠を盡したと云ふ。

一五 千秋親昌(昌能?)の勤王

(名古屋市熱田。吉野朝時代の人)

親昌は藤原姓で、父の職を繼いで熱田大宮司となり、後、雍髮して源雄と號したが勤王の志極めて篤き人であつた。

建武二年、鎌倉に於て北條時行が亂を起して失敗するや、其將三浦時繼が海路より逃れて尾張に來り將に上陸せんとするのを捕へて京都に送致した。同年足利尊氏が鎌倉に據つて叛くに及び、新田義貞が勅を奉じて之を伐たんとするのを聞いた親昌は、百餘騎を率ゐて之に會し、賊軍を鷺坂に破つたが義貞の軍が箱根、竹の下に敗れたので、親昌も相共に京都に退却した。

延元元年、尊氏が九州より大舉して再び京都を犯した際には、後醍醐天皇に供奉して叡山に難を避けたが、やがて熱田に歸つて時機を待つた。

同年鎮守府將軍北畠顯家が、陸奥から兵を率ゐて西上を企て、行く行く沿道の賊を破つて熱田に至るや親昌は五百餘騎を以て之に従ひ、顯家を助けて近畿に轉戦したが、翌年顯家が石津で戦死したので、力及ばず又も尾張に歸つた。

其後脇屋義助が美濃に敗れて、尾張に逃れて來た時には、之をかくまつた事があり、更に正平年中、北朝方である尾張の守護代を討つて走らした事がある。

以上の事蹟は、大日本史に依ると親昌の猶子(甥)昌能の傳となつて居るが、熱田大宮司家の記録に依れば、之は大部分親昌の行事であると云ふ事で、同家の録上に基いて、大正二年親昌に正四位を贈られたのである。猶ほ之に就ては一層深く調査する必要があると考へる。

一六 陶祖加藤春慶と磁祖加藤民吉

(1) 陶祖加藤春慶

(大和國諸輪莊道蔭村。土御門天皇の建仁三年(一八六三)九月十九日—後宇多天皇の弘安八年(一九四五)三月十九日)

姓は藤原、氏は加藤、名は景正、晩年薙髮して四郎左衛門春慶と云ふ。藤四郎とは略稱で、瀬戸の陶祖である。建仁三年大和國諸輪莊道蔭村に生れ、祖父は橘知貞、父は藤原元安である。後、父元安が事に坐して備前松尾に配せられたので、春慶は山城の深草に住し、居常土器を作つて自ら樂んだ。やがて窯を築き土器の製作に従事したが、之を唐土製のものに比すれば遠く及ばなかつた。殊に釉薬を用ふる法等は全然知らなかつたので、春慶は大いに憤慨して苦心焦慮研究に努めた。

偶々道元禪師が宋に入ることを知りて大いに喜び、彼地に隨從して製陶の技を學ばんとし、禪師を九州に追うて從者となり、遂に渡航の志を達する事を得た、時に南宋の嘉定十六年で、春慶は在留六年間専心陶業を學び、又諸州を遍歴見學して、漸く其秘奥を極めることを得、安貞二年禪師と共に歸朝した。時に年二十六歳であつた。

かくて肥前の川尻に上陸し、直ちに窯を築き、宋から持ち來つた陶土を以て小壺三個を作り、一つを執權北條氏に二個を禪師に贈つた。尋で父を備前に訪ひ、更に母を外家に尋ねた。母の死後、普く天下を廻歴して製陶の良土を探つた。先づ泉州の陶村を始め畿内の各地を調べ、轉じて近江の信樂、伊勢の桑名、尾張の半田、末森等の各地で試作したが土質未だ意に滿たず、更に美濃の各務郡野口村を経て、再び尾張の山田郡瀬戸村(今の瀬戸市)に來たのであるが、茲に始めて會心の陶土を得、窯を築いて試作したが、宋より齎した土と比較して遜色がなかつた。春慶は欣然として基業の地を得たのを喜び、更に釉料を施して之を製した。これが所謂瓶子窯で、其器を古瀬戸と云ふのである。又別に舶來の土を用ひて茶壺を作つたが、世人は之を藤四郎唐物と云ふ。

これより製作愈々巧に、釉薬愈々精しくなり、更に一種の考案を施して異體の茶壺を作り、之を春慶と名づけた。現今瀬戸市にある國寶狛犬及び永平寺の什物小壺は之に屬するものである。

やがて春慶は、居を深川神社の東南に定めて永住の地としたが、晩年業を其子に譲つて北方の禪長庵に隱遁し、天壽を完うして八十三歳で歿した。明治十九年春慶製陶の功績顯著なる故を以て、特に正五位を贈られた。

(2) 春慶の碑

春慶は上記の如く瀬戸の深川神社の東南字郷、中島の禪長庵で歿し、五位塚に葬られた。而して墓上

には五輪石塔が僅に残つて居るに過ぎなかつたが、慶應三年同地の陶工加藤景登等が、其功業を追慕して、當時の明倫堂督學阿部伯孝に銘文を依頼し、六角陶製の「陶祖春慶翁碑」を墓前に建て、以て不朽に傳ふる事とした。

猶ほ當地の人々は春慶の恩惠の偉大なるを徳とし、深川神社の境内に陶彦社として之を祀り、毎年四月十九日に盛大なる祭典を行つて居る。

(3) 磁祖加藤民吉

(瀬戸市、後桃園天皇の安永元年三月一日
仁孝天皇の文政七年(二四八四)七月)

東春日井郡瀬戸の人で、吉左衛門の第二子である。諱は保賢、通稱を民吉と云ひ、陶祖春慶翁二十世の孫に當る。

享保元年熱田宮司津金胤臣が、熱田前新田開墾のために人々を募つた時、民吉は父と俱に來つて之に従事した。或日胤臣が開墾地を巡視した際、民吉父子の仕事に不慣なのを見て怪んで尋ねたので、民吉は自分等は瀬戸の陶工であるが、同地の掟として別居した者は新窯を築く事が出来ぬので、己むなく募りに應じて來た由を答へた。

胤臣は之を憫んで、自ら知つた居る南京製磁法を教へた。民吉父子は大に喜んで數回試焼したが中々意に叶ふものが出来なかつた。然るにやがて稍々意の如くなつたので、藩侯に願つて新窯を熱田に築かんとした。

瀬戸の里正加藤唐左衛門が之を聞いて大に驚き、「新田に新窯を開くのは我が邑の盛衰に關するを以て今日以後別家者にも窯を築く事を許すから、新田の開窯は取消して貰ひたい」と願ひ出るに至つたので、民吉父子は瀬戸に歸つて斯業に従ふ事となつた。此年、知己であり、恩人である胤臣が歿したので、民吉父子は大に悲み、今より一層奮勵して其恩に酬いなければならぬと決心し、新窯を設けて努力を續けたが、未だ完きものを造る事は出来なかつた。

適々天草圓窯の完全なのを聞くに及び、民吉は奮然九州に赴き、天草東向寺の住僧天中の紹介に依り上田源作と云ふ窯匠に就き、ほゞ其技に通じたが、顔料釉藥の法は嚴に秘して教へて呉れなかつた。よつて民吉は佐世保西方寺の僧及び松浦藩の今村幾左衛門の二人を訪ねたが、矢張秘法を知る事は出来なかつた。民吉は更に河内の窯匠福本仁左衛門の家に到り、留まる事二年、研鑽大に努め、遂に窯製磁の秘法を學ぶ事が出来たので、彼は感泣して其恩を謝し、去つて有田、泉山の諸窯匠を歴訪し再び天草に到つて天中に謝辭を述べ、舊師源作の家に往つて磁器を造つて見せた。源作は其技を嘆賞して、顔料釉藥の秘法を自ら書いて與へた。茲に於て、民吉は數年の苦辛の功全く酬いられ、青華磁の法を修熟して故郷に歸つた。これ實に文化四年の六月であつた。

歸郷後、直に圓窯を築いて試焼した所が、玉の如き磁器を得たので、其精巧なものを藩侯に獻じた。又邑宰永野正盛から民吉西遊の苦心を言上したから、藩主は大いに之を賞せられ、民吉父子に苗字帯刀を許し月俸二口を與へられた。

これより青華磁の聲價日に日に高くなり、之に就く者九十餘家の多きに達し、餘波は赤津、品野の諸邑に及んだ。今や斯業益々發展して輸出のみにても年額一千萬圓を下らざる盛況であつて磁祖民吉翁の功績偉大なりと云ふべしである。

文政七年七月、六十三歳を以て病歿し、鷹場山麓に葬つた。

一七 寶生院及び七ツ寺と國寶

(1) 寶生院

名古屋市中區門前町四丁目に在つて、北野山眞福寺と稱し、新義眞言宗智山派に屬する巨刹である。元、中島郡大須庄北野村(今の美濃國羽島郡小藪村大字大須)にあつたので、今に至るまで大須觀音として知られて居る。

伊勢の祠官度會氏の子、僧能信の創建する所で、後醍醐天皇歸依あらせられ、尋で後村上天皇の文和四年勅命に依り、攝津四天王寺の正觀音像を當寺に移し、永く勅願寺たる綸旨を賜はつた。

三世任瑜は後村上天皇の皇子と稱せられ、七堂伽藍の建立成り、門葉大に隆盛に赴き、濃、勢、尾三、信、遠等の諸名刹も多く當寺の末寺となり、寺産一萬石に上つたと云ふことである。

第七世任慶の時、後花園天皇より等身の弘法大師の影像を賜り、勅使殿を建て、金輪坊と號した。然るに、其後水難、兵亂のために廢頽するに至つたが、第二十世頼任が之が再興し、織田信長より制札を與へられた。慶長十年木曾川洪水のため、堂塔一時に流失し、寺寶の散逸するもの少くなかつた。同十七年徳川家康は成瀬正成に命じ、今の地に移して堂舎を造營せしめた。元和年中、尾藩主義直は經藏を葺し、經筐を修造した。寛永十二年檀家吉田半十郎が盡力して大悲閣を建てたが、壯觀を極むるものであつた。更に慶安年中、堂宇、佛像を修營して大いに輪奐の美を復したが、往昔の盛觀に比すれば十分の一に過ぎなかつたとの事である。

明治二十五年類火に罹り、庫裏、客殿、内佛殿、寶藏、末山寮を残して他は悉く燒失した、以來、漸次に再建せられて今日に至つたのである。

當寺は名古屋市の中央に位して、其附近は最も繁華を極め、幾多の活動寫眞常設館を始め、劇場、寄席等が多く、門前は恰も東京淺草觀音の中店通りのやうな觀を呈して居る。

(2) 寶生院の寺寶

當寺には寺寶極めて多く、世に眞福寺本と稱する諸種の珍籍を藏して居るが、徳川家康が保存の道を講じて以來、尾張藩の所管となつて、嚴重に保存せられ、維新の際にも散逸することなく、明治二十五年の火災にも幸に難を免れて今日に及んだ。寺寶の中で國寶に指定せられて居るものは、左の如くである。

- 一、絹本着色佛涅槃圖 一幅 一、漢書(食貨志)一卷 (以下何れも紙本墨書)
- 一、瑠玉集 二卷 一、古事記(賢瑜筆) 三帖
- 一、將門記(殘缺) 一卷 一、尾張國解文 一卷
- 一、七大寺年表(殘缺) 二卷 一、日本靈異記(上卷缺) 二卷
- 一、口遊(源爲憲撰) 一冊 一、本朝文粹(卷十二、十四) 二卷
- 一、同上(卷十四) 一冊 一、倭名類聚鈔(殘缺) 三十三葉
- 一、空也上人誄(源爲憲作) 一卷 一、熊野三所權現御記文 一卷
- 一、熊野權現藏王殿造功日記 二卷 一、續本朝往生傳(大江匡房撰) 一冊
- 一、拾遺往生傳(三善爲康撰) 三帖 一、後拾遺往生傳(同上) 三帖
- 一、三外往生記(沙門蓮禪撰) 一帖 一、本朝新修往生傳(藤原宗友撰) 一帖
- 一、弘法大師御傳 二卷 一、弘法大師傳(始×缺) 一冊
- 一、弘法大師傳記(始×缺) 一卷 一、弘法大師行化記 一卷
- 一、高野大師傳 一帖 一、弘法大師御入定勘決記 二冊
- 一、弘法大師御入定勘決抄 一冊 一、高野口決 一卷
- 一、翰林學士詩集(零本) 一卷

此外、和漢内外の諸典に亘つて、貴重なる古書籍が頗る多く藏せられて居るから、萬全の保存法を講じて置く事が必要である。

(3) 七ツ寺 (名古屋市中區門前町)

稻園山と號し、名古屋市中區門前町五丁目の西側にある新義眞言宗智山派の末寺である。昔は中島郡下津里の南、阿波手浦の西、萱津原の裏(今の太田村大字七ツ寺)に在つて、天平七年行基の開創と傳へられ初めは正覺院と稱した。

延曆六年、河内權守是廣が愛兒菩提のために、七區の精舎、十二の僧坊を建立したので、遠近の人おのづから七ツ寺と稱した、仁和三年大地震のために殿堂倒潰し、天慶四年平將門の亂に遭つて再び廢頽した。

仁安二年、尾張權守大中臣安長が、亡女の爲めに、其女婿豊後守親實と共に、七堂伽藍を再興し、稻園山長福寺と改め、高野山金剛峯寺に屬する事となつた。

安元元年に安長は一切藏經を書寫せしめ、治承二年轉法輪藏を建て、五千餘卷の寫經を納めた。文治元年住僧榮俊は佛工運慶及び其子湛慶を招きて、本尊木造三尊及び二天像を修彩せしめた。

然るに、建武年間の兵亂に遭つて、またも頽廢する事二百餘年、天正十九年豊臣秀吉が、鬼頭孫左衛門尉吉久に命じて、寺を清洲城下に移さしめ、僧良圓を中興の開山とした。

更に慶長遷府と共に、清洲より現地(當時は名古屋日置村と云ふ)に移したのである。現存せる單層、屋

根四注造、本瓦葺の本堂は、桃山時代を偲ぶ建物で、今は特別保護建造物となつて居る。

(4) 七ツ寺の國寶

本尊木造阿彌陀如來及兩脇侍、觀音、勢至兩菩薩の坐像三軀（傳行基作）、木像持國天、毘沙門天立像二軀、並に辛櫃入一切經は共に國寶に指定せられて居る。

特に此一切經は、尾張權守安長が發願して、安元元年より治承二年までに書寫せしめたもので、もとは五千餘卷あつて、三十一合の辛櫃に分收して經藏に安置したものであるが、後散佚して、今は四千九百七十卷存して居る。其中大般若經を納めた六函には、中蓋の表に、黒地に朱漆を以て、十六善神の像が畫いてあるので著名である。尙ほ須彌壇の三方にある十六區の獅子の彫刻も珍しいもので、當寺の佛像其他は藤原末期の製作として、彫刻史上缺くべからざる代表的の作品であると稱せられて居る。

七ツ寺

本 因

時鳥一聲は鳴け七ツ寺

士 朗

朝の間や花見がてらの寺せり

一八 篠 島 の 史 蹟

(1) 篠 島

知多郡に屬して師崎を距ること約五十町、伊勢海と衣ヶ浦との中間にある島である。周圍一里、東西二町乃至六町、南北十三町あつて、附近に數個の屬島がある。古へは伊勢に屬して居たが、豊臣秀吉の時に尾張に屬する事となつたと稱せられて居る。特に本島は興味ある史實、史蹟に富めるを以て有名であるが、主なるもの三、四を摘記する事とする。

(2) 伊勢神宮と篠島

本島が古來神宮領となつたのは、神宮に供進する御贄鯛を調進した爲めである。倭姫命が御巡視の結果本島の風光明媚、民俗順良なるを御覽になつて、此島を神領と定め、御贄所を命じ給うたと傳へられて居る。又、本島にある神明社には天照大神、大土御祖神、大歳神、宇賀御魂神を祀るが、中古から伊勢神宮御造營と共に、舊材の一部を下賜せられる事となり、其材を以て當社を造營する例となつたと稱せられて居る。

(3) 吉野朝廷と篠島

吉野朝廷の時、後醍醐天皇は結城宗廣の奏議を入れさせられ、大に恢復の業を興さんと思ひ立たせ給ひ

宗良親王を遠江に下して東國を徇へしめ、懷良親王をして九州に赴いて筑紫を鎮撫せしめ、北島親房の子顯信を鎮守府將軍に任じて、義良親王を奉じて陸奥に下らしめ給ひ、親房も亦輔佐として此軍に従つた。延元三年、義良親王、宗良親王、親房、宗廣等の軍は、吉野を發して伊勢に入り、其軍船は同國大湊を出帆して東航したが、遠州灘に至りて俄に暴風起り、船悉く四散漂流するに至つた。其結果宗良親王の御船は遠江に、親房の船は常陸に、宗廣の船は伊勢に、義良親王の御船は即ち篠島の海岸に著かせ給うた。

鳴民は大に驚き、恐懼して之を迎へ、東山の古城址を修理潔淨して王宮に充てたのである。後醍醐天皇は此報を得て大に驚かせ給ひ、日野大僧正頼意を勅使として此島に下らしめ給うたが、其時頼意は、神風や御船寄すらむ沖津浪

たのみをかけし伊勢のはまべに

と詠んで神官に授けたと云ふ事、「伊勢のはまべ」とあるは本島が當時神宮領であつたからである。義良親王は此島に駐まり給ふこと七ヶ月で、翌年吉野に還御せられ、同年十月御即位あらせられた。即ち後村上天皇である。

(イ) 篠島聖跡 本島の東北角、字東山(舊字古城山)の丘上にあつて、承安年間室賀左近大夫が城を築いたと傳へられて居るが、延元三年義良親王御漂著の時、古城を修理して入御を仰ぎ、親王は七ヶ月間此城に駐まり給うたので、今も行在所跡と申すのである。大正四年愛知縣から「篠島聖跡」の標柱が

建てられた。

(ロ) 帝井 島の北方、字照濱にあつて、四方切石を以て疊んである。其水が清澄で、早魃の時にも未だ涸渴した事がないと云ふ。義良親王御在島の砌、島中に清水なきを憂ひ給ひ、親ら御巡見の上、指定して穿たしめ給ひしを以て、今も帝井と稱するのである。

(ハ) 其他の史蹟 東山の南方海岸次郎ヶ濱は、義良親王の御上陸地点で、東山の北にある皇子ヶ膝は、親王御在島中、諸人が皇子の御膝下と稱して此所より御所を拜したと傳へられて居る。又、伊勢濱(前濱)は日野頼意の神風の歌によつて神風の濱とも云ふのである。

(附) 可睡齋等膳

(知多郡篠島、後陽成天皇の天正十八年(二二五〇)五月二十一日歿)

知多郡篠島妙見齋の住職で、幼より其性質磊落不羈、大に義氣に富み、權勢に屈する事を好まなかつた、徳川家康が今川氏に質となつて居るのに同情し、父五郎左衛門と謀つて、一族と共に窃かに駿河に到り、家康を葛籠の中に入れて舟に伴ひ、海路尾張に連れ歸り、暫く篠島に匿つて後岡崎に送つた事がある。それ以來家康は等膳を徳とするに至つた。

その後家康が志を得るに及び、等膳を招かうとしたが、容易に應ぜなかつた。而も終に懇請拒み難く赴いて面謁した。等膳は諸將列座の席に於て平然として家康と談笑數刻に及んだが、やがて其面前に於て居睡りを始めた。近侍の人々は驚いて之を制しようとしたが、家康は毫も之をとがめず、可睡の

名を與へて向後如何なる所にてても居睡り勝手たるべしと許可した。尙ほ家康は遠州周智郡久努西村に一寺を創建し、之を可睡齋と名づけ等膳をして開山たらしめ、十萬石以上の格式を與へたと云ふ。等膳遷化の後に、鳳山禪師と諡せられた。

一九 妙興寺と曼陀羅寺

(1) 妙興寺

中島郡稻澤町にある臨濟宗妙心寺派の巨刹で、圓光大照禪師の創建に係り、其師大應國師を開山とせる後光嚴院の勅願寺である。爾來法燈繼續し、累代の繪旨、院宣、教書其他の靈寶奇品多く、國中無雙の禪刹である。近世火災に罹つて其半ばを焼亡したのは遺憾であるが、屋根切妻造棧瓦葺の勅使門は貞治五年勅願に依つて建立せられた一種の四脚門で、意匠頗る奇功、今は特別保護建造物に指定せられて居る。開山堂に安置せる木造大應國師座像一軀の外、寺寶の絹本着色佛涅槃圖一幅、紙本着色足利義教像一幅は、共に國寶となつて居る。

(2) 曼陀羅寺

葉栗郡宮田町飛保に在る淨土宗の寺で、尾北に於ける名刹である。元徳元年後醍醐天皇の勅に依つて創建せられたもので、初め圓福寺と云つたが、寛正三年一老尼が淨土曼陀羅圖を授けたと云ふ靈異に因り曼陀羅寺と改めた。天文十年後奈良天皇より勅願寺の繪旨を賜はり、天文二十年織田信長が伽藍を修理し、秀吉も亦坊舎の修理、寺領の寄附をした。更に尾張藩主徳川家からも二百三十餘石を與へられた。

寺域は廣大で、本堂を始め古雅な建物や塔頭が配置よく建ち並んで、清疎閑雅の趣に富んで居る。國寶に指定せられて居る絹本着色淨土五祖像五幅を始め、彌陀三尊(傳顏輝筆)以下書畫古文書、古器物や、朝鮮鐘等の寺寶がある。

二〇 織田氏の興起と勝幡城址

(1) 織田氏の勃興

應仁の大亂後、室町幕府の威令が全く地に墜ちて、世道人心の頹廢甚しく、諸侯は各々其領地に據つて争奪を事とし、宛然弱肉強食の亂世となり、實力本位の社會を現出して、舊家は次第に勢力を失ひ部下の實力ある者が、主家を壓倒し、其國を奪つて、所謂下剋上の時代となつたが、此潮流に乗じて尾張に起つたのが織田氏である。

織田氏は、通説には平重盛の子資盛の後で、資盛の子親眞は母に伴はれて近江の津田に匿れ、やがて

越前織田莊、織田神社の祠官に養はれたが、其裔常昌は、織田三郎四郎と稱して管領斯波氏に事へ、其領地尾張に移つたと云はれて居る。併し之に就ては遺憾ながら充分信すべき確證がない。却て織田氏は藤原氏の一族ではないかとの説さへある程で、確實な所は不明である。けれども織田氏の祖が、織田莊から興つた事は大體に於て認められて居る。

而して、織田氏は斯波氏の家老となつたが、斯波義重が尾張の守護を兼ねてから、其守護代となつて尾張に勢力を張るに至つた。應仁亂後、斯波氏の衰へると共に、織田氏の勢は主家を凌いで次第に尾張の實權を握つたが、其後、織田氏は清洲、岩倉の兩家に分れ尾張を二分して各々四郡を支配して相争つた。天文年間、清洲織田氏の三奉行の一人に織田信秀が出るに及んで、勇略拔群、遂に兩織田氏を壓倒して國內に威を揮ひ。進んで勢力を東西に伸さんとするに至つた。此信秀が即ち信長の父である。

(2) 勝幡城址

(海部郡美和村大字勝幡と中島郡平和村大字六輪の地に跨る)

勝幡城の舊位置は、今の海部郡美和村大字勝幡の地内と、中島郡平和村大字六輪の地に跨つて在つたやうである。其城の起原に就ては、尾張國司歷任略に、從五位上大中臣朝臣安長が、二條院の應保元年尾張權守に任ぜられ、海部郡勝幡城に居ると記してある。其後、館舍廢絶して久しきに及んだが、後柏原天皇の永正年中、清洲の織田大和守家老織田彈正忠信定が、再び此地に築いて居住したのである。而して其子信秀は當城内に生れ、又此城に據つて勃興し、やがて尾張の大部を風靡するに至つた。織田氏の發祥地として最も由緒深き史蹟である。

然るに、信秀が今川氏豊の那古野を取り、更に古渡城を築いて、享祿四年之に移るに及び、廢城となつた。

現今城北には次の如き碑文を刻した標柱が建つて居る。

此城東西百四十間南北百二十間繞以二重塹其遺址可推知織田信定所築也信定稱彈正忠岩倉城主織田敏信弟始爲小口城主兼木下城主永正年間築本城居之享祿元年卒長子信秀嗣家稱備後守爲斯波氏三奉行之一後至襲今川氏豊取那古野城又新築古渡城及末森兩城移之本城遂廢矣蓋信秀卒先勤王獻金于朝廷修營宮室其子信長亦奉密敕專効力於王室能奏揆亂反正之功者乃發源于此城也今當大典建碑表之

大正四年十一月

一一一 織田信秀と末森城址及萬松寺

(1) 織田信秀

(海部郡勝幡城。後柏原天皇の永正五年(一一六八)後奈良天皇の天文十八年(一一〇九)三月三日)

經歷||信秀は勝幡城主信定の子で、信長の父である。勇武智略群を抜き、斯波氏三奉行の一人となり彈正忠と云ひ備後守と稱した。

天文元年三月、詭計を以て那古野城（今の名古屋城址の地にあつた）を陥れ、今川氏豊を逐つて自ら移り住んだ。これより其威名大に振ひ、次第に清洲、岩倉の兩織田氏を壓倒して、殆ど尾張一圓を統一した。

茲に於て、信秀は進んで三河の松平氏、美濃の齋藤氏と争ふに至つた。天文四年古渡城を經營して移住したが、此年松平清康が尾張に侵入して、家臣のために殺され、却て所謂「森山崩れ」をしたのに乘じて、信秀は三河に兵を進めたが成功せなかつた。同十一年今川義元と小豆坂に戦つて之を破り、十三年には安祥城を攻略して、子信廣を城主とし、翌年再び三河の地を侵したが敗退した。

十六年、齋藤秀龍（道三）を稻葉城に攻めたが却て敗れ、翌年秀龍の女を信長に配して和を講じた。十七年更に末森城を築いて移つたが、今川、松平兩氏と抗争半ばにして病歿した。年四十二（天文十八年三月三日）信秀の勤王（當時朝廷の御衰微は其極であつたが、信秀は早くから勤王の志厚く、天正十三年には平手政秀を京師に遣はし、築地御修理の資として四千貫文を献上したので、後奈良天皇は叡感斜ならず綸旨並に古今集を賜つた。又伊勢神宮の衰微を嘆き。費用及び用材を献じて、外宮の御遷宮に資する所があつた。尊皇敬神の念薄き當時に於ては、蓋し異數とすべきである。

(2) 末森城址

(イ) 位置、沿革（名古屋市中區田代町字城山にあつて、天文十七年に織田信秀が始めて此地に築き、

古渡城から移り住んだもので、北方の守山城を守る弟信光と共に、主として東方三河方面に對する固めとしたのである。然るに同十八年三月信秀が病歿したので、其三男信行（信長の弟）が繼いで居住し柴田勝家、林通勝等が之を輔佐した。

やがて信行が叛志を起して、兄信長に代らんとする陰謀を企つるに及び、却て信長に殺されて此城は廢城となつた（永祿元年十一月二日）。但、田代町桃巖寺の信行の位牌には弘治三年十月二日と誌してある。

(ロ) 現状（此城は元、東西二郭に分れ、東を東丸、西を二の丸と稱して、各古井一箇所あり、周圍には内外の空濠があつた。今も猶ほ本丸周圍の内濠、其北の半月形の濠、又その西方から北方を廻つて東方に至る外濠等は比較的よく舊形を存して居る。本丸址の北方に左の如き石柱がある。

末森城址

天文十六年織田信秀始築之。其子信行繼居此城。後廢矣。

昭和二年一月

(3) 萬松寺

龜岳山萬松寺と云ひ、名古屋市中區裏門前町一丁目北側にあつて、曹洞宗總持寺の末寺である。今は菊人形の名所として名高いが、織田信秀が古渡城主であつた時、天文九年に創建したもので、又信秀を葬つた所である。

徳川家康が竹千代と稱した頃、質として今川義元に送られんとした際、途中に於て田原城主戸田康光に捕へられて織田信秀の許に送られ、此寺に居つた事がある。また藩祖義直の正室高原院江戸に於て逝去するや、遺命によりて此寺に葬つたが大正三年建中寺に遷された。

一二二 織田信長の偉業

(1) 織田信長の事蹟

(名古屋市那古野城。後奈良天皇の天文三年(一一九四—五)月廿七日—正親町天皇の天正十年(一五八二—三)六月二日)

イ、**生立**—信長は、我が愛知縣の生んだ一大偉人たることは、今更云ふまでもない。信秀の第二子で、天文三年那古野城に生れた(或は古渡城又は勝幡城に於て生れたと云ふ異説がある)。姓は自ら平氏と稱し、小字は吉法師、三郎と云ひ、同十九年元服して信長と改めた。少時より大志あつて細節に拘はらず、性勇決にして磊落、其素行往々常規を逸し、傍若無人の振舞多く、士民をして其人物を疑はしむる所が多かつた。同十八年父信秀が歿して家を繼いだ後も、日夜武事を好んで國務を顧みず、依然として行狀を改めなかつた。其傳平手政秀は深く之を憂ひ、屢々諫めたがその甲斐なく、遂に諫言五章を奉つて自刎した。是に於て流石の信長も始めて改悟し、他日大功を天下に立て、前過を償はねばならぬと誓つて、發憤する所があつた。

ロ、**其事業**—當時群雄四方に割據して戰亂絶え間なく、信長は天下を平定せんとする大志を抱いたが其勢力は未だ尾張一國にも充たなかつた。然るに、永祿三年、今川義元親ら駿、遠、參の大軍を率ゐて來攻し、其勢威頗る鋭く、鷲津、丸根の兩城主使を馳せて急を告げるに至つた。諸將は本城(即ち清洲城)に據つて防守せん事を主張したが、信長は敢然として之を却け、直に手兵を率ゐて前進し、風雨に乗じて、義元を桶狭間(實は田樂狭間)の牙營に襲つて斬殺し、駿遠の精騎二千餘級を獲、俄に其威名天下に振ふに至つた。次で徳川家康と結んで東方に備へ、美濃の齋藤龍興を滅して岐阜城に移り(永祿七年)次第に勢力を擴張した。

時に正親町天皇は信長の武名を聞召され、永祿十年勅使を下して、天下の亂を平定し御料所の恢復を命ぜられたので、信長は大に感激して叡慮に應へ奉らん事を期し、近江の淺井長政、東の武田信玄等と婚を結び、ひたすら上洛の準備をした。偶々足利義昭が越前から來て信長に頼り、幕府の恢復を懇請したので、信長は永祿十一年軍を率ゐて近江に進み、佐々木承禎を蹴破して京都に入り、三好、松永の殘黨を逐つて義昭を將軍とし、二條の第を經營して之に居らしめ、又皇居を修理し、新に御料を奉り、廢絶せる朝儀を復興する等、大に王事に勤めた。

それより信長は、但馬を定め、伊勢の北畠氏を降し、元龜元年には姉川(近江)に淺井、朝倉の聯合軍を破り、翌年比叡山を攻めて延暦寺を焼き、山僧を滅盡した。同三年には徳川家康を援けて、武田信

玄と三方ヶ原に戦つたが敗れた。然るに將軍義昭は、信長の威名を忌み、武田、毛利の諸氏と通じて屢々之を除かんとする陰謀を運らしたので、天正元年信長は意を決して義昭を放逐した。又此年淺井朝倉の兩氏を滅ぼし、長島の一向宗徒を平げ、大阪の石山本願寺を攻めて殆ど近畿地方を平定し、同三年には武田勝頼の大軍を、家康と共に長篠(三河)に粉碎した。

翌天正四年(二三六)安土城(近江)を築いて移り住む事となつたので、信長の晩年を安土時代と云ふのである。更に同五年には部將羽柴秀吉に命じて中國征伐に當らせたが、秀吉は連りに勝つて備中にまで進んだ。

猶ほ、これより先き信玄逝き(天正元)、上杉謙信も亦俄に病歿し(同六)、十年には勝頼天目山に敗死して武田氏も滅びたので、信長の勢力は益々伸張し、天下は次第に一統の形勢を生ずるに至つた。

此時、中國征伐の秀吉より援兵を求め來つたから、信長は之を諾し、明智光秀に命じて先發せしめ、自らは安土を發して京都の本能寺に宿つた。然るに光秀俄に反して本能寺を夜襲するに及び、信長激怒し、自ら從兵と共に血戦したが、遂に天野源五左衛門のために刺殺せられて薨じた。時に年四十九(天正十年六月二日)

信長は生前、官位累進して正二位右大臣に上つたが、薨後正親町天皇は從一位太政大臣を贈り給うた今、京都市外船岡山にある別格官幣社建勳神社は信長を祀つた社である。

而して、墓は京都市郊外の大徳寺及び名古屋市中區門前町總見寺の境内にあつて、法名は初め天徳院

後に總見院泰巖と云ふ。

ハ、**信長成功の原因** 信長が群雄に先んじて京都に入り、霸業を成し得た原因と認むべきは、根據地たる尾張の位置が良好であつたこと 尾張は土地が豊饒であつたと共に、京都との距離が、都の動亂の及ぶ程近くもなく、又軍を都に出すに甚しく困難な程遠くもなかつた。

獨創的智略と絶倫の精力とに富み、勇斷果決の質であつたこと 信長が時代の大勢を看取して、其智略と精力とを縦横に發揮した事は、早くから長槍を使用したり、鐵砲隊を第一線に置いて最有効に利用したり、近世的大城郭を築いて備へたり、兵船に鐵張を試みたりした事等によつても其一般を知ることが出来る。

よく人材を拔擢して用ひたこと 秀吉を始め、信長の諸將が殆ど皆卒伍から立身した事によつても明かである。

ニ、**勤王、敬神** 信長に就て特筆すべきは、父信秀の遺志を受け繼いで、勤王、敬神の念に富んで居た事である。彼は我が國を統一するには皇室を中心とすべきを確信し、入京以來御所を修理し、御料を恢復し、資を獻じて廢れたる朝儀を復興する等、尊皇の大義を實行して叡慮を安んじ奉る事を怠らなかつた。又伊勢神宮の造營の如きも、宮司の求むる費用の三倍を與へて、猶ほ不足の時は必要に應じて支出すべきを通じて、敬神の誠意を現して居る。大正六年に特に正一位を贈らせられたのも、信長の此の如き偉大な勳功を表彰せんとする大御心によるのである。

(2) 平手政秀と政秀寺

イ、平手政秀(名古屋市西區志賀町。後土御門天皇の明應元年(一一五二)五月十日—後奈良天皇の天文廿二年(一一五三)正月十三日)

中務大輔と云ひ、名古屋城北西志賀の人である。人と爲り勇武忠厚にして連歌をよくし文事に長じた織田信秀に仕へて嗣子信長の傳となつた。天文十八年信秀卒し、信長十六歳で家を繼いだが、其性倨傲にして放恣、専ら武事を好んで國事を顧みず。素行常規を逸して傍若無人の振舞が多かつた。政秀は大に之を嘆き、「嗣君をして此暴狀を擅にさせるのは、皆我が罪で、先君の寄託に背くものである」と曰つて、屢々諫め、又五ヶ條の諫言書を捧げたが、毫も用ふる所がなかつたので、其領邑志賀村に退いて自刃した。信長之を知つて大に驚き、急遽裸馬に跨つて、政秀の許に馳せ著けた。政秀は苦痛を忍んで信長の手を取り、涕泣して其非を諫めた。信長感激して「今より直に汝が言に従ふべし」と誓つた。政秀は喜んで瞑目した。時に天文二十二年閏正月十三日。年六十二。これより信長は翻然として前非を悔い、専心國事に勵む様になつた。やがて信長は、政秀寺を小木に建て、政秀の菩提を弔つた。他年信長の勢威が大に揚るに及んで、政秀の忠死を追懷して己まなかつたと云ふ事である。

ロ、政秀寺今、名古屋市中區矢場町二ノ切の北側にあつて、臨濟宗妙心寺派の末寺で、瑞雲山政秀寺と云ふ。

天文二十二年、織田信長が其傳政秀の忠死を憐み、菩提(よめに小牧山の南に當る小木村(今は西春日井郡大字小木)に一字を建立し、其實名に因みて寺號を政秀寺と名づけ、僧澤彦を開山としたのである。其後天正十三年清洲城下に移轉再建し、更に慶長十五年現在の地に移された。寺内にある政秀の墓には「政秀寺殿功庵宗忠大居士」と刻まれた一大墓石が建てられてある。よろづよにくちせぬ名こそものゝふの、こゝろをみがくかゞみなりけれ。(仲敏)

(3) 清洲城址(西春日井郡清洲町大字清洲)

西春日井郡清洲町の西南、大字清洲字古城の五條川畔にある。應永年間、尾張の守護斯波義重の始めて築城した所で、代々家臣をして之を守らしめた。應仁亂後、斯波義廉が再び守護となつて此城に住み、中島郡松下村にあつた國衝の廳舎を此處に移して大に城郭を擴張した。

それより義良、義達、義統が相繼いで居住したが、天文二十二年義統が家臣の織田信友に弑せられたので、其子義銀は織田信長に援を求めた。是に於て信長は柴田勝家を遣はして信友を誅し、義銀を立て、本丸に置き、自ら二ノ丸に移つて臣事した(弘治元年)。然るに義銀は信長の勢を嫉み、三河の吉良義安と計つて之を害せんとしたから、信長は怒つて義銀を逐ひ、自ら本城に據る事とした。これより信長の威名揚がると共に清洲城の名も漸く天下に高くなつた。

永祿六年、信長は之を家臣に守らしめて小牧城に移り、更に岐阜、安土の諸城に本據を移したが、猶

ほ清洲城を以て重要根據地とし、東海、北陸の諸國を平定した。

天正十年、信長が本能寺に於て弑せられるや、山崎合戦後主なる舊臣等が此城に會議し、信長の第二子信雄が伊勢、尾張を領して長島、清洲兩城の主となつた。

同十八年、小田原征伐の時、信雄に過失あつて秀吉に逐はれた後、豊臣秀次が城主となつたが、文祿四年亦貶せられて福島正則が之に代り、關ヶ原戦後家康の第四子松平忠吉が、武藏の忍から此處に轉じた。其歿後、慶長十二年四月家康の第九子義直が、甲斐から尾張五十萬石に封ぜられて本城に據ることゝなつた。

慶長十九年に至りて名古屋城竣工し、翌元和元年義直之に移つて遷府式を擧ぐるに及び、自然廢城となり、之と共に城下の社寺を始め、藩士及び商工業者も多く名古屋に移轉し、殆ど廢墟の如くなつてしまつた。

かくて城址は全く荒廢して、蕞爾たる一小丘となるに至つたが、大正の時代に至り、史蹟保存の爲め清洲公園建設せられ、城址の面目を一新した。舊本丸跡に二碑がある。一つは弘化年間古城の遺石を以て建てられたもので、「右大臣織田信長公城跡」と刻され、一つは文久年間の建設に係る清洲城墟碑で、齋藤拙堂の撰文である。

清洲城懷古の詩

一萬能勝五萬兵。將軍神策實豪英。城門街陌今安在。田野空存昔日名。(大窪詩佛)

二三 桶狭間古戰場と關係史蹟

(1) 桶狭間古戰場 (愛知郡豊明村大字榮)

桶狭間は知多郡有松町の東方約十町、愛知郡豊明村大字榮にある古戰場である。東海道に沿つて、三方丘陵に囲まれた一帯の地で、古來田樂狭間又は屋形狭間とも云つた所である。

永祿三年五月、今川義元は駿、遠、參の大軍を率ゐて上洛を企て、同月十八日其先鋒は尾張に進んで織田氏に屬する丸根、鷲津の兩砦に迫つた。清洲城に於て此報を得たる信長は老臣の防守説を斥けて邀撃の決意をなし、十九日拂曉、「人生五十年、下天の内にくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」と敦盛の一節を舞ひ、單騎直ちに鞭を擧げ、途中熱田神宮に戦勝を祈り、敢然として東に進んだ。馳せ加はる部下の兵約三千餘騎。信長は鳴海方面に兵を出して敵を牽制し、自らは一隊の精銳を率ゐて山路を迂回し、風雨に乗じて義元を桶狭間の本營に急襲した。不意を衝かれて今川勢は潰亂し、大將義元も無慘な最後を遂げ、忽ち信長の武名を天下に高からしめた古戰場である。

義元の墓碑は明治九年の建設で、「今川治部大輔義元之墓」と刻せられ、其東方に桶狭間吊古碑が建つて居るが、其碑文は尾張藩の儒官秦鼎の撰である。又東方の松林中に士大將の七石表があり、西方の

丘上には今川氏の部將松井兵部宗信の墓がある。猶ほ東北に當る字前後の丘上に戦人塚と云ふのがあるが、之は信長が今川勢の首級二千五百餘を實驗し、其遺骸を此處に埋めたと傳へられて居る。香川景樹の桶狭間懷古の歌に、

跡とへば昔のときの聲たてゝ

松にこたふる風の悲しき……とある。

(2) 關係史蹟

イ、大高城址 (知多郡大高町字城山)

所在、沿革 知多郡大高町城山にあつて、往昔、花井備中守が居住したと傳へられて居る。其時代は詳でないが、知多郡史によれば室町時代の始、尾張の守護土岐氏の重臣に花井、富田の二氏があつて尾張に來て其守護代と稱したとあるから、花井備中守が城主であつた事は、室町時代と推定することが出来る。

然るに、天文、弘治の頃より水野氏が相繼いで此城を兼領するに至つた。水野氏は初め今川氏に屬して居たが、忠政の子信元に至り、今川氏と絶つて織田氏に屬した。永祿二年に至り、鳴海城主山口左馬介が織田氏に叛いて此城と沓掛の城とを掠めて、今川義元に屬したので、義元は大に喜んで鶴殿長助(長照)をして之を守らしめた。織田信長は之に對して鷲津、丸根に砦を構へ、其糧道を絶つたので義元は之を聞き松平元康に命じて糧を城中に納れしめた。之が有名な大高兵糧入である。

翌三年五月、桶狭間の戦に元康は當城を守つたが、義元敗死の報を得て、夜に乗じ兵を撤して三河に歸り、以來此城は一旦廢絶した。元和二年志水忠宗が一萬石を領して邸宅を當城址に設け、子孫相繼いだが明治三年廢毀せられた。

現状 古城圖によれば、中央に本丸があつて、其東に二の丸があり、内濠、外濠が繞らしてあつたが外濠は大體藪となつて現存し、内濠は認める事が出来ない。現今は久野氏の所有で、北方を入口とし二の丸に至つて本丸に出る様になつて居る。本丸中央の北方に「大高城趾碑」が建てられてある。

坂正臣氏の歌に、

「城跡の野への八千草武士の

鎧の袖の色に咲きつゝ」とある。

ロ、鷲津砦址 (知多郡大高町字鷲津)

大高町字鷲津にあつて、永祿二年織田信長が今川氏に對抗せんがために設けた砦で、飯尾定宗、其子信宗、織田信平等をして守らしめた。同三年五月桶狭間の役に、朝比奈泰能等の今川勢が來攻するに及んで、防戦大に努めたが、敵が火を放つて一齊に襲ひかゝつたので、衆寡敵せず宗信以下大半死傷して砦は陥つた。

其位置は大高停車場の東方、長壽寺後方の岡丘であると傳へられて居るが、一説には鷺津山であるとの説もある。今は山林又は耕地となつて居る。古城志等には疆域東西十四間、南北十五間とあるが詳でない。「鷺津砦址」の碑が建つて居る。

ハ、丸根砦址 (知多郡大高町字丸根)

大高町字丸根にあつて、大高停車場の東南に方る岡阜上の小山が其舊址である。沓掛から桶狭間を経て大高に至る道路に臨んで居る。永祿二年信長が、大高城に備へるために、鷺津と共に砦を設け、佐久間盛重をして之を守らしめた。桶狭間役の時、松平元康の勢に攻められ、盛重以下奮戦して一時は敵を破つたが、やがて盛重丸に中つて斃れ、從兵多く戦死して砦は遂に陥つた。今も周圍に濠の形が現存して居り、「丸根砦址」の碑石がある。

ニ、鳴海城址 (愛知郡鳴海町)

鳴海町字城及び根古屋に亘存し、一つに根古屋城とも云ふ。東西二郭をなし、空濠を以て界し、東西通じて七十五間、南北三十四間餘であつたが、今は皆耕地となり、唯東西北の三方に空濠土壘の形を存して居るのみである。應永中安原宗範の築く所で、永祿に至り今川氏の臣岡部五郎兵衛が古城を修理して之に據つたが、桶狭間戦前に此城を引き拂つた。其後、信長の將佐久間信盛、其子正勝が之に居つたが天正十八年廢城となつた。

ホ、善照寺砦址 (同上)

鳴海町字砦にあつて、永祿年中、織田信長が今川義元の軍を拒ががために、砦を此地に設けたのである。今は畠地となつて數株の老松が、昔を語るのみである。

ヘ、丹下砦址 (同上)

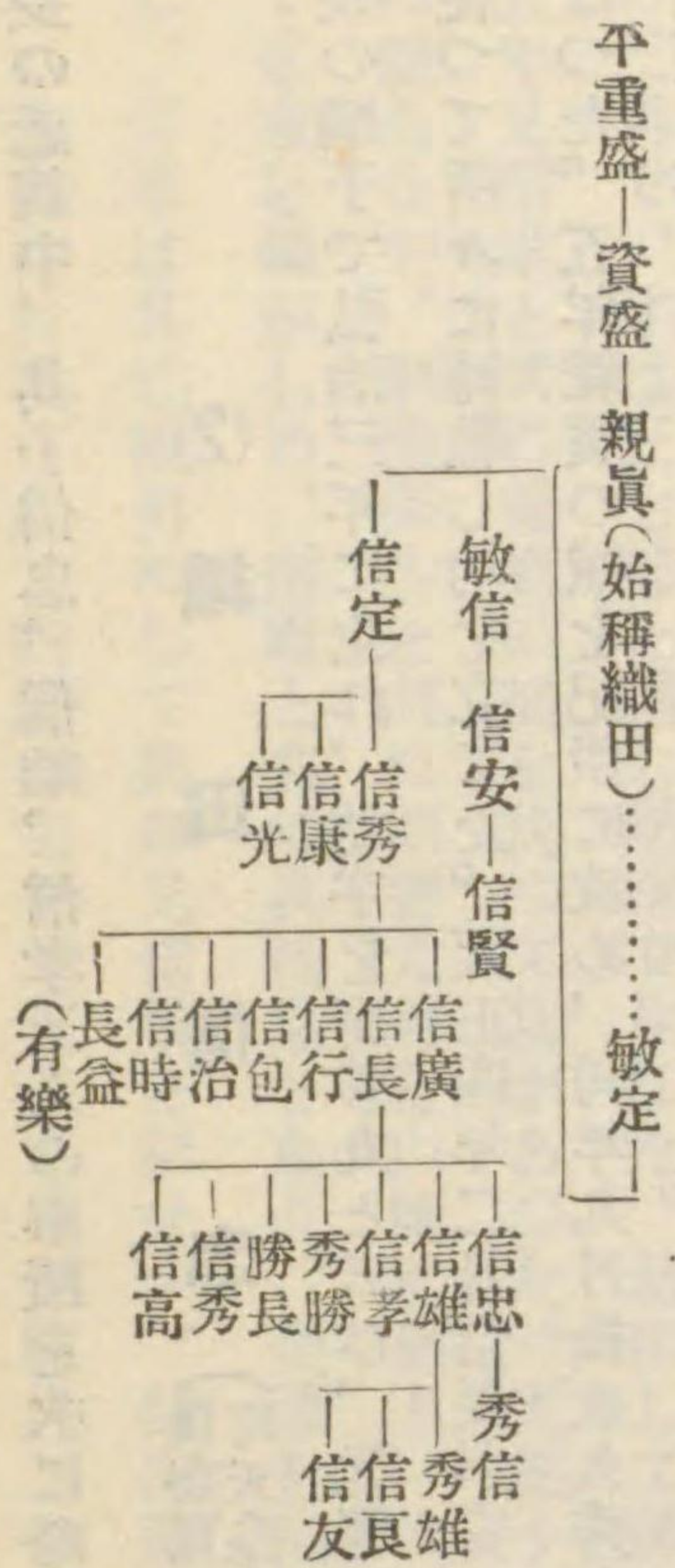
鳴海町字丹下に在つて、高陵の地である。永祿年中、信長が今川氏の鳴海城に備へるために設けた砦で、桶狭間役の時、水野忠光等が之を守つた。今は概ね耕地となつて居る。

ト、中島砦址 (同上)

鳴海町字下中町(舊字中島)に在つて、今は宅地又は耕地となつて居るが、永祿年中信長が此所に砦を築き、梶川一秀等をして守らしめたのである。

一四 織田信長の一族

(1) 織田氏の系譜



信長の近親中、其子信忠、信雄、信孝三人の事蹟を次に略説する。

(2) 織田信忠

(後奈良天皇の弘治三年(二二一七)―正親町天皇の天正十年(二二四二)六月二日)

信長の嫡子で弘治三年に生れ、幼字を奇妙丸と云ひ、元龜三年元服して勘九郎と改めた。其後父信長に従つて所々に轉戦し功を立てた。天正四年二月信長が安土城に移るに及び、信忠は岐阜城に住む事となつた。五年雜賀の賊を紀伊に攻め、同年九月松永久秀を大和に征して之を破つた。此年從三位左近衛權中將に進んだ。

天正十年徳川家康と共に、武田氏を甲斐に攻めて滅ぼした時には、信長大に喜んで信忠の偉勳とし、黄金劔馬を贈つて之を賞したと云ふ。同年五月父と共に京都に入り妙覺寺に宿したが、六月二日明智光秀の叛を聞き、馳せて本能寺に赴いたが既に及ばず、妙覺寺に引き返し更に二條の第に入り、從兵と共に明智勢と奮戦したが遂に自殺した。年二十六。朝廷よりは左大臣を贈られた。

(3) 織田信雄

(正親町天皇の永祿元年(二二一八)―明正天皇の寛永七年(二二九〇)四月薨)

信長の第二子、小字は茶筌丸、長じて信雄と改めた。初め伊勢の北畠氏の養嗣子となつたので、北畠信雄とも云ふのである。

天正十年本能寺の變後、清洲會議の結果、信忠の子三法師を織田家の嗣とし、弟信孝と共に之を輔け尾張、伊勢、伊賀の地百萬石を領して、清洲城に治する事となつた。信雄は弟信孝と年月を同じくし

て生れ、常に權を争つたが、遂に秀吉と共に信孝を岐阜に攻め、信孝をして内海(野間)に走つて自殺せしめた。

然るに其後、秀吉の威望盛なるを見て憚ばず、三家老の秀吉に通ずるを疑ひ、天正十二年之を殺して秀吉と絶ち、徳川家康の援を得て小牧、長久手の役を起し互に勝敗があつた。やがて秀吉と和し累進して、正二位内大臣に上る。

同十八年小田原征伐の時、秀吉の旨にさからひ出羽に配せられた。關ヶ原役には舊臣に推されて西軍に應じたが、罪を赦されて問はれなかつた。元和元年徳川家康の爲めに松山五萬石に封ぜられ、寛永七年七十三歳で薨じた。

(4) 織田信孝

(永祿元年(二二一八)―正親町天皇の天正十一年(二二四三)四月廿九日)

信長の三男で、字は三七郎と稱し熱田で生れた。幼にして神戸氏の嗣となり、伊勢の神戸城に居た。天正五年兄信雄と共に雜賀の徒を伐つて功があつた。天正十年阿波讃岐等四ヶ國に封ぜられたが、本能寺の變あるや、羽柴秀吉と共に明智光秀を山崎に破り、次で清洲會議の結果、信長の嫡孫三法師を立て、宗家を繼がしめ、信雄と共に其後見となり、美濃を領して岐阜城に居る事となつた。

然るに、信孝は其性剛勇にして異母兄信雄と和せず、柴田勝家と謀つて、信雄・秀吉を除かんとしたが、却て秀吉に攻められて内海に走り、天正十一年四月二十九日、辭世の歌

定した。叔父信盛罪を信長に得るや、盛政亦之を憚つて出仕せなかつた。やがて信長に赦されて勝家に仕へ、加賀の尾山城に封ぜられ、天正十年前田利家を助けて能登の亂徒を討滅した。同十一年四月、勝家、秀吉と開戦するに及び、其先鋒となつて、秀吉の部將中川清秀を大岩山の砦に襲つて之を殲したが、勝家の命に背きて戦機を誤り、秀吉の軍を賤ヶ岳に防いで大敗し遂に捕へられて斬られた。時に年三十歳。

二六 丹羽長秀と佐々成政

(1) 丹羽長秀

(西春日井郡金城村。天文五年(二一九六)―正親町天皇の天正十三年(二二四五)四月十六日)

其祖は武藏の兒玉黨にして、室町時代に尾張に移り、斯波氏に仕へた、長秀は長政の子で、天文五年春日井郡兒玉村(今の西春日井郡金城村)に生れた。幼名を萬千代丸と云ひ、後、五郎左衛門と改めた。天文十九年十五歳にして信長に仕へ、左右に近侍し、長ずるに及んで軍に従ひ、屢々戦功を立て、信長の兄信廣の女を以て妻とした。元龜二年近江佐和山五萬石を得て、柴田勝家と共に信長の股肱となる。其後、長篠役に参加して殊功を立て、安土築城を督して賞せられ、若狭十萬石を得て小濱城主となつた。

天正十年本能寺の變あるや秀吉と尼ヶ崎に會して、光秀を山崎に討滅し、秀吉、勝家等の諸將と清洲に會して、三法師を立て、主となし、賤ヶ岳の戦には秀吉に左袒して勝家を滅ぼし、若狭、近江、越前及び加賀の二郡の百萬石を領して北ノ莊に治する事となり、越前守に任ぜられたが、同十三年四月五十一歳で卒した。

長秀は性樸直にして、己れより後進なる秀吉に屬して之を助け、かくして織田家を擁護せんと欲したが、天下の大勢次第に秀吉に歸して如何ともする事能はず、且つ身に痼疾ありしを以て、居常快々たるものがあつた。遂に自ら腹を割き、病塊を剔出して程なく歿したと云はれて居る。

(2) 佐々成政

(西春日井郡山田村。後奈良天皇の天文五年(二一九六)正月―後陽成天皇の天正十六年(二二四八)五月十四日)

織田氏の世臣盛政の子で、天文五年正月、春日井郡比良(今の西春日井郡山田村)に生れ、初め内藏助と云ひ信長に仕へた。永祿五年齋藤氏の軍と戦つて以來、信長に従つて諸所に軍功があつた。又博學にして政務軍事に就て信長に献策した事が屢々あつたと云ふ。

天正元年には前田利家と共に信長の軍に従ひ、越前の朝倉義景を伐ち、三年長篠の役には銃卒を掌つて殊功を立て、同年越中半國十萬石に封ぜられたが、成政は更に同國を平定して、全く之を領する事となつた。

天正十二年には、織田信雄、徳川家康と結んで秀吉に對抗し、前田利家の軍を牽制したが、同年十二月、信雄、秀吉の和成るや、成政は信雄の共に圖るに足らざるを見て、積雪を冒して越中より濱松に至

り、家康に面して秀吉との再戦を説いたが用ひられず、轉じて信雄に勧めたが其效なく、志を得ずして空しく國に歸つた。

翌十三年秀吉自ら十萬の兵を率ゐて越中に來り、本營富山に迫るに及び、其勢に敵し難く、成政は遂に秀吉の軍門に降参した。秀吉は舊誼を思つて之を許し、同十五年九州征伐の後、成政を肥後に封じて隈本城に治せしめる事とした。然るに成政の政道當を失し、封内大に亂れるに及び、秀吉は黒田、毛利、小早川等の諸將をして之を平定し、成政の罪を責めて死を命じた。成政時に五十歳であつた。

二七 英雄豊太閤と北の政所

豊臣秀吉

(名古屋市西區中村公園。後奈良天皇の天文五年(二一九六)正月元日―後陽成天皇の慶長三年(二二五八)八月十八日)

(1) 生 立

豊臣秀吉は微賤から起つて遂に天下を一統し、位人臣の榮を極め、更に海外にまで武威を示した我が國史上の大英雄で、愛知郡中村(今の名古屋市西區中村公園)に生れた事は普く人の知る所。其素生には數説あるが、織田家の足輕木下彌右衛門の子で、父の死後、其母、秀吉を伴つて同輩筑阿彌に再嫁し、之に養はれたと云ふのが當を得て居る様である。生年月日に就ても異説があつて天文六年二月六日とあるのが稍々信ずるに足る様であるが、通説では天文五年一月一日となつて居る。而して、幼

名を日吉丸と云ひ、顔面が猿に似て居たので、小猿と稱せられたと云はれて居る。十五歳の時遠江に赴き、久能城主松下之綱の奴となり、信任せられたが、同輩に嫉まれ、尾張に歸つて織田信長に仕へ草履取となつて次第に用ひられ、小人頭に上り名を木下藤吉郎と改めた。

(2) 出 世

永祿九年、信長美濃の齋藤氏を攻むるや、秀吉自ら請ひて墨股の壘を守り、齋藤龍興の軍を撃退した。之が秀吉が一方の隊長となつた始めである。次で翌年稻葉城の攻略に殊勳を奏し、十一年信長西上の時には秀吉先鋒となつて六角氏と戦ひ、諸將と共に箕作城を陥れ、進んで京都に入り、やがて拔擢せられて都の守護を命ぜられた。

元龜元年、姉川の戦に功を立て、横山城を守つて淺井長政に當る事となつた。之が城主となつた始めて、程なく羽柴秀吉と改めた。

天正元年、淺井、朝倉兩氏滅ぶるや、秀吉の功大なりしを以て信長より淺井氏の舊領大部を與へられ近江長濱二十二萬石の城主となり、翌年筑前守に任官した。其後秀吉は長篠役(同三)、長島一揆、石山攻め、雜賀の一向一揆征伐(同五)等に従つて、到る所に殊功を立て、遂に中國征伐の主將となつた。秀吉は播磨に入つて姫路城を根據とし、それより進んで但馬、因幡を略し、天正十年五月備中の高松城を圍んだ。城爲に危急を告ぐるや、毛利氏の大軍來り援くるに及び、秀吉亦援を信長に請うたので

信長之を諾して京都に入り、不幸光秀の弑逆に遭ふに至つたのである。是に於て、秀吉は直に毛利氏と和し、軍を班して一擧、光秀を山崎に破つて亡主の恨を霽らし、信長の偉業を繼承する事となつた。

(3) 海内一統

山崎戦後、秀吉の威望益々盛となり、賤ヶ岳の戦に柴田勝家の軍を破つて、北ノ莊に自殺せしめ、瀧川一益を降し、織田信孝を自滅せしめ、天正十二年には織田信雄、徳川家康と小牧に戦ひ、其一部隊は長久手に敗れたが大勢には殆ど影響なく、程なく之と和して家康の子秀康を養子とした。

次で十三年紀州を征伐して雑賀、根來の一揆を平げ、四國を攻めて長曾我部元親の降を許し、自ら越中に進んで佐々成政を降し、又上杉景勝と和して北陸を定めた。更に十五年には大舉西征し、島津義久を降して九州を従へ、同十八年、二十五萬の大軍を發して小田原城を圍み、北條氏を滅ぼして關東を定めた。この前後に東北の伊達正宗、蝦夷の松前氏等も服屬したので、應仁以來百二十餘年間の争亂も茲に鎮まり、海内全く一統に歸し、天下悉く秀吉の節度を奉ずるに至つた。

(4) 勤王

この間に秀吉は官位累進して、従一位關白太政大臣となり、豊臣の姓さへ賜つた。秀吉は元來尊王敬神の念深く、先きには伊勢神宮の遷宮を行ひ、舊儀を再興する等したが、其精神の極めて具體的に實現せられたのは、聚樂第の行幸である。秀吉は國家の統一には必ず皇室を中心とすべきを信じ、幕府

政治を斥け、自ら朝臣の一人として天下の經營に當らんとしたと共に、天下萬民をして尊王の美風を起さしめんとした事は、最も感すべき所である。

天正十六年四月、聚樂第に後陽成天皇の行幸を仰ぎ奉つたが、其儀式は空前の盛觀であつて、此行幸を拜した人々は「今日此太平の世の有様を見るとは思ひがけなかつた」と云つて、嬉し涙を流したと云ふ程であつた。此時秀吉は、善美を盡して叡慮を慰め奉り、御料所を増し、公卿の領地を豊にし、且つ家康、信雄以下の諸大名に、子々孫々迄朝廷を尊ぶべきを誓はしめた。従て正親町、後陽成兩天皇の秀吉を信頼し給ふことの深かつたのは、他に比類稀な所であつた。

(5) 政治

秀吉は深く心を政治に用ひ、五奉行を任じて政務を分掌せしめ、其上に五大老(家康、利家、輝元等)を置いて大事を評議させた。

イ、檢地 天正年間から文祿にかけて、全國の檢地を行ひ、三十歩を一畝に、十畝を以て一段とし、上田、中田、下田に分ち、其平均收穫によつて石高を定め、田租を二公一民とした。之を天正の石直とも、文祿の檢地とも云ふのである。

ロ、貨幣の鑄造 大判金、小判金、天正通寶、文祿通寶等の金銀銅の三貨を盛に鑄造して、貨幣經濟時代の招來を促進した。

ハ、都市の保護—京都、大阪を始め、其他諸都市の發達に力を盡して、町の繁榮を計つたと共に、町人階級の利益を保護してやつた。

ニ、佛敎の保護—叡山、高野山の再興を助け、本願寺顯如を優遇し、自ら京都に方廣寺を建て、大佛を安置した。

(6) 外 征

秀吉は東亞統一の大抱負を懷き、印度、フィリッピン、臺灣等にも入貢を促したが、朝鮮王李昭が、明國征伐の嚮導を承諾せぬのを怒り、先づ朝鮮を征して明に及ぼさんと決心し、文祿元年、十數萬の大軍を朝鮮半島に進撃せしめた。即ち文祿、慶長兩度の役の顛末に就ては、こゝに記述することを省くが、要するに、我が諸將の不和不一致、水軍の不振、外交上の失策、秀吉の薨去等の理由によつて目的を達する事が出来なかつた。併し、我が國威を海外に輝かし、後世の國民に進取の氣象を鼓舞して海外發展の思想を起させた精神的効果は大なるものかあつた。

(7) 薨 去

かくて外征未だ終らざるに、秀吉は伏見城中に病んで、慶長三年八月十八日遂に薨去した。齡時に六十三。

次で東山阿彌陀峯に葬り、詔して正一位を贈られ、豊國大明神の號を賜つた。彼を祀つた京都の豊國

神社は豊臣氏の滅後、徳川氏の壓迫甚しく、一時は非常に頽廢したが、明治の御代に至つて再興せられ、今は別格官幣社として其偉業を永久に敬慕せられつゝある。

秀吉の辭世

露と落ち露と消えぬるわが身かな

なにはのことは夢のまた夢

(8) 秀吉の誕生地

中村公園内の豊國神社の東にある竹藪(俗に狐藪と云ふ)が秀吉の誕生地であるとして、其前に「豊公誕生地」の石標が建てられて居る。之は明治十六年に、同地の有志者等が豊公の祠を建てんとする企圖を賛して、時の縣令國貞氏が自ら地を検して建てたもので、同十八年には其西傍に豊國神社の祠を建立したのである。

然るに其東北一町餘の所に太閤山常泉寺があるが、境内には秀吉手植の枸骨樹ヒヒラギの老木があり、傍には豊公産湯井と云ふのがあつて、近年秀吉の銅像も建てられて居る。塵點錄に、太閤の屋敷八畝歩とあるのに對して、兩地の距離稍々過大に失することゝなる。其何れが正確なるかは今も未決定のまゝであるが、常泉寺は秀吉の薨後餘り遠からざる慶長年間に、僧日涌が秀吉の宅址に創建したものであるとすれば、其地が比較的正確ではなからうかと思はれる。

愛知縣では史蹟顯彰のために、明治三十四年其附近を中村公園としたが、大正十年名古屋市有公園となつた。公園内には小出秀政、木下勝俊(長嘯子)の宅址があつて、何れも石標が建つて居る。

題豊太閤舊栖

物茂卿

絶海樓船震大明一。

豈恩此地長柴荆一。

前山風雨時々悪。

見作當年叱咤聲一。

(9) 北の政所

(海部郡津島町。後水尾天皇の寛永元年(二二八四)九月十六日歿)

豊臣秀吉の夫人で、幼名をおね、と云ひ、織田信長の足輕を勤めて居た杉原氏の娘で、今の海部郡津島町の生れだと云ふ。信長の御弓大將淺野又右衛門長勝の養女となつたが、おねは自ら進んで當時足輕であつた小竹(後の秀吉)の妻となつた。小竹は極めて貧しかつたので、竹の簀子の上に藁席を敷いて、其上で祝言を濟ましたと云ふ事である。

かゝる貧しい境遇にあつて、おねは夫小竹によく仕へた。彼女は才智がすぐれた上に柔和な性質であつたから、夫が藤吉郎となり、秀吉となり、關白と立身出世する迄、常に内助を怠らなかつた。かくて北の政所と呼ばれる身となつても、昔の貧しかつた時を忘れないで、秀吉にも屢々其事を注意した程であつた。

秀吉が天下の權を握つた後も、夫婦間の情が極めて濃まやかであつた事は、秀吉が度々送つた手紙によつても知ることが出来る。秀吉は晩年淀君を愛したが、政所の權威を尊重し、妻妾の區別を明かにした。

秀吉の薨去後は、剃髮して高台院湖月尼と稱し、京都に高臺寺を建て、豊公の冥福を祈り、寛永元年七十六歳で逝去した。

二二八 小牧城址と小牧合戦

(1) 小牧山 (東春日井郡小牧町大字小牧)

小牧山は小牧町大字小牧の西端に位し、平野の中に停立する山で、海拔二百八十二尺、山脚東西三百八間、南北二百四十八間ある。太古は此山の西麓附近まで入海であつて、舟人は遠くから之を目標として帆を卷いたから帆卷山と呼ばれたと云ひ傳へられて居る。又中古の世には此地に馬市を開いたので、駒來山、曳馬山、引馬山等と稱したことがある。

當山は尾張平野中に峙立せる小山であるから四方の眺望が極めて麗しく、山頂に立てば南方遠く名古屋城の金鱗を望み、北方は犬山の白帝城は勿論、各務原の上空に飛行機の飛翔するのを見ることが出来る、西方遙に伊吹、養老、多度の諸山脈が蜿蜒として起伏し、東は濃尾國境の諸山より惠那、御嶽を始め飛信の連山を展望する事が出来る。又、近くの諸村は脚下に散在して指點し得べく、東麓には小

牧の街を俯瞰して風趣情景の豊かなるを感じしめる。

(2) 小牧城址の沿革

織田信長は桶狭間戦役後、美濃の攻略に着手し、永祿六年地利に富む小牧山に築城して清洲から引き移つたのである。即ち山頂を本丸とし全山を五段に分ちて濠壘を築き、南方に大手道を、北方に搦手道を開いた。尙ほ山中の各所に車井戸を穿ち、要所に重臣の邸宅を設け、山麓には三重の湍を掘り、西南部には外郭の長濠を穿ち、其處に清洲の城下町を移したのである。

同年八月信長は此處より兵を出して木曾川を渡り猿啄の城を攻めて抜き勝山と改めた。かくて其勢力が漸次北方に進展するに及び、翌年信長は稲葉城に齋藤龍興を攻めて陥れ、之を岐阜と改めて移り住む事としたので、小牧山は自然廢城となつた。

天正十二年所謂小牧合戦が起つた際には徳川家康が織田信雄を援けて此山に據り、兵備を嚴にして根據地としたのは周知の事である。小牧戦後城砦を毀ちて全く廢城となり、やがて城下町も今の小牧町の地に移された。爾來尾張藩領となつたが、徳川氏の創業に關係深き土地であるから、一般人の入山を禁じて保存した。然るに維新後藩籍奉還の結果、一旦官有地となつたが明治五年民間に拂ひ下げられた。而も翌年政府は復之を買収して公開し、小牧公園となさしめた。かくて明治廿二年、政府は第三師團の北練兵場の地と此地とを交換し、當山は尾張徳川家の有となつた。

昭和二年十月廿六日内務省の告示に依り史蹟として指定せられ、同年十一月陸軍大演習が此地方に行はれて今上陛下親しく御登山あらせられた。同日より徳川侯爵家は此地を公開する事にしたが、昭和五年に至り全く小牧町に寄附したのである。

はたすゝきなびきあひつゝ小牧山昔のあとをみする秋哉

東久世通禧

(3) 小牧合戦 (天正十二年三月—同年十一月)

山崎の一戦に亡君信長の仇を報じた羽柴秀吉は、清洲會議の結果、信長の嫡孫たる三法師丸を世繼と定め、叔父北畠(織田)信雄、神戸(織田)信孝を後見役として自ら其實權を握つた。次で柳ヶ瀬、賤ヶ岳の役に於て柴田勝家を斃し、信孝を自滅せしめたが、尙ほ信雄の存在は秀吉の大志を展ぶるに害ありとし、之を除くために種々の離間策を講じて信雄の怒りを挑發した。信雄は遂に其術中に陥りて秀吉と對敵行動を開始する事となり。援を徳川家康に求めたのである。

家康は信長の死後中立の態度を採り、鋭意兵備を整へて居たが、山崎、賤ヶ岳戦後、秀吉の威望隆々として高く、若し信雄との争を坐視する時は、信雄の力微弱にして討滅せられる事は明かだ、而も其結果は唇亡齒寒の境遇に陥ること必然と考へ、遂に信雄を援ける決心をしたのである。従て此役は、秀吉對信雄の争が主である様であるが、實は秀吉對家康の戦に外ならないのである。

而して本戦役の勢力を比較すると、秀吉は加賀、越前、能登、美濃、近江、大和、山城、河内、和泉、

攝津、丹波、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、其他を合せて六百二十八萬石を領し、兵數約十六萬人（本戦役に参加せるものは約八萬人）に對し、家康は三河、遠江、駿河、甲斐、信濃地方を、信雄は尾張、伊賀、伊勢の大部を領して合計二百四十五萬石、兵數約六萬人（本戦役に参加せるもの三萬人）であつた。

次に西軍秀吉の計畫は、近江、大和方面の軍をして伊勢方面より敵を脅威せしめ、美濃の池田勢をして尾張平野に向つて地歩を領有せしめ、主力を大阪附近に集中し、機を見て尾張に侵入せんとしたのであるが、東軍家康は紀伊の畠山、四國の長曾我部勢等をして大阪を脅威せしめ、伊勢、伊賀の軍をして側背を掩護させ、主力を尾張の清洲附近に集結して敵の尾張平野侵入を待ち、之を撃破せんとしたのであつた。

本戦役起るや、大垣城主池田勝入信輝は秀吉に屬するを利なりとし、其子紀伊守之助と共に兵八千を率ゐて木曾川を渡り、天正十二年三月十四日犬山城を陥れ、翌日小口、樂田、小牧の諸村に放火して兵威を揚げた。

一方、家康は十三日清洲に入りて信雄に會し、十六日酒井忠次に命じて尾北の敵狀を偵察せしめた。忠次歸つて小牧山の要害なるを告げたので、家康は更に忠次に命じて、此時羽黒村に陣せし美濃兼山城主森武藏守長可（信輝の女婿）を撃たしめた。十七日拂曉、忠次肉迫して森軍を突き、大須賀康高、榊原康政等の來援を得て遂に撃退した。之を羽黒八幡林の戦と云ふ。

茲に於て家康は全軍を率ゐて小牧山に入り、廢墟を修して壘濠を築き、附近に防禦工事を施して根據地と定めた。

秀吉は大阪に於て羽黒の敗報を聞き、自ら出馬することに決し、前田利家を加賀に留めて佐々成政に備へ、備前、美作、因幡の兵をして毛利氏に對せしめ、天正十二年三月廿一日大阪を出發し、途中諸兵を合せて同月廿六日、犬山城に入り池田信輝と合した。翌日秀吉は諸將を率ゐて二宮山に登り、東軍の陣形を望見して對抗策を計劃し、犬山に歸つて後各所に築砦を命じ、樂田村の古城址を修めて根據地とし、併せて諸將の部署を定めたのである。

かくて兩軍の戦鬪準備が全く出來て、今にも驚天動地の激戦が行はれるかと思はれたが、兩軍自重して容易に動かず、戦機の熟するを待つて相對峙した。然るに此平靜なる局面に一波瀾を捲き起すべき事件が生じた。夫は西軍が支隊を三河に出して岡崎城の空虛を突かんとした事である。

三河討入を秀吉に献策したのは池田勝入信輝であつた。秀吉は容易に許さなかつたが、連りに其利を説いて望んだので四月五日遂に之を許した。信輝は約二萬の軍を率ゐ、森長可と共に先鋒となり、軍監堀秀政、旗本羽柴秀次等と共に、六日夜半出發、三河の西部に向つて前進したが、東軍のために却て長久手に破られて信輝、長可等は戦死し、西軍の死する者二千五百餘人に及んだ。秀吉は此敗報を得て大に驚き、自ら兵二萬餘を率ゐて急に南進し東軍を屠つて家康に報ぜんとしたが、東軍夜に乗じて小牧山の本營に引き揚げたので、決戦の機を得る事が出來なかつた。（長久手古戦場の記事参照）

これより兩軍復相對峙して戦はず、此形勢は十一月迄繼續したが、兩軍の將士漸く征戦に倦み、先づ秀吉對信雄の和議成り、次で家康、秀吉兩雄間の和も成立して、各々諸砦を毀ちて兵を引揚げ、尾北の野を蔽つた戦雲は全く霽れるに至つたのである。

二九 長久手古戦場と關係史蹟

(1) 長久手古戦場 (愛知郡長久手村)

古戦場は長久手村大字長湫の東方、丘陵が起伏し、老樹散点する一帯の地方が夫れである。

天正十二年四月、羽柴秀吉の西軍と徳川家康、織田信雄聯合の東軍とが、小牧山に對陣した際、秀吉の部將池田信輝等が岡崎の虚を衝かんとして却て家康の爲めに大敗した處である。最も激戦のあつた首狭間と稱する地には、信輝及び其子紀伊守之助、並に森長可の碑が建てられて居る。

(2) 長久手合戦 (天正十二年四月九日)

小牧合戦の項に於て記した如く、秀吉の將池田勝入信輝は二萬の軍を率ゐて其女婿森長可と共に先鋒となり、羽柴秀次、堀秀政等と共に天正十二年四月六日の夜半潜かに樂田を出發、岡崎方面に向つて前進した。即ち樂田の東方二宮村から大草村を経て關田村に出で、七日午前十時頃篠木、柏井地方に至り、砦を上條村に築いて此附近に宿營、二日間滞在した。之は當支隊將來の據点とする爲めに築城を

實施したものであつたが、秘密、迅速を要する別動隊の性質から考へると至極當を得ざる行動で、長久手敗戦の原因は此時に端を發して居るのでなからうかと云はれて居る。

斯くて信輝は、八日午後十時頃から全軍を三縦隊に分けて前進を開始、左縦隊は大留村より、中央縦隊は野田村より、右縦隊は松河戸村より進んで庄内川を渡り、左、中央の兩隊は志段味村から諏訪ヶ原を経て、九日未明長久手、藤島村方面に前進した。

然るに篠木村の住民は小牧に来て西軍支隊の動靜を告げたので、家康は諸隊に出陣の用意を命じ、間諜及び斥候を放つて敵の目的計劃を確めた上、之を追躡して中途に撃破せんと決心し、一部を小牧に残し、水野忠重等に四千餘の兵を授けて前進せしめ、自らの兵六千三百と信雄の兵三千とを率ゐて之に續行すべく部署を定めた。

忠重の先遣支隊は八日午後七時頃小牧を發し、上條村附近の敵營の右側を潜行して、午後十時頃小幡城に入つた。家康は井伊直政に三千の兵を與へて前衛とし、勝川に小憩の上、同夜半十二時頃小幡城に這入つた。家康は忠重の報告に依り敵の行進路を察し、兵を前後に分けて各個に敵を撃破するに決し、午前二時頃先遣部隊、本隊の順序に小幡城を發し密に敵の背後及び兩側に迫つた。

秀吉方の西軍支隊の前衛は九日早曉岩崎村に達し、岩崎城を攻めて之を陥れ、他の諸隊は何等警戒する所なく、信輝、長可等の軍は牛ヶ原に、堀秀政の兵は金萩原に、羽柴秀次は白山林に陣して居た。九日天明の頃家康の先鋒大須賀康高、丹羽氏次、榊原康政等の諸隊一齊に白山林の羽柴秀次の陣を攻

撃するや西軍敗れて長久手岩作方面に遁れ、援を堀秀政に乞ふに至つた。秀政は檜ヶ根に東軍を迎へ撃つて敗走せしめたが、やがて家康の馬標金扇の富士ヶ根に掲がるを見て、諸兵を集め北進退却した。之を長久手朝合戦と云ふ。

西軍の池田、森の隊は後隊の敗戦を知り、兵を收めて長久手に引き還し、長可は陣を岐阜嶽に、信輝は佛ヶ根の東南高地に兵を駐め、更に陣を固くして東軍に備へた。午前十時頃家康は自ら馬を進め諸軍に令して一齊に進撃せしめ、兩軍激しく戦つたが、西軍漸く苦戦に陥り、森長可銃丸に中つて戦死し信輝亦力戦苦闘其子之助と共に遂に討死して西軍悉く敗れ、四方に潰走した。時に午後一時頃で、之を長久手晝合戦と云ふのである。樂田の本營に在つた秀吉は同日正午頃我が支隊の敗報に接して大に驚き、直に出動準備を命じ、自ら兵二萬を率ゐて赴援の途に上つた。樂田櫻佐村を経て庄内川の右岸に沿つて下津尾村より龍泉寺山に向つて急行した。

長久手に大勝した家康は、秀吉が必ず來援すべきを察して、深く敵を追撃せず、轉進の命を發し白山林の南方を経て午後四時頃小幡城に歸還した。秀吉は午後五時龍泉寺山に上り、先づ堀尾吉晴の一隊を長久手方面に派遣した。吉晴は小幡ヶ原を横ぎつて印場村に到り、方に撤退しつゝあつた東軍の後尾を攻撃して其二百餘人を斃したが、家康の主力軍は既に小幡に入城した事を認めて軍を班した。そこで秀吉は明朝を期して小幡城を屠り、信輝父子、森長可等の怨を晴すべく龍泉寺附近一帯に駐屯した。

小幡城に於ては、本多忠勝、水野忠重等が秀吉の營を夜襲せんことを建築したが、家康は勝に誇るは良將の爲さざる所であると云つて許さず、同夜八時頃主力を率ゐて小牧山に歸つた。

秀吉は明朝攻撃の準備として斥候を派遣したが、家康が既に小幡を去つたとの報告を得、夜半上條の砦に退き、十日樂田に還り、再び小牧附近の對陣となつたのであるが、同年十一月和議の成立した次第は「小牧合戦」の項に記述した如くである。

(3) 關係史蹟

イ、小幡城址 東春日井郡守山町大字小幡字西城にあつて、大永二年の築城に係ることは諸説一致すれども、其築城者に就ては岡田與七郎重篤となし、或は岡田與九郎重頼(重篤の子)となす兩説があつて容易に是非を決する事が出来ぬ。天文四年松平清康が尾張を侵略した時には、此城及び守山城に據つたが、清康が弑せられた後は織田信秀の弟信光の所屬となつた。弘治元年信光が又家人に殺されてからは織田信次、津田信成、同正信等相繼いで居住したが、正信去つて後は一時廢城となつた。天正十二年四月、小牧の役には徳川家康は此城を修理して、本多廣孝、其子康重、及び新見正勝等を置き三河の連砦となし、交通を掩護せしめた。やがて長久手の戦起るや、家康は小牧を發して此城に入城し、追撃根據地としたが、忽ち大勝を得て再び此處に引き揚げた。此時豊臣秀吉は、長久手の敗報を得て憤り、龍泉寺に來つて家康と相對し、小幡を攻めて決戦せんとしたが、家康は急に小牧の本據に

歸つて開戦するに至らなかつた。程なく兩雄和するに及んで、其後は廢城となつたのである。尾州古城志に依れば、東西百十間、南北六十間、東西南に二重堀、北は切岸なりとあるが、現今は本丸の西及び北の土壘は松林となり、其他は田畑と藪とになつて居る。本丸の中心と稱する約四坪程の面積には竹笹が繁つて、大體に於て、比較的よく當時の規模を存して居る。

ロ、**岩崎城址** 日進村大字岩崎字市場(舊字城山)にあつて、東西四十四間、南北三十二間と稱するが今は耕地又は宅地となり、其内外の空濠、古井等が残存して居る。城は天文七年丹羽氏興の子氏清が築いたもので、長久手戦の時には丹羽氏次の弟氏重、姉婿加藤忠景等が三百餘騎を以て之を守つたが、池田、森兩將の大軍に攻められ、衆寡敵せずして城陥り、氏重、忠清等悉く戦死した。

ハ、**首狭間** 長久手から岩崎街道を南下すること十五町程の所にある。長久手役の最激戦地で、西軍の將池田勝入父子、森長可等が戦死した地である。此處に勝入及び其子紀伊守之助、又森長可の碑が各一基宛建てられて居る。

ニ、**首塚** 長久手村安昌寺の前、道路に沿つてある。長久手戦後、敵味方の死屍累々として光景慘憺を極めたが、安昌寺の雲山和尚は之を見て惻愷の情に絶えず、里人と共に首級を葬り供養したと云ふ首塚碑が建てゝある。

ホ、**其他** 附近には色金山(家康の指揮した所)、御旗山(一名富士ヶ根とも云つて家康の牙旗を樹てた所)、長久手城址(加藤忠景の居城)等の史蹟がある。

(附) **森長可の事蹟** (天正十二年(二二四四)四月九日歿)

森氏は清和源氏の血統で、義家の六男義隆は相模國森庄に住して森冠者と稱した。それより十八世の孫、三左衛門尉可成の時、美濃に來つて可兒郡金山城に居り、齋藤道三に従つたが、後信長に仕へた長可(一説に長一と云ふ)は其第二子で、蘭丸の兄である。小字は勝藏、後に武藏守と云ふ。長可は資性勇悍、元龜三年信長に従つて長島を攻めて以來、毎に軍に従ひ武功顯著なるものがあつた。時人は其武勇を稱して夜又武藏或は鬼武藏と呼ぶに至つた。天正十年織田信忠に従つて甲斐の武田氏を攻滅し功に依り信濃に於て十萬石を領するに及んだ。

本能寺變後、一旦封を失つたが、同十一年秀吉より美濃金山の城邑十萬石に封ぜられた。小牧の役起るや、秀吉に従ひ、池田信輝等と共に家康の軍と長久手に戦ひ、流丸の中つて陣歿した。時に年未だ二十七歳。

三〇 **池田信輝と同輝政**

(1) **池田信輝** (愛知郡荒子町。天文五年(二一九六)正親町天皇の天正十二年(二二四四)四月九日歿)

池田氏は源頼光第四代の孫、兵庫頭仲政より出て居る。仲政の四男右馬允泰政始めて姓を池田と稱した。其後裔紀伊守恒利の時、攝津より來つて愛知郡荒子に住するに至つた。信輝は天文五年恒利の子

として荒子に生れた。母は織田信長の乳母である。初め名を勝三郎恒興と稱した。信秀の時より織田氏に仕へ、やがて戦功により主君の諱を得て信輝と改めた。弘治三年、信長が弟信行の反志を疑ひ之を謀つた際に、信輝は逃ぐる信行を追撃して捕殺した。元龜元年姉川の戦に軍功を樹て犬山一萬石の城主となつたが天正七年更に攝津に移封せられた。

天正十年本能寺の變あるや、秀吉と協力して光秀を山崎に破り、清洲會議の結果、攝津に於て十二萬石を得、秀吉、勝家、長秀等と共に京都の庶政に當る事となつた。又薙髮して勝入と號した。翌天正十一年秀吉より大垣城主に封ぜられた。小牧の役起りし際には、秀吉に屬し尾張に軍を進めて樂田に陣した。天正十二年四月、森長可、堀秀政等と間道より岡崎の虛を突かんとして發したが、家康、信雄の主力軍に追撃せられ、長久手に激戦して永井直勝と組んで刺殺せられた。年四十九。此時、其子之助も安藤直次の爲めに討たれて戦死した。

(2) 同 輝 政

(西春日井郡清洲町。正親町天皇の永祿七年(二二二)―後水尾天皇の慶長十八年(二二七三)正月)

勝入信輝の二男で、西春日井郡清洲町に生れた。天正八年父に従つて華隈城を攻め、敵首を得たので信長より感狀並に乘馬を與へられた。其後織田信忠に従つて甲斐を攻め功があつた。本能寺の變あるや、急ぎ歸つて葬儀に列し、織田秀勝と共に棺を昇いだ。長久手の役に父兄共に戦死して部下敗走するや、家臣の諫止を拒けて單騎敵に迫り、死を決して奮戦した。以來秀吉に屬して各地に轉戦、九州

小田原、會津征伐等に勇名を馳せた。天正十八年封を吉田に受けて、十五萬二千石を領した。文祿三年秀吉の命に依り徳川家康の第二女を室にし、慶長五年家康に従つて、小山に到つたが、石田三成等擧兵の報來るや、輝政は福島正則と共に先鋒となつて西上し、岐阜城を攻めて陥れた。關ヶ原合戦には南宮山の西軍に備へ、戦後功に依りて播磨五十二萬石を得た。同八年更に備前三十一萬五千石を加増せられて、第二子忠繼の邑とした。官位は右近衛權少將より參議に進み、從三位に叙せられ、慶長十八年五十歳で歿した。

輝政は軀幹短小であつたが、性沈毅寡欲で、才略があつた。自ら奉ずる事極めて儉素で、奢侈を卻けた。卒するに及んで上下から惜まれたと云ふことである。

三一 前田利家と荒子城址

(1) 前 田 利 家

(名古屋市南區荒子町。天文七年(二二九八)―後陽成天皇の慶長四年(二二五九)閏三月三日)

利家は利昌の第四子で、天文七年愛知郡荒子村(今の名古屋市南區荒子町)に生れ、幼名を犬千代、長じて孫四郎と改め、更に又左衛門と改稱した。幼より信長に仕へ、十四歳の時より鎧を著し、漸次武名を知られるに至つた。永祿二年小過あつて信長の勘氣を蒙り、一時亡命したが、私に軍に従ひ、數度の戦功を樹て復仕を許された。爾來諸所に轉戦して功を累ね、同十一年兄利久に代つて家を繼いだ。

元龜元年信長が本願寺光佐を攻めた時、力戦して殊功を樹て長濱一萬石に封ぜられ、更に天正三年朝倉氏の滅後には越前府中三萬二千石に移封せられた。

信長の死後、柴田勝家が豊臣秀吉と隙を生ずるや、利家は勝家に屬して近江に出軍したが、賤ヶ岳敗戦の結果、府中に退却した。然るに秀吉は之を許して、加賀の石川、河北の二郡を與へた。茲に於て、利家は尾山城に移り、世子を松任に居らしめた。尾山は即ち後の金澤である。

天正十二年、小牧の役に、越中の佐々成政が織田信雄に與して、大軍を出して末森城(加賀)を圍むや、利家は之を討つて大に破つた。翌年秀吉親ら越中を討ちて佐々成政を降すに及び、越中の三郡を利家に授け、其姓羽柴を與へ、從五位下筑前守に任官した。其後、秀吉の九州征伐、小田原征伐等に從つて功を積み、更に奥州檢地總督を命ぜられ、文祿の役には秀吉に從つて肥前の名護屋に赴きて帷幄に參し、選ばれて五大老の一人となり、累進して從二位權大納言となつた。

慶長三年秀吉薨するや、遺命によりて利家は大阪城に居りて秀頼を輔け、暗に家康の野心を抑へたが、四年三月、孤主の將來を痛心しつゝ病んで薨じた。時に年六十二。詔して從一位を贈られた。今の金澤市にある別格官幣社尾山神社は利家を祀つたものである。

(2) 荒子城址

愛知郡荒子村(名古屋市南區荒子町)大字大和ヶ池(舊字古城)にある。今は其邊一帶宅地又は水陸田とな

つて、境域が詳でないが、此地の西を流れる小流は古へ城濠の址と云ひ、之に架する一小橋を今も古城橋と云ふ。南邊の杜にある小社は舊城内の鎮守であつたと傳へられて居る。始め前田藏人利昌が此に城き、子利久、其弟利家、利家の子利長も相繼いで居住したが、天正三年利家は越前北の莊に移り同九年利長も越前府中に移つたので遂に廢城となつたのである。

三二 加藤清正と其誕生地

(1) 加藤清正

(名古屋市西區中村町。永祿五年(一二二二)六月廿四日—後陽成天皇の慶長十六年(一二七一)六月廿四日)

永祿五年六月廿四日、愛知郡中村(今の名古屋市西區中村公園附近)に生れた。小字は夜叉若、後に虎之助と改めた。其宅址は今も中村町の妙行寺内にある。三歳の時、父清忠を喪ひ、母に育てられたが、其母は豊臣秀吉の母と從父姉妹であつたから、當時長濱五萬石の城主たる秀吉に依る事となつた。

十五歳の時元服、食祿百七十石を得た。天正九年以來、鳥取城(因幡)、冠城(備中)、山崎(攝津)、龜山(丹波)等の諸戰に從つて、殊功を奏した。天正十一年賤ヶ岳の役には、所謂七本槍の隨一として拔群の武功を樹て、同十三年に從五位下主計頭に任ぜられ、更に十五年九州征伐の時、宇佐城を守りて戦功を累ね、翌年肥後守となり、肥後半ヶ國二十五萬石を領して熊本に治するに至つた。

朝鮮征伐の文祿の役には、小西行長と共に先鋒の將となりて半島に出征、驍勇無比、向ふ所殆ど敵な

く、遠く北韓に進んで二王子を擒にし、鬼上官として明、鮮人を戦慄せしめた。而も清正は豫てより小西行長、石田三成等と仲悪しく、爲めに行長、三成の嫉む所となり、其讒陥によりて秀吉の激怒を招き、慶長元年召還せられて、伏見城に到つたが、秀吉に見ゆる事が出来なかつた。偶々、此年七月大地震起り、伏見城も壞れて内外の壓死者數百人に達した。清正は譴を蒙りながらも、衆に先んじ、直に馳せて秀吉を守護したので、秀吉も其誠忠に感じて、舊の如く殊遇する様になつた。

慶長の役には、再び先鋒となつて朝鮮に渡り、攻城野戦に武名を轟かしたが、淺野幸長の急を救はんとして蔚山城に入り、敵の大軍に圍まれ、糧食盡きて一時非常に窮地に陥つたが、毫も屈せず、遂に敵軍を破つて圍を脱した。之が名高き蔚山籠城で、益々清正の武名を高からしめた。

慶長三年秀吉薨するに及び、諸將と共に軍を撤して國に還つた。慶長五年關ヶ原の役起るや清正は固より三成、行長等と善くなかつたので徳川家康のために西海諸國の軍に備へ、功を以て肥後全國五十萬五千石に封ぜられ、從五位上、侍從となりて肥後守を兼ね、熊本城を築いて之を鎮した。

慶長十五年、名古屋築城の際は、清正は肥後より來つて萬松寺に宿し、工事を督した。天守閣を起して金鯨城を完成し、永く尾張名古屋の誇りたらしめた功は大である。

同十六年、豊臣秀頼が京都に到つて、家康と二條城に會見した時には、清正は幸長と共に、決死の覺悟を以て之に陪從し、孤君の身を全うして太閤の恩に報いた。尋で國に歸り、熱病を以て俄に卒した。年五十。遺言により甲冑帶劔のまゝ中尾山に葬つた。

清正は平生論語を愛讀して、自ら持すること儉素で、領内に令して奢侈を禁じ、學問を奨め、忠孝を勵ました。秀吉の薨後、前田利家の人物を稱して、「以て六尺の孤を託すべく大節に臨んで奪ふべからざるは、其れ此の人の謂なるか」と人に語つたと傳へられて居る。又、江戸往來の途次、其生地中村を過ぎる時には、懇ろに老幼に接し、其都度金品を與へたので、里人は感泣したと云ふことである。殊に熱田神宮の鎮皇門を修めて、敬神の美德を發揮した等によりても、清正の人物の一端を知るに足るのである。明治四十一年に至り從三位を贈られた。

(2) 清正の誕生地

名古屋市西區中村町妙行寺の境内にあつて、文化七年建設した「加藤肥後侯舊里碑」がある。

妙行寺は、元現今の位置より約二町東方にあつたが、慶長十五年に加藤清正が名古屋築城の際、祖先の菩提のために、其餘材及び普請小屋を以て、自らの誕生地に妙行寺を移築したと云ふ。同十六年清正が歿するに及び、肥後の本妙寺から日遙上人自刻の清正の木像を送つて來たので、新に清正堂を建て、安置したのである。此寺内が清正の誕生地たる事は異説がない様である。

三三 福島正則と其誕生地

(1) 福島正則

(海部郡美和村大字二ツ寺。正親町天皇の永祿十年(二二二二)後水尾天皇の寛永元年(二二八四)七月)

永祿十年今の海部郡美和村に生れた桶工の子であると云はれてゐる。幼名を市松と云ひ、少年時代から膽勇があつたが、十二歳の時父の辨當や桶屋道具を持つて、甚目寺に往復の途次、争つて人を殺したので故郷を出奔し、諸方流轉の後、姫路に至つて豊臣秀吉に仕へたが、時に天正六年、十八歳であつた。同年戦功を樹て、祿百石を賞與せられて以來、屢々功を奏して祿千石を得、驛卒の長となつた。天正十年山崎の戦にも勇戦したが、同十一年賤ヶ岳の戦には七本槍の一人として武名を轟かし、殊勳に依つて五千石を受け、從五位下、左衛門尉に任ぜられ、左衛門大夫と稱するに至つた。同十三年には伊豫の今治城主となりて十萬石を領し、文祿の役には朝鮮に渡つて益々勇名を馳せ、やがて清洲二十四萬石を得、從四位下侍從に任ぜられた。秀吉の薨後には徳川家康と婚を結んで之に屬し、關ヶ原の戦には先鋒となつて岐阜城を陥れ、進んで宇喜多秀家の軍を破つた。戦後、安藝、備後四十九萬八千二百石に封ぜられ廣島城に移つた。大阪陣の時にも江戸に在つて家康に味方した。元和三年參議となり從三位に昇進したが、同五年廣島城普請の事によつて封を奪はれ、津輕に配せられる事となつた。やがて越後魚沼郡に於て二萬五千石を授けられ。更に信濃の川中島に移つて四萬五千石を與へられたが、寛永元年六十四歳で卒した。死後其采邑を沒收せられて遂に斷絶した。正則は頗る正直律義の性質で、親族故舊に厚く、寧ろ普通の人よりは、血あり涙ある人であつた。又土木の才があつて、名古屋築城の際、石材運搬の便のために堀川を開いた。今も熱田の大夫堀と云ふのは、正則が左衛門大夫と稱したからである。

(2) 正則の誕生地

(海部郡美和村大字二ツ寺)

海部郡美和村大字二ツ寺に在つて、古來福島屋敷と稱する所である。村社高之宮神明社は正則誕生地の鎮守で、彼が清洲城主であつた時より屢々修理營繕したと云ふ。されば、其祭典に馬の塔を出す時には、必ず屋敷跡へ曳き來つて敬意を表する例であつた。尙ほ村内の菊水院と稱する古寺は、正則の菩提所で、彼の位牌と其護持佛毘沙門天、及び正則の畫像とを藏して居る。今は正則の屋敷跡の東北隅に「福島正則生誕地」の標柱が縣から建てられて居る。

三四 淺野長政と同幸長

(1) 淺野長政

(丹羽郡西成村。天文十六年(二二〇七)一
後陽成天皇の慶長十六年(二二七二)四月)

長政は初字を長吉と云ひ、安井重次の子で、天文十六年丹羽郡西成村に生れた。出で、叔父淺野長勝の嗣となり、孫兵衛と改めた。淺野氏は清和源氏で、源經基の後裔土岐光時が、文治五年本郡淺野村に住してから姓を淺野と改めた。光時十六代の孫長勝は、織田信長に仕へて弓衆となつて居たが、甥長政を納れて嗣となし、其女(秀吉の室高臺夫人の妹)を以て之に妻した。長政は始め信長の命によつて秀吉に屬し、中國征伐に功があつたが、信長の死後は秀吉と姻戚である關係から、其帷幄に參じて内外の機密に與り、次第に聲望が高くなつた。天正十一年賤ヶ岳の役の功に依り、大津、坂本の二城を得

て京都の諸事を掌り、同十三年には五奉行の一人となり、翌十四年には秀吉、家康兩雄の和議を講じて大功があつた。それより小田原の役、奥羽平定、朝鮮征伐等到る所に、非凡の才幹と武略とを發揮し、甲府二十萬四千石を領するに至つた。

秀吉の病篤きに及び、石田三成と共に後事を囑せられ、遺命を奉じて肥前の名護屋に赴き、朝鮮出征軍を纏めて國に就かしめた。然るにやがて三成は淀君に屬して權を擅にしたので、長政は高臺夫人の近親である關係から、自然三成と不和となり、封を子幸長に讓つて武藏の府中に隱退した。關ヶ原の役起るに及び、長政は秀忠の軍に従ひ中仙道より進んだ。役後幸長は和歌山三十七萬六千石に封ぜられ、長政は養老の地として眞壁一萬石を授けられたが慶長十五年六十五歳で卒した。明治四十三年詔して從三位を贈られた。

長政は天資剛直、而も亦寛宏、よく衆を容れた人で、眞に將帥の器であつたと云はれて居る。

長政の宅址 丹羽郡西成村大字淺野にあつて、比較的よく保存せられて居る。平坦な田圃中の人家に隣接してあつて、面積は約一町歩程で、四方に濠が廻らしてある。現今は宅址の原型によつて小公園の施設をなし、舊態を偲ぶ事が出来るやうになつて居る。

(2) 淺野 幸長 ヨシ ナガ (丹羽郡淺野村。天正四年(二二二二)―後水尾天皇の慶長十八年(二二七三)八月廿五日)

長政の長子で、丹羽郡淺野村に生れ、初名を長慶と云ひ、やがて左京大夫と改め、後に紀伊守と稱した。幼時より豊臣秀吉に近侍し、天正十八年小田原征伐の役起るや、時に年十五歳、兵三千を率ゐて軍に従ひ、岩槻の城攻めに本多忠勝と共に先登して大手口を破つた。文祿の役朝鮮に渡つて、西生浦に築き頻りに敵城を陥れたが、和議成るに及んで一旦歸國した。慶長の役再び渡海し、加藤清正と共に蔚山に苦戦して、遂に明の大軍を破つた。

秀吉の薨後、石田三成と善からず、三成が徳川家康を圖らんとして兵を擧げた時には、幸長は家康に従つて小山に在つたが、直に先鋒の命を受けて西上し、岐阜を攻めて瑞龍寺の寨を陥れ、關ヶ原の戦には池田輝政と共に南宮山を壓した。戦後功に依り和歌山三十七萬六千石を領し、紀伊守となり、從四位下に叙せられた。慶長十八年三十八歳で卒した。やがて弟長晟ナガセキが家を繼ぐに及んで、安藝に封を轉じ、廣島城に治して四十二萬六千餘石を領するに至つた。

三五 蜂須賀正勝と其子家政

(1) 蜂須賀 正勝 （海部郡美和村。後柏原天皇の大永六年(二二八六)―正親町天皇の天正十四年(二二四七)五月廿二日)

大永六年海東郡蜂須賀村(今の海部郡美和村)に生れ、字は小六、後に彦左衛門と稱した。彼は太閤記にある如き野武士盜賊の首領でなく、斯波氏の後裔で、七世の孫正昭の時に尾張の蜂須賀村に來住し、

二百貫の地を領し、地名を以て姓とした。其正昭の孫が即ち正勝である。正勝は初め美濃の齋藤氏に従つたが、永祿の初め頃織田信長に仕へるに至つた。桶狭間の役にも功があつたが、姉川の合戦以來、秀吉の手に屬して活動する事となつた。それより諸所に轉戦して軍功を樹てたが、特に播磨の別所長治を攻めた時には、僅かな兵で敵を破つて拔群の功があつたので、五千石の加増を受けた。

山崎の戦後には播磨の龍野城を得て、從五位下修理大夫に任ぜられた。秀吉の四國征伐の際には、子家政と共に一萬餘騎を以て軍に従ひ讃岐に渡つて諸城を陥れ、進んで伊豫に進んだ。長曾我部元親降參の後は阿波の徳島に封ぜられ、十七萬五千石を領するに至つたが、天正十四年六十一歳で卒した。

(2) 蜂須賀家政

(永祿元年(二二一八)―明正天皇の寛永十五年(二二九八))

修理大夫正勝の嫡子で、蜂須賀村に生れた。父と共に初めは織田、豊臣二氏に仕へ、後徳川氏に従つた。賤ヶ岳の戦に功を樹て、次で紀伊の土寇を平げ、天正十三年四國征伐の時には、羽柴秀長に従つて讃岐に渡り、連りに諸城を陥れた。

同十四年、父の死後、家を繼いで徳島城の主となり、從五位下、阿波守に叙任せられた。小田原征伐の際には葦山城を攻め、証明の役起るや前後二回渡海して朝鮮半島の各地に轉戦し、終に敵の一艦を捕獲した。

關ヶ原役には、其子至鎮は東軍に従ひ、家政は國に在つて却て三成に同情した。役後、徳川氏を憚つて家を至鎮に譲り、薙髮して蓬庵と稱し、幽居したが、寛永十五年八十一歳で卒した。家政は勇武にして才略があつたと共に、よく士民を愛したので、領民は悦服して永く其堵に安んじたと云ふ。尙ほ、至鎮は大阪兩度の役に従つて功を樹てたので、淡路を加増せられ、二十五萬六千石を領するに至つた。

二六 増田長盛と長束正家

(1) 増田長盛

(中島郡大里村。後水尾天皇の元和元年(二二七五)歿)

中島郡増田村(今の大里村)の人で、小字を仁右衛門と云ふ。豊臣秀吉に仕へて祿二百石を受けた。小牧の役に先登して冑首二級を獲、始めて武名を知られた。

やがて從五位下、右衛門尉に任ぜられ、五奉行の一人となり、裁決流るゝ如しと稱せられた。文祿の役には兵二千を率ゐて半島に渡つた。同三年大和郡山城に封ぜられ、二十萬石を食むこととなり、慶長元年紀伊、和泉兩國を管理し、從四位下に進み、侍從に任ぜられた。

秀吉の薨後、幼君秀頼に仕へたが、一面徳川家康にも親近した。石田三成が密かに家康を圖らんとするや長束正家と共に之を家康に内報したが、關ヶ原役には却て三成に味方して大阪城を守つた。然る

に西軍大敗するに及び、人をして降を家康に請はしめたが、遂に赦されず、封を除かれて高野に逐はれ、次で岩槻に流された。

後年大阪の陣起りし時、家康は長盛を江戸に召して、「汝速に大阪城に到つて秀頼に兵を弭めしめよ。若し聽かざれば城中の策謀を備さに報ぜよ」と命じた。長盛は「太閤の恩に背きて不義をなすに忍びず」と辭して岩槻に屏居したが、其子盛次が大阪に與みした故を以て死を命ぜられた。時に年七十一歳。

(2) 長束正家

(中島郡稻澤町。後陽成天皇の慶長五年(二二六〇)歿)

同じく中島郡長束村(今の稻澤町)の人で、通稱を利兵衛と云つた。頗る算數を善くし、丹羽長秀に仕へて鉅萬の富を積ましむるに至つたと云ふ。

秀吉之を聞き、召し出して封一萬石を與へ、専ら貢租會計の事に當らしめた。やがて従五位下、大藏大輔に任ぜられ、五奉行の一人となり、近江水口城を得て五萬石を領するに至つた。小田原の役には軍糧の任に當り、証明の役にも軍を率ゐて渡海した。

秀吉の薨後、俄に心を家康に傾けて、三成等の計畫を内報した。而も關ヶ原の役起るや却て、西軍に黨して美濃に兵を進めたが、西軍敗るゝや身を以て逃れ、水口城に還つて自殺した。

當時、豊臣氏恩顧の大名にして、節を變じて家を全うした者の多かつたのも感心する事が出来ないが、長盛、正家の如く、操守恒なく終りを穢したのも自ら招いた罪と云はねばならぬ。

三七 堀尾吉晴

(丹羽郡大口村。後陽成天皇の慶長十六年(二二七一)六月歿)

中務少輔吉久の子で、小字は仁王丸、後、小太郎と改め、元服して茂助と稱した。丹羽郡御供所村(今の大口村)の人である。

彼は其性温順謹厚で、而も膽勇があつた。十六歳の時、夜寇を斬つて時人を驚かしたと云ふ。初め信長に仕へ、後秀吉に屬する事となつた。天正元年大阪一向宗徒の亂に、吉晴は勇敢に戦つて拔群の功があつたので、秀吉は大に感じて「汝は資性柔順、人は呼んで佛茂助と云ふが、今から鬼茂助と改めよ」と云つたと云ふ事である。以來諸所に軍功があつたから、天正五年播磨の地千五百石を得た。

同十年、秀吉が備中を征した時には、吉晴は巢雲山寨を攻めて之を抜き、同年六月光秀を天王山に討つて功を樹て、賤ヶ岳の役に馳せ參じて第三隊に屬して敵を破り、小牧の役には羽黒の故壘を守り、竹ヶ鼻を攻めて其南砦を抜き、同十三年には近江坂本より佐和山城に轉じ、邑四萬石を領するに至つた。

更に九州征伐に従つて功を累ね、十八年小田原の役には山中城を抜き、従五位下、帶刀長に任ぜられ濱松城十二萬石を得て移つた。慶長三年秀吉病むに至り、吉晴は拔擢せられて三中老の一人となつた。秀吉の薨後、石田三成等が前田利家を擁して家康を圖らんとするや、吉晴は中に入つて百方兩者を調